宮城県文化財調査報告書第253集

小屋館城跡・忍館城跡

—三陸沿岸道路 気仙沼道路建設関連遺跡調査報告書—

令和2年3月

宮城県教育委員会

小屋館城跡・忍館城跡

—三陸沿岸道路 気仙沼道路建設関連遺跡調査報告書—

序　文

平成23年3月11日に発生した東日本大震災から9年が経過しました。大きく被災した沿岸部の市町を縦貫する三陸沿岸道路は、復興の進展と地域の暮らしを支える「復興道路」と位置付けられ、令和2年度末の全線開通を目指して整備が進められています。

当教育委員会では、発掘調査基準を弾力的に運用するとともに、平成24年度から28年度までの5年間にわたり、全国から自治法巡遣による埋蔵文化財専門職員の応援を得て調査体制を強化し、復興関連事業に係る発掘調査に迅速に対応してまいりました。現在では、大規模な復興事業とそれに伴う発掘調査は収束しつつありますが、引き続き、関係機関と連携を図りながら、発掘調査の早期終了と復興事業の円滑な推進に向けて努めてまいります。

本書は、平成26～30年度と令和元年度に三陸沿岸道路建設事業に伴い実施しました気仙沼市小屋館城跡・忍館城跡の発掘調査報告書です。本書に収録された遺跡の調査報告をもって、宮城県内における三陸沿岸道路建設に係る発掘調査は終了いたします。今回の調査で得られた貴重な成果が、広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、職務環境の厳しい中、埋蔵文化財専門職員を派遣していただきました全国の自治体、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なる御協力をいただいた関係機関や地域の皆様に対し、厚くお礼申し上げます。

令和2年3月

宮城県教育委員会

教育長　伊東　昭代

例　言

1．本書は、平成 26 ～ 30 年度、令和元年度にかけて実施した三陸沿岸道路建設事業に伴い実施した小屋館城跡・忍館城跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課（平成 30 年度より文化財課）が担当した。

3．各調査の担当者等については要項に記載した。なお、平成 28 年度は東日本大震災からの復興事業に係る発掘調査として、地方自治法に基づく全国自治体からの派遣職員からの支援・協力を得ている。

4．発掘調査にあたって、気仙沼市教育委員会、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所、古谷館八幡神社、宮城県立気仙沼高等技術専門校から多大な協力をいただいた（五十音順）。

5．測量座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標Ⅹ系による。方位北は座標北を表す。

6．本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

SA：柱列跡、SB：掘立柱建物跡、SD：溝跡、SK：土坑・近世墓、
SX：集石遺構・地下室状遺構・小溝状遺構

7．遺構番号は 1 から通し番号で登録した。ただし、平場、堀跡、土塁跡など館跡の施設については、それぞれ 1 から番号を付けて登録した。

8．遺構図と遺物図の縮尺は、それぞれスケールを付して示している。

9．土色、遺物の色調は『新版標準土色帳』（小山・竹原 1994）に依拠して記載した。

10．本書は調査を担当した各調査員の協議を経て、Ⅰ～Ⅲを佐藤渉、Ⅳを鈴木啓司が執筆し、鈴木が編集を行った。

11．遺跡の航空写真は、日本特殊撮影株式会社、株式会社イビソクに委託したものである。Ⅲ－４（１）、Ⅳ－５の放射性炭素年代測定は、株式会社加速器分析研究所に委託したものである。また、Ⅲ－４（２）の人骨分析は、東北大学大学院歯学研究科　鈴木敏彦氏・波田野悠夏氏に依頼し、玉稿を賜ったものである。

12．調査成果は、現地説明会・宮城県遺跡調査成果発表会・文化財課ホームページなどでその内容の一部を公表しているが、本書と内容が異なる場合は本書がこれに優先する。

13．発掘調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。

目　次

序文
例言
目次

Ⅰ　調査の経緯……1
　1．調査に至る経緯と経過……1
　2．調査の方法……1

Ⅱ　遺跡の環境……3
　1．地理的環境……3
　2．歴史的環境……3

Ⅲ　小　屋　館　城　跡……7
　1．城跡の位置と歴史……8
　2．城跡の地形と調査経過……9
　3．発掘調査の成果……14
　4．自然科学分析……45
　5．まとめ……53

Ⅳ　忍　館　城　跡……79
　1．忍館城跡の歴史と現況……79
　2．調査の経過……80
　3．基本層序……83
　4．発見された遺構と遺物……84
　5．自然科学分析……96
　6．総括……99
　7．まとめ……102

挿 図 目 次

［Ⅰ・Ⅱ］

第１図　気仙沼市三陸沿岸道路の位置…… 1
第２図　小屋館城跡・忍館城跡と周辺の遺跡…… 4

［Ⅲ］

第１図　小屋館城跡の位置…… 8
第２図　小屋館城跡の地形…… 10
第３図　小屋館城跡の範囲と既往の調査…… 12
第４図　小屋館城跡の確認された郭と地形…… 13
第５図　基本土層…… 15
第６図　Ａ区　小屋館城跡遺構配置図…… 17・18
第７図　Ａ区　小屋館城跡全体図…… 19・20
第８図　Ａ区　堀跡１北側、整地層１・２平面図…… 21
第９図　Ｄ区　堀跡１南側、SX40 小溝状遺構群、SB42 掘立柱建物跡、SK44 土坑平面図…… 22
第10図　Ａ区　堀跡１断面図（A-A'・B-B'・C-C'・D-D'）…… 23
第11図　Ｄ区　堀跡１断面図（E ～ G）…… 24
第12図　Ｂ区　堀跡２北側、切岸１平面図・断面図…… 26
第13図　Ｂ区　堀跡２南側、SD3 溝跡、SX25 集石遺構平面図…… 27
第14図　Ｂ区　SD3 溝跡、堀跡２断面図（A ～ E）…… 28
第15図　SX25 集石遺構…… 29
第16図　SX25 集石遺構出土茶臼下臼…… 30
第17図　平場１北遺構配置図…… 31
第18図　平場１南遺構配置図…… 33
第19図　平場１南の柱穴断面図…… 34
第20図　SB42 掘立柱建物跡平面図・断面図…… 34
第21図　Ｄ区上段　遺構配置図…… 35
第22図　Ｄ区上段　SA38・39 柱列跡、SD36・37 溝跡、堀跡２断面図…… 36
第23図　SK11 ～ 18・20 近世墓平面図・断面図・出土遺物…… 39
第24図　SK19 近世墓平面図・断面図・出土遺物…… 40
第25図　SX24 地下室状遺構平面図・断面図…… 41
第26図　SX40 小溝状遺構群平面図・断面図…… 42
第27図　SK4・6・7・8・10・22・23・44 土坑平面図・断面図…… 43
第28図　暦年較正年代グラフ（参考）…… 48
第29図　小屋館城跡城館期全体図…… 53
第30図　小屋館城跡の変遷…… 55
第31図　小屋館城跡復元図…… 57
第32図　小屋館城跡の周辺環境…… 60

［Ⅳ］

第１図　忍館城跡略図…… 80
第２図　忍館城跡縄張図…… 81
第３図　調査区の位置…… 82
第４図　Ｂ区の遺構配置図…… 85
第５図　平場１平面図・断面図…… 86
第６図　土塁跡１平面図…… 87
第７図　土塁跡１断面図…… 88
第８図　堀跡１平面図…… 89
第９図　堀跡１断面図…… 90
第10図　堀跡２平面図…… 91
第11図　堀跡２断面図…… 92
第12図　堀跡２出土遺物…… 93
第13図　堀跡３平面図・断面図…… 94
第14図　Ａ区平面図…… 95
第15図　暦年較正年代グラフ（参考）…… 98
第16図　忍館城跡東端部の構造…… 99

挿表目次

［Ⅲ］

表１　三陸沿岸道路関連遺跡の調査歴…… 2
表２　小屋館城跡・忍館城跡と周辺の遺跡表…… 5
表３　SX25 集石遺構石材重量…… 29
表４　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値）…… 47
表５　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）…… 48
表６　小屋館城跡出土 SX25 人骨永久歯の計測値（mm）…… 50

［Ⅳ］

表１　その他の遺構一覧…… 95
表２　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値）…… 98
表３　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）…… 98

図版目次

〔Ⅲ〕

写真図版１　小屋館城跡周辺の状況…… 63
写真図版２　小屋館城跡と調査区の全景…… 64
写真図版３　小屋館城跡の周辺と三陸沿岸道路…… 65
写真図版４　A区・B区全景と調査前の状況…… 66
写真図版５　A区　堀跡１…… 67
写真図版６　D区　堀跡１（１）…… 68
写真図版７　D区　堀跡１（２）…… 69
写真図版８　B・C区　堀跡２（１）…… 70
写真図版９　B・C・D区　堀跡２（２）・整地層・B区の土坑…… 71
写真図版 10　B区　SD3 溝跡、SX25 集石遺構…… 72
写真図版 11　C区　平場１北と近世墓群…… 73
写真図版 12　C区　平場１南と掘立柱建物跡…… 74
写真図版 13　D区　堀跡２、柱列跡、溝跡…… 75
写真図版 14　D区、市道部分、SX25 集石遺構出土遺物…… 76
写真図版 15　近世墓、その他出土遺物…… 77

〔Ⅳ〕

写真図版１　忍館城跡周辺の状況…… 103
写真図版２　遺跡と周辺の様子（3D 復元）…… 104
写真図版３　遺跡・調査区の全景（１）…… 105
写真図版４　遺跡・調査区の全景（２）…… 106
写真図版５　B区遺構の全景…… 107
写真図版６　B区土塁跡１（１）…… 108
写真図版７　B区土塁跡１（２）…… 109
写真図版８　B区堀跡１…… 110
写真図版９　B区堀跡２…… 111
写真図版 10　B区堀跡１・２・３、平場１…… 112

Ⅰ　調査の経緯

1．調査に至る経緯と経過

気仙沼周辺の三陸沿岸道路（東日本大震災以前は三陸縦貫自動車道）建設事業に係る発掘調査の経緯については、宮城県文化財調査報告書第247集に詳しく記載されているため（生田ほか編2017）、ここでは今回報告する小屋館城跡・忍館城跡に関連する部分のみを記述し、他の遺跡を含めた詳細な調査歴については、表1にまとめた。

第1図　気仙沼市三陸沿岸道路の位置

三陸沿岸道路「気仙沼道路」は、気仙沼中央IC（気仙沼市松崎高谷）から唐桑南IC（仮）（気仙沼市唐桑町只越）を結ぶ全長約9kmの自動車専用道路で、平成23年度に事業化された。この路線が遺跡内を通る計画が示されたことから、建設工事に合わせて平成26年度から令和元年度にまで順次発掘調査を実施することとなった。調査の経過については、以下に小屋館城跡と忍館城跡に分けて記述する。

小屋館城跡　平成26・27年度は、本線取り付け道路と橋脚部分の調査を実施した。平成28年度から本線部分の調査を開始したが、用地取得の関係から3年に分けて本発掘調査を実施した。平成30年度の調査を以て、事業地内の調査をほぼ終えたが、遺跡内を通る市道部分は生活道路となっていることから、付け替え工事の完了後に調査を行うこととした。市道付け替え工事の完了した令和元年度には、市道部分の調査を行い、小屋館城跡関連の調査を終了した。

忍館城跡　平成28年度に分布調査を実施し、縄張り図を作成した。平成29年度に本発掘調査を実施し、事業地内の調査をほぼ終えたが、遺跡内を通る道路部分は生活道路となっていることから、付け替え工事の完了後に調査を行うこととした。その後、対象箇所の調査が可能となった令和元年度に道路部分の調査を行い、忍館城跡関連の調査を終了した。

2．調査の方法

復興事業に伴う発掘調査の方法等については、宮城県教育委員会が定めた平成23年6月3日付け文第268号「東日本大震災の復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて（通知）」に基づき、宮城県発掘調査基準を弾力的に運用することで調査期間の短縮を図り、切土工事部分（掘削が及ぶ範囲）を本発掘調査の対象とし、盛土工事部分については、遺構検出と部分的な精査（遺構の断割り等）にとどめた。

大規模な切土工事による路線部分は、本発掘調査を行い全ての遺構を完掘した。主に盛土工事による付帯工事部分は確認調査を行い、遺構の有無を確認している。遺構があった部分に関しては、遺構の広がりを確認して、部分的な精査にとどめた。

平面図は主に電子平板で作成し、必要に応じて縮尺20分の1の手書き実測図、オルソによる写真実測で作成した。断面図は、縮尺20分の1の手書き図面で作成しているが、小屋館城跡平成28年度調査では、長大で高低差のあるベルトでオルソによる写真実測で作成した。

写真記録は、1230～2020万画素のデジタル一眼レフカメラを使用した。航空写真は、業者委託で行いラジコンヘリ、ドローンなどを使用してデジタルカメラとフィルムカメラによる撮影を行った。

遺構番号は、館跡に伴い性格が分かるものについては、堀跡1・2…、土塁跡1・2…のように遺構ごとに1からつけた。その他の遺構については種類に関係なく1から通し番号を付けた。ピットは、遺構番号とは別に1から通し番号を付けた。

表1　三陸沿岸道路関連遺跡の調査歴

年度	遺跡名	調査基準	調査期間	対象面積(㎡)	調査面積(㎡)	主な遺構	主な遺物	時期	報告書
H20	石川原遺跡	通常	12/1～12/16	900	54	なし			既刊(既第247集)
	道貫館跡	通常		2,000	256	なし	磁器	近世	
	長平遺跡	通常		6,000	741	土坑		中近世	
	高谷貝塚	通常		600	30	なし			
H22	石川原遺跡	通常	11/1～11/9	3,000	150	なし			
	道貫館跡	通常		2,300	450	なし			
H24	寺沢遺跡	復興	11/5～11/13	4,800	310	なし			
	石川原遺跡	復興	9/10～9/14	3,500	375	土坑、ピット			
H25	かわト遺跡	復興	2/18～2/19	600	140	なし			
H26	御名沢貝塚 御名沢古墳群	復興	7/28～8/8	7,410	155	なし			
	小屋館城跡	復興	11/17～11/19	1,080	150	なし			本書
H27	小屋館城跡	復興	6/23	450	39	なし			
	石川原遺跡	復興	12/14～12/18	4,000	510	土坑、ピット	縄文土器	縄文晩期	
H28	石川原遺跡	復興	4/12～6/17	5,200	955	土坑、ピット	縄文土器、石器	縄文後期	既刊(既第247集)
	御名沢貝塚 御名沢古墳群	復興	6/21～6/27	2,900	2,900	なし			
	小屋館城跡	復興	7/4～12/2	6,740	2,812	堀跡、溝跡	陶器、石器、骨	中世、近世	本書
H29	小屋館城跡	復興	6/5～8/31	1,000	500	堀跡、近世墓、掘立柱建物跡	陶磁器、古銭、鏃	中世、近世	
	忍館城跡	復興	8/28～12/21	6,600	2,700	土塁跡、堀跡	礫石、炭化米	中世	
H30	小屋館城跡	復興	4/23～7/31	2,000	1,700	堀跡、柱列跡、掘立柱建物跡		中世、近世	
R1	小屋館城跡	復興	6/3～6/5	180	97	堀跡		中世	
	忍館城跡	復興	8/6～8/7	30	28	土塁跡		中世	

Ⅱ　遺跡の環境

1．地理的環境

位置　小屋館城跡・忍館城跡が所在する気仙沼市は宮城県域の北東部、県庁所在地の仙台市から北北東約 130km に位置する。北は岩手県陸前高田市、西は岩手県一関市ならびに宮城県登米市、南は宮城県本吉郡南三陸町と接し、東は太平洋に臨む。海岸線に沿って幹線道路である国道 45 号線が市域を縦断し、現在は BRT によって運行されている JR 気仙沼線の路線が並走する。海岸線には、気仙沼漁港をはじめ多くの漁港が立地しており、特産品のフカヒレをはじめとする幅広い水産業が発展している。

小屋館城跡は気仙沼市の市街地から南へ約 4 km、国道 45 号バイパスと旧国道 45 号線が合流する交差点から北約 0.5km に位置する。忍館城跡は市街地から北東へ約 2 km、気仙沼湾の最奥に位置する。周辺は、東日本大震災で壊滅的な被害を受けており、道路のかさ上げ、防潮堤の建設、区画整理など大規模な工事が行われ、景観が大きく変化している。

地形　気仙沼市の地形は、大きくみると、北上山地によって占められる西側と、丘陵、谷底平野や沖積地などの低地、リアス式海岸がみられる東側に分けられる。市域の大半を占めるのは、大森山（標高 760m）や長の森山（標高 487m）などからなる北上山地とその支脈である。山地を水源とする河川は西から東に向かって流れ、太平洋に注ぐ。丘陵の間には、それらの河川によって開析された谷底平野や沖積地がわずかに広がる程度であり、広い平野は多くない。

2．歴史的環境

小屋館城跡と忍館城跡の所在する気仙沼市域は、湾や低地に面した丘陵端、丘陵上に縄文時代の貝塚や散布地として登録される遺跡と中世の城館跡が数多く知られている。震災以前は、発掘調査が少なく実態の判明する遺跡は限られていた。近年の復興事業に伴う大規模な発掘調査で多くの遺跡が失われた反面、今まで知られることのなかった当地の歴史が遺跡をとおして明らかになりつつある。

縄文時代　前期から晩期の遺跡が知られている。震災後、防災集団移転に伴って調査された波怒棄館遺跡では、前期～中期初頭の貝層や包含層が確認されている。この貝層から出土したマグロ骨と解体に用いたとみられる粘板岩製ヘラ状石器は、縄文時代の生業を理解するうえで重要な資料である。台の下遺跡では中期後葉～末葉の複式炉を伴うものを含む竪穴建物跡が 10 軒以上、掘立柱建物跡などが調査され、集落のまとまった調査例として注目できる。後期の遺跡は、田柄貝塚（48）が古くから知られており、骨角器などが出土している。

弥生時代　田柄貝塚などで弥生土器が確認されている程度で、遺跡数も少なく、遺構は発見されていない。

第２図　小屋館城跡・忍館城跡と周辺の遺跡

表2　小屋館城跡・忍館城跡と周辺の遺跡表

NO.	遺跡名	種別	時代	備考	NO.	遺跡名	種別	時代	備考
1	小屋館城跡	城館	中世	城主熊谷左京進	27	八幡館跡	城館	中世	城主千葉藤左衛門
2	忍館城跡	城館	中世	城主熊谷信義	28	茂衣館跡	城館	中世	
3	佐名館跡	城館	中世		29	新庄館跡	城館	中世	千葉氏門守居住
4	白鳥城跡	城館	中世	城主千葉右衛門	30	長崎城跡	城館	中世	城主熊谷備中
5	愛宕館跡	城館	中世		31	気仙沼古館跡	城館	中世	
6	両沢遺跡	散布地	中世	常滑焼三筋壺が出土。	32	谷地館跡	城館	中世	
7	興福寺裏の館跡	城館	中世		33	館森館跡	城館	中世	
8	興福寺前の館跡	城館	中世		34	石兜貝塚	貝塚	縄文・中世	
9	小小尻館跡	城館	中世		35	和野館跡	城館	中世	
10	松崎城跡	城館	中世	千葉右衛門居住	36	大館跡	城館	中世	
11	浄念寺北館跡	城館	中世		37	八幡館跡	城館	中世	
12	浄念寺南館跡	城館	中世		38	相馬館跡	城館	中世	
13	岩崎館跡	城館	中世		39	猫啼東館跡	城館	中世	
14	東八幡館跡	城館	中世		40	末永館跡	城館	中世	
15	西八幡前の館跡	城館	中世		41	最知中館跡	城館	中世	
16	刈米館跡	城館	中世		42	塚館跡	城館	中世	
17	小南館跡	城館	中世		43	古館跡	城館	中世	
18	陰山館跡	城館	中世		44	猫啼西館跡	城館	中世	
19	細浦城跡	城館	中世	城主千葉長門守	45	金成館跡	城館	中世	
20	鍋越山館跡	城館	中世		46	大島古館跡	城館	中世	
21	月館城跡	城館	中世	城主熊谷左近	47	赤岩供養仏	供養仏	中世	嘉暦三年の紀年名、現存せず
22	府中館跡	城館	中世		48	田柄貝塚	貝塚	縄文・弥生	
23	中館跡	城館	中世	城主熊谷主馗	49	高谷貝塚	貝塚	縄文	
24	赤岩城跡	城館	中世	城主熊谷太郎左衛門	50	星谷遺跡	集落	古代	
25	赤岩館経塚	経塚	近世	経石出土。寛保三年築造。	51	緑館遺跡	集落	古代	
26	平館跡	城館	中世		52	市史跡南最知貝塚	貝塚・集落	縄文・古代	

※城主の名前は「仙台領古城書上」による。

古墳時代　古墳時代前期から後期の遺跡は、全く知られていない。古墳時代終末期の竪穴建物跡は、南最知遺跡（宮城県教委 1979）と、緑館遺跡（気仙沼市教委 2015）で 1 軒ずつ見つかっている。これらの遺跡は隣接しており、周辺に集落が展開するとみられる。この時期の墳墓には、三島古墳群と塚沢横穴墓群がある。

古代　奈良時代の遺構や遺物は断片的ではあるが、星谷遺跡（50）、緑館遺跡（51）、市史跡南最知貝塚（52）、杉の下南遺跡など各所で確認されており、これまで明瞭ではなかった古代の遺跡が多数確認されている。また、台の下遺跡 9 区では平安時代の竪穴建物跡 6 軒が調査され、その中に鍛冶炉を伴うものがあり注目される（気仙沼市教委 2018）。こうした状況は、気仙沼市域にとどまらず、現在の岩手県沿岸部で三陸沿岸道路や災害復興に係わる発掘調査で、奈良・平安時代の鍛冶・製鉄遺構のある集落遺跡が明らかになっており、古代の三陸沿岸地域の様相が明らかになりつつある。

中世　本吉郡のうち気仙沼地域は文治五（1185）年の奥州合戦の後、熊谷直家（直実の息子）が拝領しており、直家の息子である直宗が貞応二（1223）年に当地へ下向したといわれている（気仙沼市史編さん委 1988）。熊谷氏はその後、葛西氏との抗争の末に貞治二（正平十八）年（1363）に臣従するものの、天正十八（1590）年の奥州仕置により葛西氏が没落するまで当地を治め続けており、市内に所在する多くの城館跡を中心とした中世の遺跡は熊谷氏に関連するものと考えられる。

城館跡は、平野や海に面した丘陵、海岸段丘の突端に立地するものが多く、約 80 か所が知られている。多数の城館跡が知られている一方で、発掘調査はほとんど行われておらず、集落遺跡や生産遺跡などは見つかっていないため、この時代の様相は不明な点が多い。

発掘調査によって遺構や遺物が確認された城館跡は、猿喰東館跡と陣山館跡がある。猿喰東館跡は、小屋館城跡の南約2㎞に位置する。湾に面した海岸段丘の東端に立地し、三段の平場がみられる。このうち、中段の平場から堀と土塁が見つかっている（気仙沼市教育委員会 1998）。また、近年の調査では上段の平場から堀跡、土塁跡、溝跡、柱列跡、通路跡、土坑などが見つかっている（気仙沼市教育委員会 2014）。陣山館跡は、気仙沼湾を一望する安波山から延びる丘陵上に立地する。忍館城跡は鹿折川を挟んだ西約 1.2㎞と目視できる位置にある。頂部を囲む5か所の郭から堀跡、土塁跡、整地層、井戸跡、柱列跡、掘立柱建物跡などが見つかっている。気仙沼湾の最奥部にあたる当地は、天正 13（1588）年の浜田広綱の乱では、主戦場になっており、陣山館跡が浜田軍側の拠点になった可能性が指摘されている（気仙沼市史編さん委員会 1998）。津谷館跡では、主郭にあたる丘陵頂部で 153 基のピットが見つかり、そのうち 95 基で柱痕跡状のプランが確認されている（石川・鈴木 2017）。これら全てが城館跡に伴うものではないにしても、建物の存在やその建て替えをうかがわせる状況が確認できる。城館以外では、両沢遺跡（6）、赤岩磨崖仏（46）があげられる。両沢遺跡では、鹿折川右岸の石灰岩露頭にある洞窟内から 12 世紀末頃の常滑焼の三筋壺が発見されている（気仙沼市教委 1995）。赤岩磨崖仏はかつて赤岩城跡の南麓に所在したが、昭和 37（1962）年に採石工事により消滅した。なお、工事に先立って磨崖仏の写真が記録されている（宮城県教委 1981）。この磨崖仏については、安永九（1780）年の『風土記御用書出』の本吉郡北方月館村の条によると、熊谷彌惣右衛門の所有地内に大岩があり、「大檀那 左兵衛尉 藤原行信」の発願による嘉暦三（1328）年銘の阿弥陀如来・地蔵菩薩が彫られた磨崖仏があるとの記述がみられ（宮城県史編纂委 1958）、前述の写真記録と内容が一致している。

Ⅲ 小 屋 館 城 跡

調査要項

遺 跡 名：小屋館城跡（宮城県遺跡地名表登録番号 59049　遺跡記号 YG）
所 在 地：宮城県気仙沼市松崎中瀬
調査原因：三陸沿岸道路建設
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課（現　宮城県教育庁文化財課）
調査協力：国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所、NEXCO 東日本、気仙沼市教育委員会、古谷館八幡神社

調査年度	調査地点	面積（㎡）		期間	調査員	作業員
		調査	対象			
平成 26 年（1 次調査）	沢 3 西側	150	1080	11 月 17 日～11 月 19 日	高橋栄一、村田晃一、齋藤和機	
平成 27 年（2 次調査）	沢 2 周辺	39	450	6 月 23 日	小野章太郎	
平成 28 年（3 次調査）	A・B区	2730	6700	7 月 4 日～12 月 2 日	生田和宏、樽田恵隆、佐藤渉、須田正久（原馬県教委より派遣）、永直裕和（兵庫県教委より派遣）	阿部喜久子、阿部常雄、遠藤京子、遠藤砂子、小野寺正雅、小野寺廣孝、川邉某娘子、菅野良子、木村敏男、熊谷照秋、熊谷幸子、熊谷節子、小松咲代、齋藤笑子、斉藤善一、佐藤京子、佐藤吉正、畠山幸子、森谷利男、吉田日出勝
平成 29 年（4 次調査）	C区	500	1000	6 月 5 日～8 月 31 日	猪股清和、鈴木啓司、佐藤渉	小野寺廣孝、菅野良子、木村敏男、熊谷幸子、小松咲代、齋藤笑子、斉藤善一、佐藤京子、佐藤吉正、畠山健治、畠山幸子、森谷利男、吉田日出勝
平成 30 年（5 次調査）	D区	1700	2000	4 月 23 日～7 月 31 日	猪股清和、初鹿野博之、佐藤渉	小野寺廣孝、木村敏男、小松咲代、齋藤笑子、高橋勇志、畠山健治、畠山幸子、吉田日出勝
令和元年（6 次調査）	B-D 区間	97	180	6 月 3 日～6 月 5 日	黒田智章、鈴木啓司	

1．城跡の位置と歴史

（1）位置

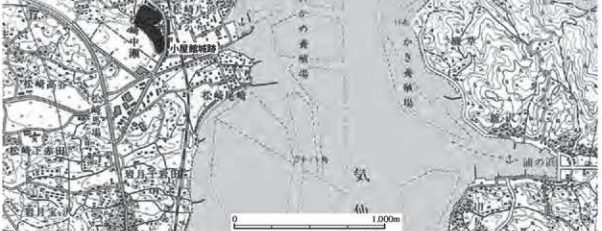
小屋館城跡は、気仙沼市松崎中瀬に所在する。気仙沼市の市街地から南に約２km、国道 45 号線と県道 26 号線が合流する交差点から約 0.5km 北の丘陵先端に位置する（第１図）。丘陵東裾に沿って県道 26 号線が走り、その東側には県道と並走する JR 気仙沼線松岩駅がある（現在はバス高速輸送システム BRT で運行）。

城跡は、北上山地から気仙沼湾に向かって延びる丘陵から枝状に派生した丘陵先端に立地、北から西に安波山、府中山、室根山など北上山地の山々、南は海岸線と丘陵、東は気仙沼湾を挟んで大島を臨む。東の海岸線までの距離は、およそ 500m である。

城跡として登録された範囲は、東西約 170m、南北約 350m で、標高は丘陵頂部で 19 ～ 21m、低地部分で１～２m、比高は 20m ほどある（第２図）。比較的急峻な斜面をもつ丘陵だが、頂部は比較的なだらかで、北西に向かって徐々に標高を高める。城跡の中央部には、東から深い沢（沢３）が入り、城跡を大きく北と南に分ける。南半の丘陵頂部ほぼ中央には古谷館八幡神社が鎮座する。北半は北西部と中央部に北側からそれぞれ沢（沢１・２）が入り込む。

（2）歴史

「小屋館城」の名称の初見は、延宝年間（1673 ～ 1681）に領内の城館を幕府に報告することを目的に編纂された『仙台領古城書上』であり、「山一　小屋館城　同十七間七十八間城主熊谷左京進」の記載がある。安永元（1772）年に成立した『封内風土記』の松崎邑の項には、「號八幡館。傳云。葛西家臣。熊谷左近諱不傳。」とあり、片濱や尾崎など今も残る周辺の地名とともに小屋館も確認できる。これらから『封内風土記』の「八幡館」が『仙台領古城書上』の「小屋館城」にあたり、現在



第１図　小屋館城跡の位置

の古谷八幡神社が鎮座する丘陵が城跡と推定できる。

小屋館城跡の築城・廃城の年代を明示する史料はない。しかし、『気仙沼市史』（気仙沼市史編さん委員会 1988）や『気仙沼地方熊谷家譜集成』（NSK 地方出版 1978）に収められた熊谷氏等の系図史料に若干の記載がある。史料には「大椚系図」、「沖系図」、「松岩古谷舘八幡系図」などがある。いずれも由緒が確かでない点に難があるが、ある程度のことはうかがえる（各系図は『気仙沼地方熊谷家譜集成』による）。

築城については「松岩古谷舘八幡系図」に第一世の覚永が応永２（1395）年没とあり、それ以前に遡る。また、「大椚系図」に熊谷直定が「本吉郡松崎村舘主元祖」、「沖系図」に熊谷直景が「松崎」の「村主」となったことが記されている。両系図の人名や内容には一部異動もあるが、直定と直景が葛西氏と争った熊谷直時の兄弟である点は共通している。直時については、建武二（1333）年の戦功が記されており、直定の「松崎村舘主」、直景の「松崎」の「村主」は、この前後と読み取れる。築城は 14 世紀前半から遅くとも 14 世紀後半とみられる。

15 世紀の動向は史料にみえないが、16 世紀前半には「松岩古谷舘八幡系図」に「第十一世　熊谷兵庫重直　本吉郡松崎城主領地松崎一村天文四年六月十三日卒」の記載があり、松崎城主の存在が知られる。また、「第十二世　熊谷左京進信直　天文十年落城当城古名八幡舘月舘後熊谷の居城にて熊谷舘と号す」の記載もあり、天文十（1541）年に落城したことが記されている。さらに、江戸時代の成立とみられる『葛西真記録』には「同苗（熊谷）左京　同松崎邑主」とあり、城主として熊谷左京進、あるいは左近、左京など類似する人名がみえる。廃城の時期は、「松岩古谷舘八幡系図」にある 1541 年、遅くとも熊谷氏の主の葛西氏が没落した 1590 年頃と推定できる。

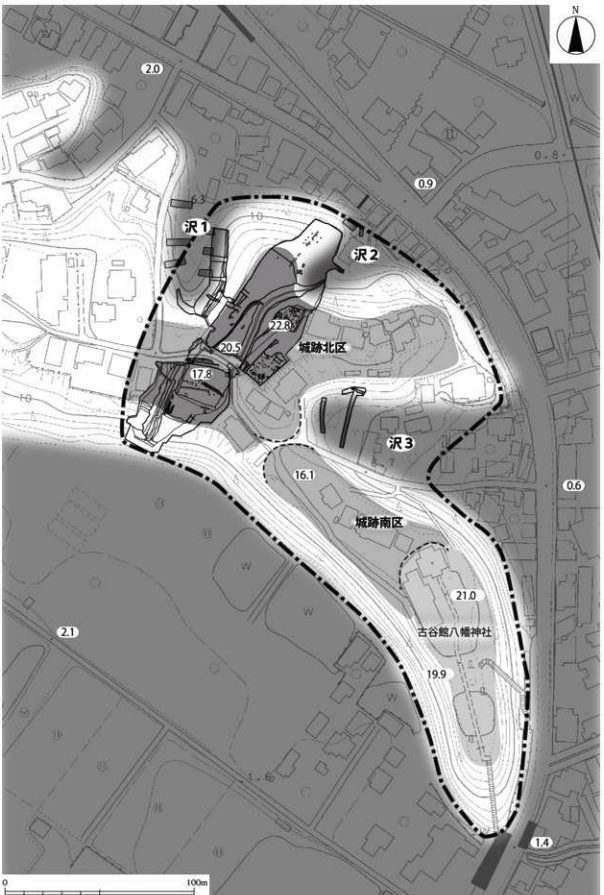
２．城跡の地形と調査経過

（１）地形

1960 ～ 1970 年代に仙台領内の城郭を悉皆的に調査した紫桃正隆は、古谷館八幡神社境内の平地を本丸、その西側にとりつく一段低い台地を二の丸として、「総合的に評すれば、東西一三〇米、南北一〇〇米ほどの山城。」とした（紫桃 1978）。その範囲は、現在城跡として登録されている範囲の南半にあたる。前節で述べたように、城跡は東から入り込む沢３によって大きく北半と南半に分けられる（第２図）。また、北半と南半では丘陵が延びる方向が異なり、北半は北西―南東方向、南半は南北方向に延びて丘陵末端に至る。以下では、紫桃が本丸並びに二の丸とした南半を城跡南区、紫桃が触れていない北半を城跡北区と呼称して、それぞれの地形についてみていく。

城跡南区は、神社の鎮座する標高約 21m の丘陵頂部を最高所として、東・南・西は比高 15 ～ 20m ほどで低地に面す。密な等高線からも明らかなように、頂部と低地の間は急峻な斜面である。一方、神社の北側は高低差約３m の崖となっており、その北側に延びる標高 16 ～ 17m の痩せ尾根上の丘陵平坦面を介して城跡北区と連なる。紫桃の言う二の丸にあたる。

城跡北区は、城跡南区から続く尾根筋と、そこから北側に広がり、東側を沢３、北側を沢１で挟ま



第２図　小屋館城跡の地形

れた丘陵からなる。また、中央部には北側から沢２が入る。丘陵頂部の周囲は、北西部の尾根筋と沢を除いて、城跡南区と同じく急峻な斜面を介して低地に面しており、比高は約 15m ある。丘陵頂部の最高所は 22.8m である。

過去に撮影された航空写真をみると、米軍による 1947 年撮影の写真では、高高度からの撮影のため、城跡内の詳しい様子までは分からないものの、宅地化する前の城跡北区や周辺の土地利用の様子が見て取れる。国土地理院による 1977 年の航空写真では、平場が並ぶ様子や調査で堀を確認した位置に樹木が並び、地境になっている様子がみられる（写真図版１）。調査前の状況は、主に宅地と畑、一部が雑木林と竹林であった。今回の調査で堀を確認した位置は畑や宅地であり、平坦であった（第４図）。

（２）調査区と調査経過

調査対象地は、主に城跡北区にあたる（第３図）。三陸沿岸道路は、この場所を北東から南西に貫くルートで建設され、工事個所には道路敷本線部分（以下、本線部分）のほか、本線橋台部分、盛土等による付帯工事部分、取付き道路部分が含まれる。調査は、それらの工事にかかわる遺跡範囲の全面と隣接地を対象とし、平成 26 年度からトレンチによって遺構の有無を確認しながら進め、遺構を発見した場合は面的に調査区を広げる方法で実施した。

その結果、平成 26・27 年度の調査では、近世の溝１条を確認したのみで遺物も確認されなかったが、平成 28 年度以降の調査では、堀をはじめとする城跡に伴う遺構を検出したため、調査区を広げるとともに、工事内容、本線工事部分を横断する市道、地形から調査区をＡ～Ｄの４つに分けた。

Ａ区：付帯工事部分で広げた調査区。地形的には沢１東側の城側斜面にあたる。

Ｂ区：市道から北東側の本線部分の調査区。城跡北区の丘陵頂部から一段低い平坦面と沢２の西側斜面にあたる。

Ｃ区：丘陵頂部の平坦面で、市道北東側の本線（Ｃ区北）と取付き道路（Ｃ区南）からなる調査区。

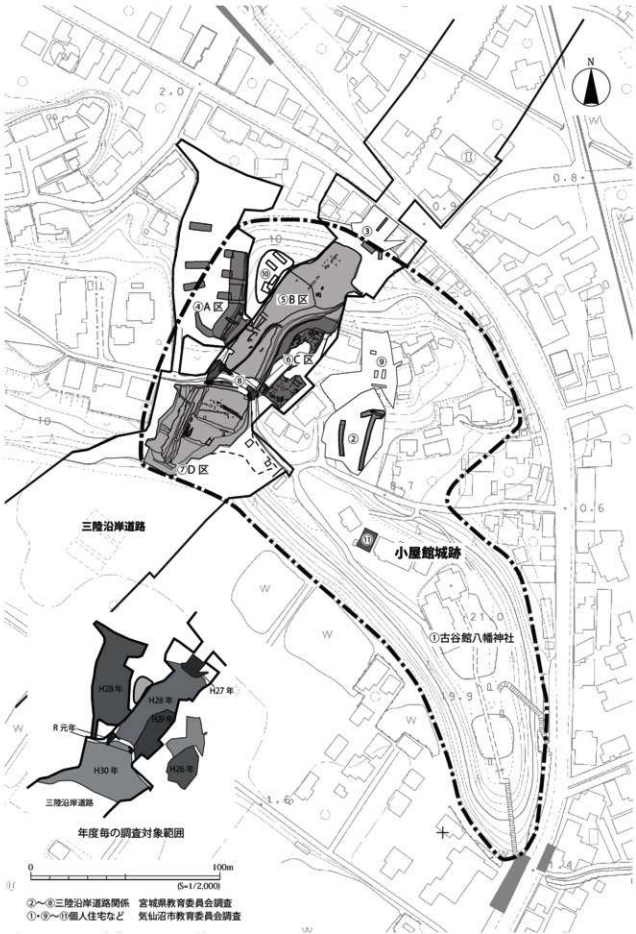
Ｄ区：市道南西側の本線部分の調査区。Ｂ区から続く平坦面と南西に下る斜面にあたる。

平成 26 年度（１次調査）（第３図 - ②）

本線道路建設に先立つ取付き道路の工事に伴い、沢３で 11 月 17 日～ 19 日に調査を実施した。丘陵緩斜面に T1 ～３のトレンチを設定、T1 で近世以降の溝１条を検出したが、T2・３では遺構・遺物は検出されず、城跡に伴う遺構・遺物は認められなかった。

平成 27 年度（２次調査）（第３図 - ③）

本線橋台の建設に伴い、城跡北区北東の丘陵裾と低地部の調査を６月 23 日に実施した。丘陵裾に T4・T5、低地部に T6 の計３本のトレンチを設定し、T4 では表土直下で斜面崩落土、その下で地山を確認した。T5 では現代の造成によって地表下２m 以上が盛土となっており、T6 では表土直下で盛土、地表下 1.1m で湿地性の粘土層を確認した。いずれのトレンチでも遺構・遺物は認められなかった。



第３図　小屋館城跡の範囲と既往の調査

平成 28 年度（3次調査）（第3図 - ④・⑤）

沢1と城側の斜面（A区）、丘陵頂部から一段低い平坦面（B区）を対象とし、7月4日から調査を開始した。沢1では6本のトレンチを設定したが、遺構・遺物はみられなかった。城側の斜面では堀跡1を検出したことから、調査区を広げてA区とし、堀跡の延びを確認した。その精査については、盛土施工による確認調査部分のため、部分的に5か所で底面まで掘り下げて、深さや断面形状を確認するに止めた。丘陵頂部から一段低い平坦面では、各所にトレンチを設定して遺構の分布を確認したうえで調査区を広げてB区とし、最終的に堀跡2、整地層、溝跡、土坑などを検出した。B区では記録保存のための本発掘調査を実施し、12月2日に調査を終了した。

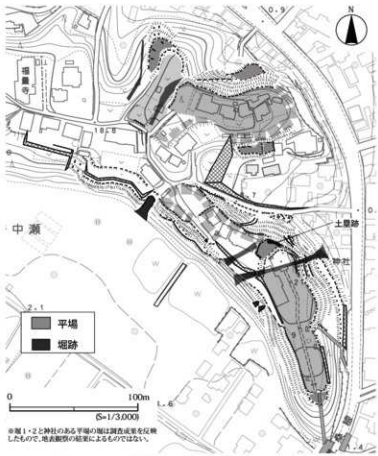
これらの調査期間中、8月22日～24日に調査区を含む城跡全体の縄張り図を作成し、調査が進んだ10月25日にはラジコンヘリコプターによる空中写真を撮影、10月30日には現地説明会を開催した。また、8月1日には、群馬県からの派遣職員須田の案内の元、群馬県桐生高等学校地歴部の教諭と生徒11人が城跡の見学と発掘体験を行った。

平成 29 年度（4次調査）（第3図 - ⑥）

丘陵頂部にあたるC区の調査を6月5日から実施し、平場1、多数の掘立柱建物跡、土坑のほか近世墓群などを確認した。遺構の精査は、工事予定に合わせて取付き道路となるC区南から優先的に行い、7月末にその調査を終了して、引き渡しを行った。続いて、C区北の精査を進め、8月3日に空中写真の撮影、8月5日には現地説明会を開催したうえで、8月中頃に全ての調査を完了した。

その後、忍館城跡への移動とその調査期間を挟んで、12月4日～15日には市道南西側（D区）についてトレンチによる調査を行った。

その結果、A・B区からの堀跡1・2の延長を確認したが、現況の平坦面と南西側斜面の大半が盛土による造成であることが判明し、調査区を広げた本発掘調査は次年度に実施することとしてトレンチを埋め戻した。



第4図　小屋館城跡の確認された縄張と地形

平成 30 年度（５次調査）（第３図 - ⑦）

４月 23 日から市道南西側の本線部分をＤ区として調査を開始、前年度に想定した量を上回る盛土を一時中断を挟んで７月 12 日までかけて除去した。その結果、Ｄ区では後世の切り盛りによる大規模な造成が行われており、もとの斜面を削って上・中・下段の平坦面として利用されたのち、２回以上の盛土を経て現代の平坦面と斜面が造成されたことが判明した。また、Ｄ区中段東側でⅡ層によって埋め戻された沢４を確認した（第６図下）。盛土の除去と並行して遺構の確認作業を進めたところ、堀跡１・２の延長のほかに、上段平坦面で柱列跡と溝跡、中段平坦面で小溝状遺構群を確認した。それらの遺構については、盛土の除去と並行して精査を実施した結果、比較的早く調査が進み、７月 19 日には全体の空中写真撮影、同 21 日には現地説明会を開催したうえで、同 24 日に調査を終了した。ほかに調査期間中の６月５～７日には北側の市道で三陸沿岸道路建設に伴う水道管の止水工事があり、工事立会も行っている。

令和元年度（６次調査）（第３図 - ⑧）

６月３日からＢ・Ｃ区とＤ区の境となっている市道のうち、本線部分を対象として調査を開始した。市道建設に伴う盛土を除去したところ、堀跡１・２や溝跡を検出した。堀跡１は事業区域の西端、堀跡２は東端に所在するため、南北に延びる堀跡の東西両端が確認できた範囲はわずかであった。精査の結果、堀跡は大部分が近現代の盛土によって埋め戻されていることが分かった。遺物は出土しなかった。遺構を掘りあげて６月５日に調査を終了した。今回の調査をもって、三陸沿岸道路建設に係る小屋館城跡の調査が完了した。

以上のほか、調査区の周辺では平成８年度に行われた古谷館八幡神社の社殿移築等に伴う発掘調査をはじめとして、個人住宅建築や水道工事に伴う調査が気仙沼市教育委員会によって行われていることを付記しておく（第３図 - ① ⑨ ⑩ ⑪）。

３．発掘調査の成果

（１）基本土層（第５図）

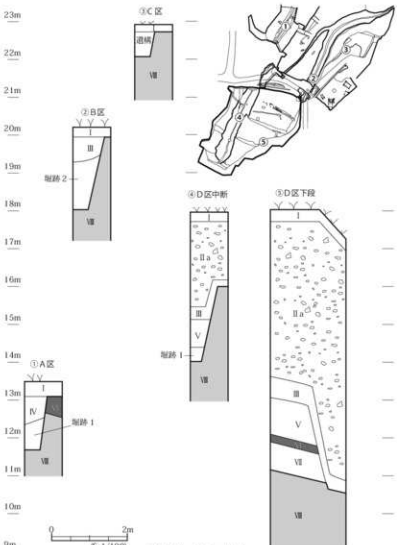
全体的な傾向として、宅地や畑として利用されていた平場と丘陵頂部は削平が著しく、表土直下 10 ～ 30cm 程度で地山（Ⅷ層）となる。堀跡などを含む窪んだ地形の場所は、盛土によって平坦にされており、盛土には、周囲の地山に由来するもの（Ⅱｂ層）と、客土によるもの（Ⅱａ層）がある。平場や丘陵頂部を削平した土や客土で盛土を行い、平坦面を広げてきた状況がみられた。

Ⅰ層：表土　耕作土や砕石などからなる。
Ⅱ層：現代の造成にかかわる土。Ｄ区に分布する。
Ⅱａ：主に黄褐色や褐色の拳大～人頭大の岩盤ブロックからなる。Ｄ区全域で認められ、南側で特に

厚く堆積しており、最大で約７ｍあった。調査区の地山や周辺の露頭で確認できないことから客土と判断される。

Ⅱｂ：黄褐色や褐色の地山由来の土からなる。堀跡１を境にしたＤ区西側全域とＤ区東側の一部で確認した。

Ⅲ層：Ⅱａ・Ⅱｂ層による造成前の旧表土、もとの斜面を削り出した上・中・下段の平坦面の上に堆積する。にぶい黄褐色粘土質シルトからなる。Ｄ区中段と下段、上段の一部で確認した。0.1m～0.3m前後の厚さで堆積する。Ｄ区では、厚い造成土Ⅱａ層と地山Ⅷの間にあることから、調査時の表土掘削では地山が近いことを示す目安の層であった。



第５図　基本土層

Ⅳ層：造成土。黄褐色や褐色の地山由来の土からなる。Ｂ区南側からＤ区の堀跡２上層、Ａ区南側の堀跡１上層で確認した。

Ⅴ層：城廃絶後の自然堆積土。にぶい黄褐色シルトからなる。Ｄ区堀跡１・２中層、沢、Ｂ区堀跡２南壁付近で確認した。近世以降の堆積とみられる。

Ⅵ層：旧表土。黒褐色シルトからなる。Ａ区南側、整地層下層、Ｄ区沢で確認した。

Ⅶ層：沢の自然堆積土。褐色シルトからなる。Ｄ区の沢と平場下段で確認した。

Ⅷ層：地山。岩盤である。色調や質の異なる硬い岩盤が脈状になって混在しており、地点によって様相に違いがある。基本的には硬い岩盤であるが、節理が多く雨風を受けると、表面が脆く崩れやすい。

（2）発見された遺構と遺物（第6・7図）

遺構のあり方から城跡に伴う遺構として、平場1ヶ所、切岸1ヶ所、堀跡2条、整地層2ヶ所、溝跡1条、集石遺構1ヶ所、そのほかの遺構として、掘立柱建物跡9棟、柱列跡2条、地下室状遺構1基、近世墓10基、溝跡3条、小溝状遺構群1ヶ所、土坑8基を調査した。調査区は、城跡北西の外縁部にあたる。

1）城跡の遺構

【平場1】（第17・18図　写真図版8・11・12）

C区南・北の表土直下で確認した。城跡北区の丘陵頂部北西の平場で、南・北側の調査区の間は生活道路によって削平されている。また、調査区外南東の宅地・道路部分も平場検出面より約1.0m低く、削平をうけているが、平場検出面では掘立柱建物跡の柱穴などの遺構を確認したことから、検出面上面はさほど削られていないと考えられる。検出した平場の広さは、生活道路による削平部分を含めて南北約40m、東西約15mである。地形からみて、本来はさらに広かったとみられる。C区内の標高は、SK19墓付近が城跡北区の中でも最も高く（22.8m）、C区南の南隅が最も低い（20.3m）。

【切岸1】（第12図　写真図版8）

C区北の平場北辺の斜面で検出した。斜面を切り出して急斜面としたもので、堀跡2に接した西端から南東に約10m分を確認、さらに調査区外に延びている。切岸の上端と下端の比高は約6.0m、角度は40～45°である。

【整地層1】（第8・10図　写真図版5）

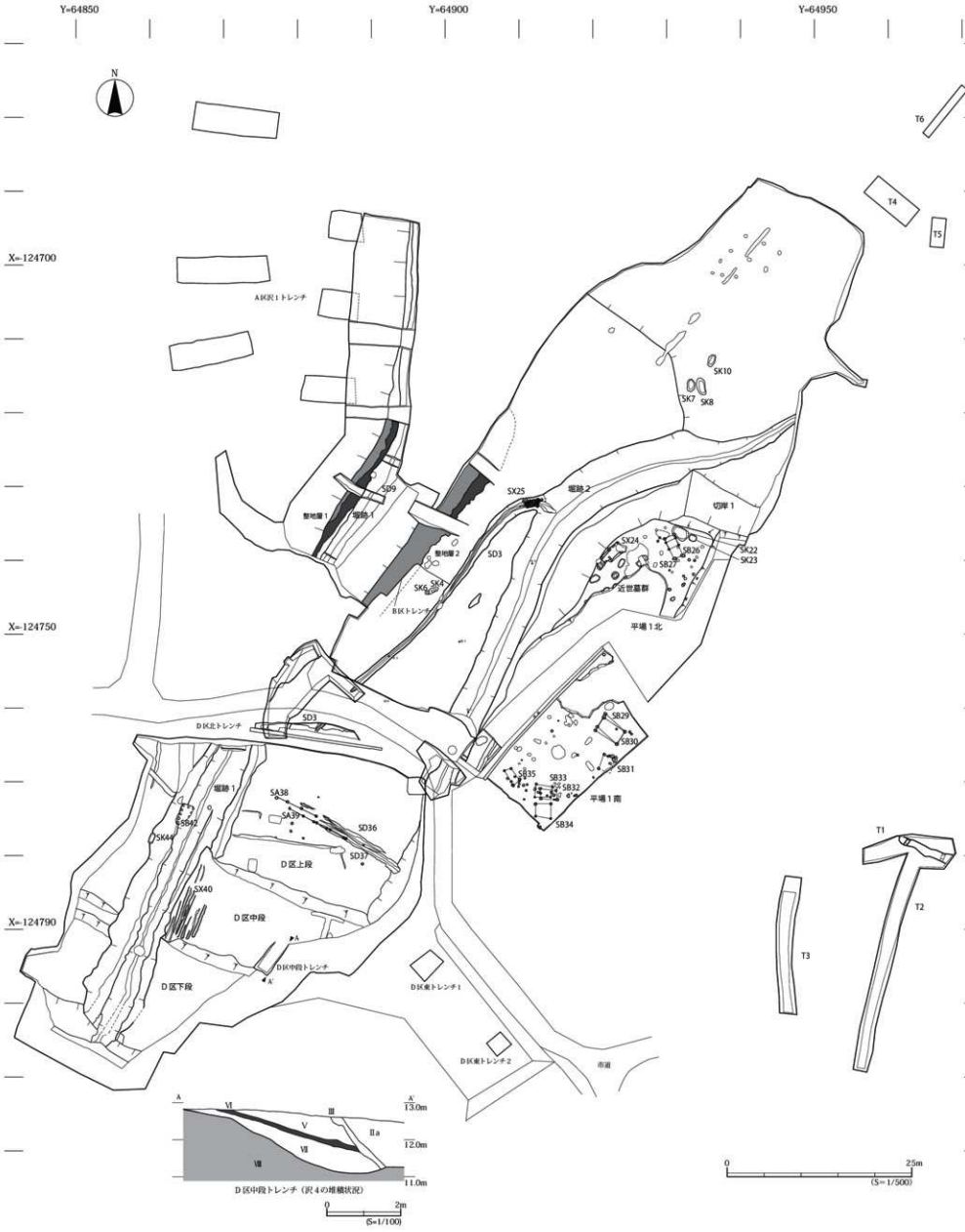
A区南の斜面中位で検出した。堀跡1の西側に沿って、南北16m以上、東西は1.5m以上の範囲に広がる。堀跡1の西壁に接して、旧表土Ⅵ層の上に地山ブロック・地山粒を含む褐色シルトを盛土する。残存する厚さは最大で0.3mである。整地層と旧表土の上面がほぼ水平になっていることから、大きく削平されたとみられる。堀跡1との位置関係からみて、堀跡1を掘削した際の土で構築した土塁跡の痕跡の可能性がある。遺物は出土していない。

【整地層2】（第8・10・13図　写真図版9）

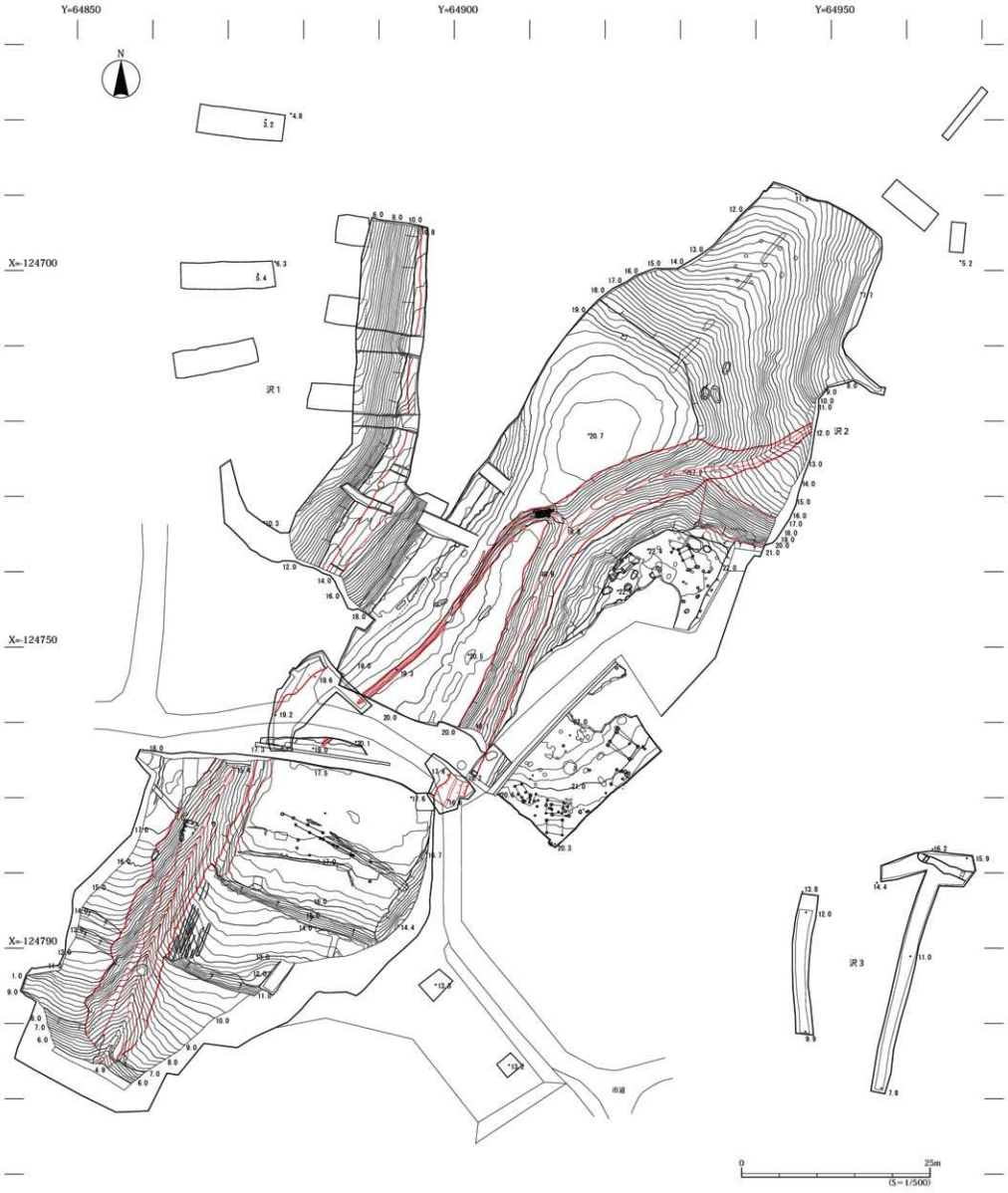
B区北西の丘陵頂部から斜面にかけて検出した。堀跡1の東側に沿って、南北30m以上、東西は5m以上の範囲に広がる。旧表土Ⅵ層の上に地山ブロック・地山粒を含む褐色シルトを盛土する。残存する厚さは最大0.9mである。上面は削平されたのち、現代の客土によって、整地されていた。遺物は出土していない。

【堀跡1】（第8～11図　写真図版4～7）

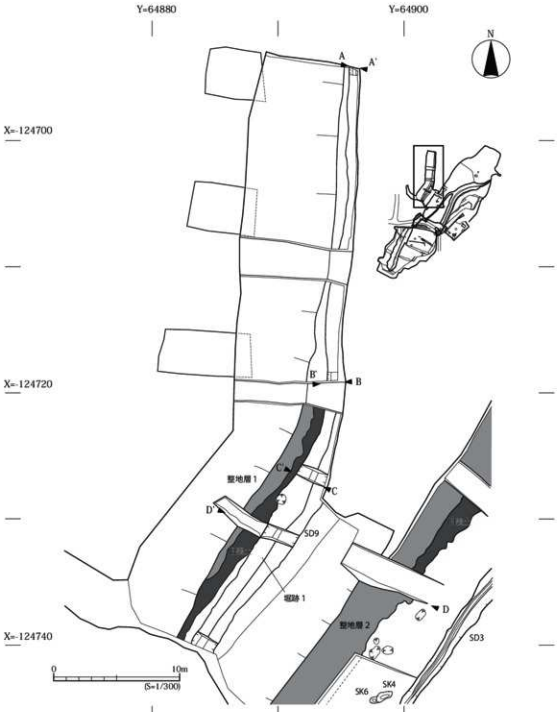
A区からD区西側で検出した南北方向の堀跡で基本層Ⅵ層から掘り込まれている。A区の南側で逆「く」字形に緩やかに屈曲し、屈曲部から北は沢1の東斜面に沿って、おおむね南北方向、南はやや南西方向に振れて直線的に延びる。A区でSD9溝跡、D区でSB42掘立柱建物跡、SK44土坑と重複、それらより古い。



第6図　A区　小屋館城跡遺構配置図



第7図　A区　小屋館城跡全体図

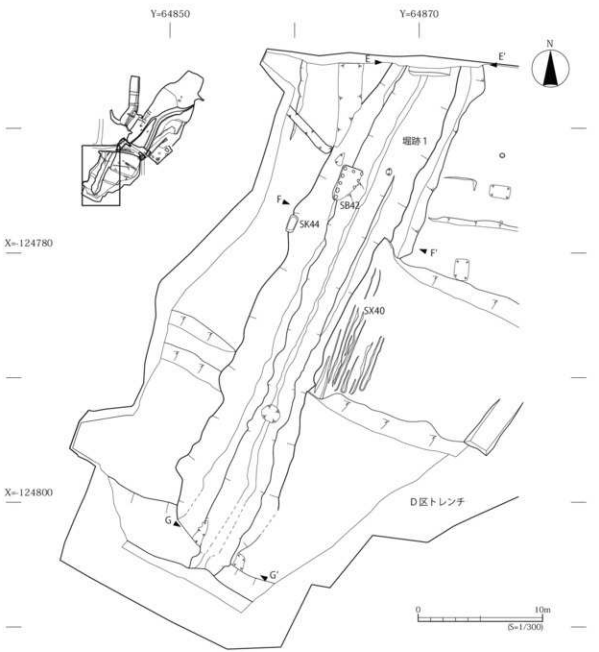


第８図　A区　堀跡１北側、整地層１・２平面図

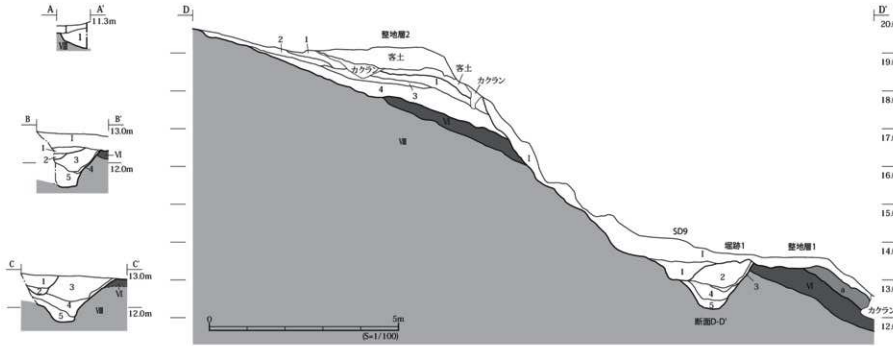
検出した長さはA区が 49.0m、D区が 48.0m、E区が 9.5m で、全長は 121m 以上となる。幅はA区で上幅２m 以上、下幅 0.5m、D区で上幅 7.0 ～ 9.0m、下幅 0.3 ～ 1.6m、E区で上幅 2.4m である。断面形は逆台形を呈すが、D区の南半では中位に段があり、それより上では急傾斜になる。深さはA区で最大 1.2m、D区で 1.8 ～ 4m、E区で 1.3m 以上を測る。底面の標高は北からA区北端 5.4m（A-A'）、屈曲部 11.6m（C-C'）、D区北端 15.6m（E-E'）南端 5.4m（G-G'）であり、D区北端付近が最も高く、A区は北、D区は南に向かって標高を下げながら傾斜する。方向はA区屈曲部から北がほぼ南北方向で、南が N-24° -E である。

堆積土は、下層と上層に大別される。下層は自然堆積で、A・E区では岩盤の地山ブロックを含む褐色や黄褐色粘土質シルトが斜面側から流れ込んでいる。D区北端断面の下層上面はほぼ水平を呈し（E-E′5層）、それを覆う4層は基本的に下層と同質の堆積土であるもののグライ化して鉄分を含み、全体的に固くしまりがある。これらの特徴から下層の上面には何らかの手が加えられて通路などとして機能していた可能性がある。

上層は下位に灰黄褐色シルトなどの自然堆積がみられる箇所もあるが、大半は基本層Ⅲ層で埋め戻されている。D区の南斜面では、その上にⅡa層があり、標高が低くなるほど厚みを増す。遺物は出土していない。

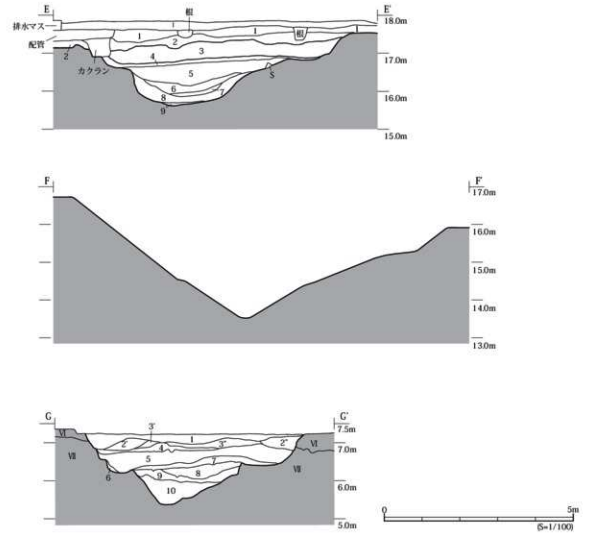


第9図　D区　堀跡1南側、SX40小溝状遺構群、SB42掘立柱建物跡、SK44土坑平面図



遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
堀跡1 A-A'	1	黄褐色（10YR5/6）	粘土質シルト	地山ブロック小、地山粒を多く、地山ブロック大を少し含む。	自然堆積土
堀跡1 B-B'	1	褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	地山ブロック小、地山粒を多く含む。	自然堆積土（SD 9）
	2	黄褐色（10YR5/8）	粘土質シルト	地山ブロック小、地山粒を多く含む。	自然堆積土（SD 9）
	3	にぶい黄橙色（10YR6/4）	粘土質シルト	基本層Ⅳ層に該当する。地山ブロック大～小、地山粒を多く含む。	埋戻し土
	4	褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	地山ブロック小、地山粒を多く含む。	自然堆積土
	5	黄褐色（10YR5/6）	粘土質シルト	地山ブロック小、地山粒を多く、地山ブロック大を少し含む。	自然堆積土
堀跡1 C-C'	1	褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	地山ブロック小、地山粒を多く含む。	自然堆積土（SD 9）
	2	黄褐色（10YR5/8）	粘土質シルト	地山ブロック小、地山粒を多く含む。	自然堆積土（SD 9）
	3	にぶい黄橙色（10YR6/4）	粘土質シルト	埋戻し土。基本層Ⅳ層に該当する。地山ブロック大～小、地山粒を多く含む。	
	4	褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	地山ブロック小、地山粒を多く含む。	自然堆積土
	5	黄褐色（10YR5/6）	粘土質シルト	地山ブロック小、地山粒を多く、地山ブロック大を少し含む。	自然堆積土
堀跡1 D-D'	1	褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	地山ブロック小、地山粒を多く含む。	自然堆積土（SD 9）
	2	褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	埋戻し土。基本層Ⅳ層に該当する。地山ブロック小、地山粒を多く含む。	
	3	褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	地山ブロック小、地山粒を多く含む。	自然堆積土
	4	黄褐色（10YR5/6）		地山ブロック小・大、地山粒からなる。	自然堆積土
	5	黄褐色（10YR5/6）		地山ブロック小・大、地山粒からなる。	自然堆積土
整地層2 D-D'	1	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	地山ブロック小、地山粒を多く含む。	整地層盛土
	2	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	地山ブロック小、地山粒を多く含む。	整地層盛土
	3	褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	地山ブロック小、地山粒を多く含む。	整地層盛土
	4	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	地山ブロック小、地山粒をやや含む。炭化物を少し含む。	整地層盛土
整地層1	a	明黄褐色（7.5YR5/8）	シルト	地山ブロック小を少し、地山粒をやや多く含む。	土葬墓土の版築

第10図　A区　堀跡1断面図（A-A'・B-B'・C-C'・D-D'）



遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
堀跡1 E-E'	1	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロック小を少し、地山粒を多く含む。	調査前宅地の整地層
	2	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	地山粒、炭化物をやや含む。	整地後の耕作土層
	3	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト	地山ブロック小を大量に含む。	整地盛土
	4	灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト	地山粒、鉄を少し含む。5層のグライ化層。	自然堆積土
	5	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山粒を少し含む。	自然堆積土
	6	灰黄褐色 (10YR5/2)	粘土質シルト	地山粒をやや多く含む。	自然堆積土
	7	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	地山粒、鉄をやや含み、炭化物を少し含む。	自然堆積土
	8	灰黄褐色 (10YR5/2)	粘土質シルト	地山ブロック小をやや、地山粒を多く含む。	自然堆積土
	9	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂質シルト	地山粒をやや含む。堀機能時の自然堆積か？	自然堆積土
堀跡1 G-G'	1	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	地山粒をやや多く、炭化物を少し含む。	自然堆積土
	2'	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山粒・炭化物をやや多く含む。	自然堆積土
	2''	褐色 (7.5YR4/3)	シルト	地山粒をやや多く、炭化物をわずかに含む。	自然堆積土
	3'	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	黒褐色粒土ブロック小をやや、地山粒・炭化物をやや多く含む。	自然堆積土
	3''	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山粒をやや多く、炭化物を少し含む。	自然堆積土
	4	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	シルト	地山ブロック小、地山粒を多く含む。（基本層の整地層とは対応しない）	整地層
	5	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	V層に炭化物をやや多く含む。	
	6	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	V層に該当する。	
	7	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	V層に該当する。	
	8	褐色 (7.5YR4/3)	シルト	地山ブロック大を少し、地山粒をやや多く含む。	自然堆積土
	9	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロック小を少し、地山粒をやや多く含む。	自然堆積土
	10	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	地山ブロック小を少し、地山粒をやや多く含む。	自然堆積土

第 11 図　D区　堀跡 1 断面図 (E～G)

【堀跡２】（第 12 ～ 14 図　写真図版８・９・13）

Ｂ区、Ｄ区東端、Ｅ区で検出した南北方向の堀跡である。Ｂ区北側では東西方向に延び、SD3 との接続地点から緩やかに「く」字に屈曲して南北方向に延びる。Ｂ区中央で SD3、Ｄ区上段東側で SD37 と接続、ともに前後関係は不明である。SD3 溝跡は、底面標高や接続箇所の形状からみて同時に機能した時期がある可能性が高い。SD37 溝跡は、溝埋戻し土の上に、堀跡２上層の土が堆積しており、堀跡２の埋没よりは古い。

検出した長さはＢ区が 66.0m、Ｄ区が 15.0m、Ｅ区が 4.2m で、全長 85m 以上となる。Ｂ区では丘陵尾根上の平坦面と沢２では規模が異なり、尾根上の平坦面は検出長 50.0m、上幅 4.5 ～ 6.4m、下幅 0.3 ～ 1.5m、深さ 1.5 ～ 2.1m、断面形は逆台形、開いたＶ字状を呈す。沢２部分は、検出長 16.0m、幅 1.1 ～ 4.4m、深さ 0.3 ～ 2.8m、沢を下ると急激に狭く、浅くなる。その大部分は幅１m 以下、深さ 0.5m 以下で、断面形は弧状を呈す。また、堀が小規模になりはじめる部分は、切岸１のほぼ西端にあたる。

底面標高は、北から沢２の壁際 12.0m、B-B'17.7m、C-C'19.0m、D-D'18.4m、Ｂ区南壁 E-E' 17.7m、Ｅ区 16.9m、F-F'15.2m である。C-C' 付近を最高所として、両端に向かって低く傾斜する。方向は、SD3 の接続地点から北側が N-73° -E、南側は N-24° -E となる。

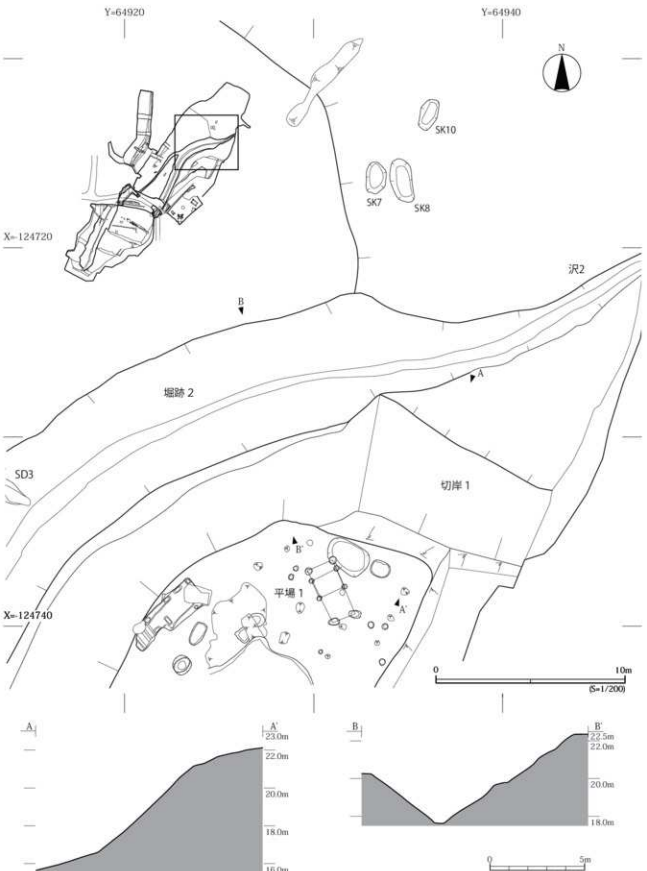
堆積土は C-C' と D-D' では、底面から下層にかけて平場１側から流れ込んだ地山ブロックからなる自然堆積土が厚く堆積、その上に地山粒を含む黄褐色シルトが自然堆積する。E-E' では、下層に地山粒からなるシルト、中層にⅣ層に該当する地山ブロック・地山粒を含む黄褐色シルト、その上層はⅣ層に該当する粘土ブロックを多く含む明黄褐色粘土質シルトで埋め戻される。遺物は出土していない。

【SD3 溝跡】（第 13・14 図　写真図版８・10）

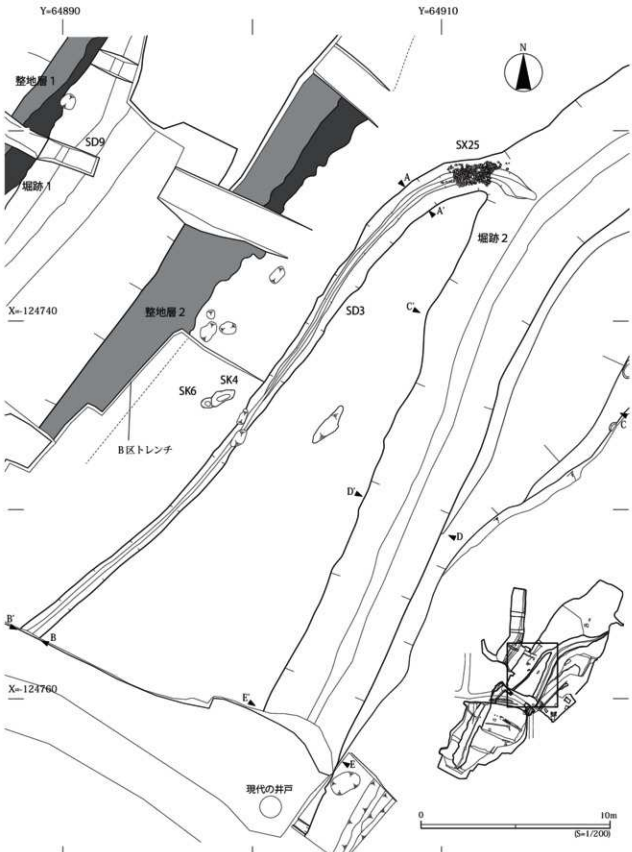
Ｂ区、Ｄ区北側のトレンチ、Ｅ区北端で検出した緩やかに屈曲する南北溝で、北側は把手状に堀跡２に接続する。南側はＢ区とＤ区北側のトレンチの間が市道で削平され、トレンチから南も住宅造成による削平のため残っていない。堀跡２、SX25 集石遺構と重複し、後者より古い。また、堀跡２との接続部分の形状や底面標高からみて、堀跡２に伴う可能性が高い。

検出長はＢ区 35.0m、Ｄ区北トレンチ 1.4m、Ｅ区 1.0m で、市道による削平部分を含めると 43.8m 以上となる。幅は 1.0 ～ 1.7m、断面形はＢ区内の北半と南半で異なり、北半は底面が狭い箱形を呈した下部から斜めに立ち上がるＶ字状で、深さは 1.0m である。南半は逆台形で深さは 0.3 ～ 0.4m である。底面標高は北端付近 19.1m（A-A'）、Ｂ区南端とＤ区トレンチ 19.4m（B-B'・C-C'）で、ほぼ平坦だが、北端付近は堀跡２に向かってわずかに低く傾斜する。方向は、北半 N-36° -E、南半 N-46° -E である。

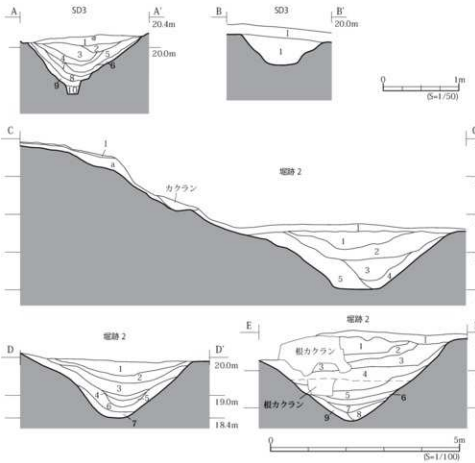
堆積土は自然堆積で、北端付近では粒上の地山土を多く含む褐色や黄褐色主体の粘土質シルト、Ｂ区南端やＤ区北側トレンチ、Ｅ区北端では地山粒を少し含むにぶい黄褐色シルトである。遺物は出土していない。



第 12 図　B区　堀跡 2 北側、切岸 1 平面図・断面図



第 13 図　B区　堀跡 2 南側、SD3 溝跡、SX25 集石遺構平面図



遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
SD3 A-A'	1	黄褐色（10YR5/6）	粘土質シルト	地山粒を多く含む。	
	2	褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	地山粒を多く含む。	
	3	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	地山粒を多く含む。	
	4	暗褐色（10YR3/4）	粘土質シルト	地山粒を多く含む。	
	5	にぶい黄褐色（10YR4/3）	粘土質シルト	地山ブロック小、地山粒を多く、炭化物を少し含む。	
	6	黄褐色（10YR5/8）	粘土質シルト	地山ブロック小、地山粒を多く含む。	
	7	褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	地山ブロック大、地山粒を多く含む。	
	8	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	地山ブロック大、地山粒を多く含む。	
	9	黄褐色（10YR5/6）	粘土質シルト	地山ブロック大、地山粒を多く含む。	
	10	褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	地山ブロック小、地山粒を多く含む。	
SD3 B-B'	1	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	地山粒を少し含む。	自然堆積土

遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
堀跡 2 C-C'	1	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	地山粒をやや多く含む。	自然堆積土
	2	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	地山粒をやや多く含む。炭化物をやや含む。	自然堆積土
	3	にぶい黄褐色（10YR6/4）	砂質シルト	地山粒をやや含む。	自然堆積土
	4	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質シルト	地山粒をやや多く含む。炭化物粒を少し含む。	自然堆積土
	5	にぶい黄褐色（10YR5/4）		地山ブロック大からなる。	自然堆積土
斜面	a	明黄褐色（10YR6/6）	シルト		自然堆積土
堀跡 2 D-D'	1	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	地山粒をやや多く含む。	自然堆積土
	2	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山粒をやや多く含む。	自然堆積土
	3	黄褐色（10YR5/6）	シルト	地山粒をやや多く含む。地山ブロック小を少し含む。	自然堆積土
	4	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト質粘土	地山粒をやや含む。	自然堆積土
	5	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト質粘土	地山粒をやや多く含む。地山ブロック小をやや含む。	自然堆積土
	6	灰褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	地山粒を多く含む。地山ブロック小をやや多く含む。	自然堆積土
	7	灰褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	地山粒をやや多く含む。地山ブロック小を多く含む。	自然堆積土
堀跡 2 E-E'	1	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山粒をやや含む。	自然堆積土
	2	にぶい黄褐色（10YR6/4）	シルト	地山粒をやや多く含む。	自然堆積土
	3	明黄褐色（10YR7/6）	粘土質シルト	地山粒・地山ブロック小をやや多く含む。粘土ブロック大～小を多く含む。	自然堆積土
	4	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	地山粒をやや含む。地山ブロック小を多く含む。	自然堆積土
	5	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	地山粒をやや含む。地山ブロック小を多く含む。	自然堆積土
	6	黄褐色（10YR5/6）	粘土質シルト	地山粒・地山ブロック小をやや多く含む。	自然堆積土
	7	黄褐色（10YR5/6）	粘土質シルト	地山粒・地山ブロック小を多く含む。	自然堆積土
	8	褐色（10YR4/6）	粘土質シルト	地山粒・地山ブロック大～小を多く含む。	自然堆積土
	9	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	地山粒・地山ブロック大～小を多く含む。	自然堆積土

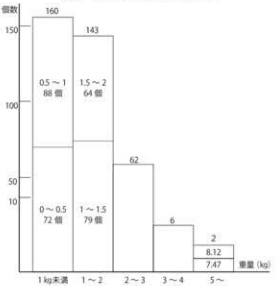
第 14 図　B 区　SD3 溝跡、堀跡 2 断面図（A ～ E）

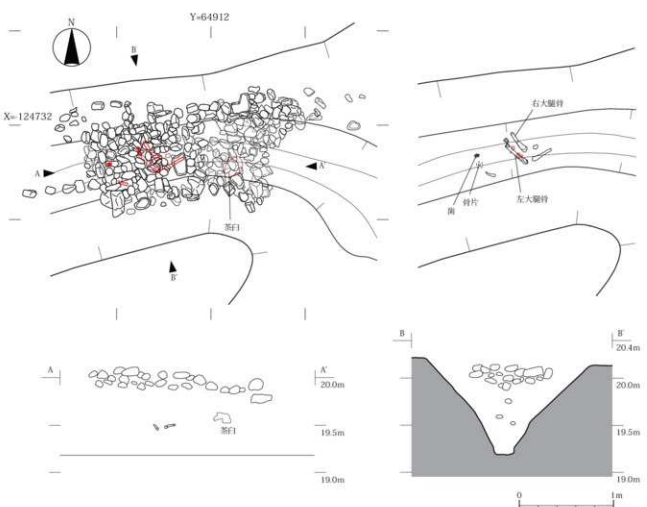
【SX25 集石遺構】（第 13・15・16 図　写真図版 10）

B 区の SD3 溝跡が堀跡 2 と接する箇所で検出した集石遺構である。SD3 溝跡より新しい。集石の下から人骨が出土しており、墓の可能性があるが、調査時の認識不足から掘方の有無、堆積土の状況などは不詳である。以下、把握したことを記述する。

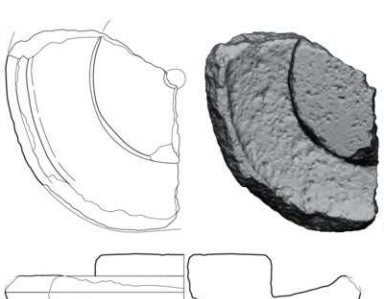
集石は全て SD3 の範囲内にあり、東西 3.5m、南北 1.0m の範囲に分布し、特に東西 2.0m 南北 1.0m の長方形状の範囲に集中する。礫は、密着した状態で敷石状に 2 ～ 3 層に重なって検出された。レベルは、SD3 の底面から 0.7 ～ 0.9m 上に集中する。礫は、大きさが 15 ～ 25cm 程度、重量 2 kg以下の丸みをもつものが大半を占める。角礫と判断されるものも比較的角がとれたものが目立つ。

表 3　SX25 集石遺構石材重量





第 15 図　SX25 集石遺構



No.	種類	遺構名／層	材質	大きさ（mm）	特徴	図版	登録番号
1	茶臼下臼	SX25	石	半径 18.7　器高 11.1　重 4.8kg	臼面半径 9.3cm、軸穴径（2.0）cm、底部径 14.2cm、台部高 2.8cm、安山岩製、臼面摩滅のため、挽き目なし、残存 1/3。	14-7	SX25No.1

第 16 図　SX25 集石遺構出土茶臼下臼

集石の下では 0.3m ～ 0.4m の間を挟んで人骨と茶臼が出土した。人骨は礫集中部の西半に多く、歯や上肢骨、下肢骨がある（4 自然科学分析（2）参照）。AMS 測定の結果では、1477 ～ 1630 年の年代が示された（同上（1）参照）。遺物は、茶臼下臼が礫集中部東半から倒位で出土した（第 16 図）。1/3 程度が残存、臼面半径は 9.3cm を測る。

2）その他の遺構

〔掘立柱建物跡〕

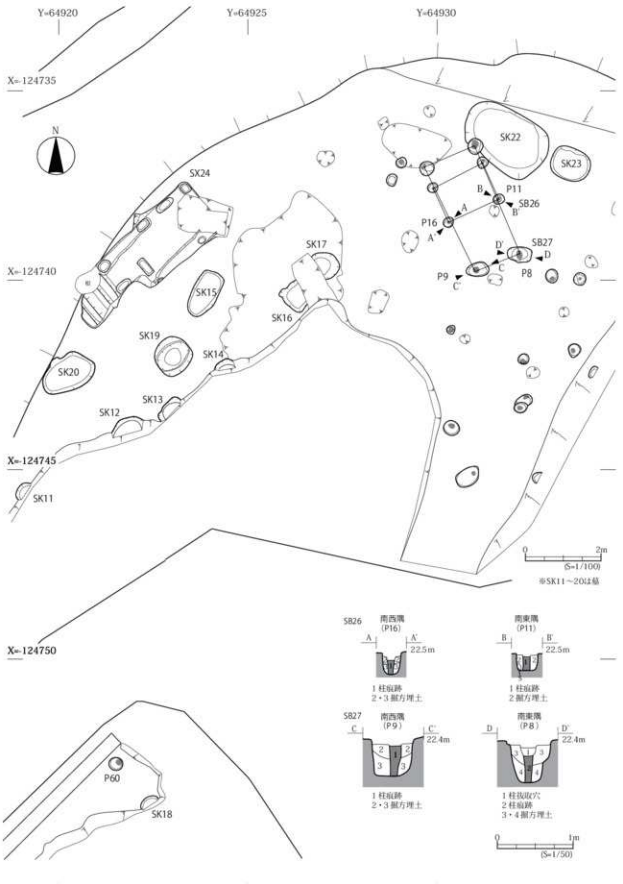
C 区で 8 棟、D 区で 1 棟確認した。このうち、C 区の建物はいずれも桁行・梁行とも 1 間分を確認したものであるが、調査区外や削平された箇所に柱穴をもつ建物があるとみられる。城内の平場に位置することから、城に伴う建物があると推定できる。

【SB26 掘立柱建物跡】（第 17 図　写真図版 11）

C 区北で検出した桁行 1 間、梁行 1 間の東西棟である。柱穴は 4 ヶ所で検出、全てで柱痕跡を確認した。SB27 建物跡と位置が重複するが、直接重複しないため、新旧関係は不明である。規模は、桁行が北側柱列跡で約 1.5m、梁行が東側柱穴列で 1.1m である。方向は、東側柱列跡で N-25° -W である。柱穴は直径 25 ～ 31cm の円形、検出面からの深さは 18 ～ 28cm で、にぶい黄褐色シルト主体の土で埋め戻される。柱痕跡は直径 10cm 前後の円形である。遺物は出土していない。

【SB27 掘立柱建物跡】（第 17 図　写真図版 11）

C 区北で検出した桁行 1 間以上、梁行 1 間の南北棟である。柱穴は 4 ヶ所で検出、全てで柱痕跡を確認した。南東隅の柱は切取られている。SK22 土坑と北東隅の柱穴が重複し、それより新しい。



第 17 図　平場 1 北遺構配置図

また、SB26 建物跡と位置が重複するが、直接重複しないため、新旧関係は不明である。規模は、桁行が東側柱穴列 3.2m 以上、梁行が北側柱穴列約 1.5m である。方向は、東側柱穴列で N-25° -W である。柱穴は長軸 36 ～ 64cm の円形・楕円形、検出面からの深さ 44 ～ 55cm で、にぶい黄褐色シルト主体の土で埋め戻される。柱痕跡は直径 10 ～ 20cm 前後の円形である。遺物は出土していない。

【SB29 掘立柱建物跡跡】（第 18・19 図　写真図版 12）

C 区南で検出した桁行 1 間以上、梁行 1 間の東西棟である。柱穴は 4 ヶ所で検出、全てで柱痕跡を確認した。SB30 建物跡とほぼ同位置で重複し、それより新しい。規模は、桁行が北側柱穴列 3.5m 以上、梁行が西側柱穴列約 2.1m である。方向は、西側柱穴列で N-33° -E である。柱穴は長軸 38 ～ 58cm の円形・楕円形、検出面からの深さ 15 ～ 52cm で、褐色シルト質粘土主体の土で埋め戻される。柱痕跡は直径 10 ～ 20cm 前後の円形である。遺物は出土していない。

【SB30 掘立柱建物跡】（第 18・19 図　写真図版 12）

C 区南で検出した桁行 1 間以上、梁行 1 間の東西棟である。柱穴は 4 ヶ所で検出、全てで柱痕跡を確認した。SB29 建物とほぼ同位置で重複し、それより古い。規模は、桁行が北側柱穴列 3.6m 以上、梁行が西側柱穴列約 2.1m である。方向は、西側柱穴列で N-31° -E である。柱穴は長軸 33 ～ 49cm の円形・楕円形、検出面からの深さ 15 ～ 52cm で、褐色シルト主体の土で埋め戻される。柱痕跡は径 10 ～ 20cm 前後の円形である。遺物は出土していない。

【SB32 掘立柱建物跡】（第 18 図　写真図版 12）

C 区南で検出した桁行 1 間以上、梁行 1 間の東西棟である。柱穴は 4 ヶ所で検出したが、柱痕跡は確認できなかった。SB33 建物跡と位置が重複するが、直接重複しないため、新旧関係は不明である。規模は、桁行が北側柱穴列 2.2m 以上、梁行が西側柱穴列約 1.8m である。方向は、西側柱穴列で N-7° -E である。柱穴は長軸 21 ～ 40cm の楕円形、検出面からの深さ 19 ～ 24cm で、褐色シルト主体の土で埋め戻される。遺物は出土していない。

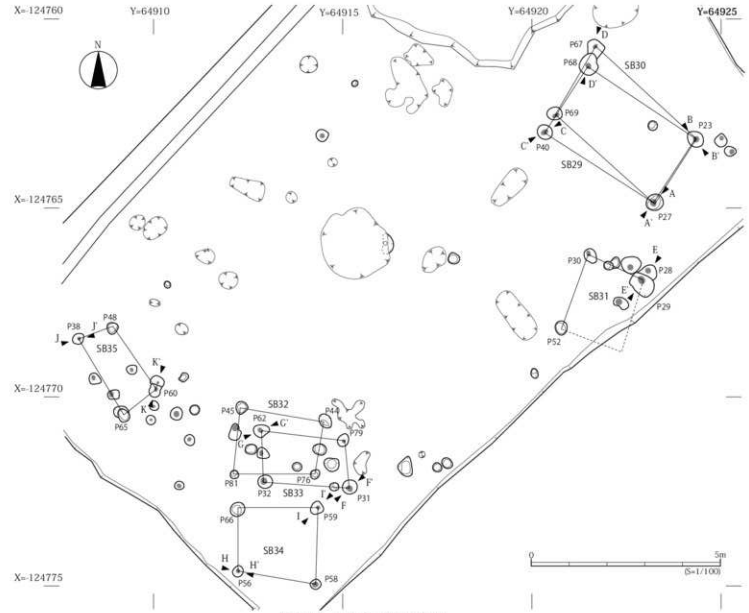
【SB33 掘立柱建物跡】（第 18・19 図　写真図版 12）

C 区南で検出した桁行 1 間以上、梁行 1 間の東西棟である。柱穴は 4 ヶ所で検出、全てで柱痕跡を確認した。SB32 建物跡と位置が重複するが、直接重複しないため、新旧関係は不明である。規模は、桁行が北側柱穴列 2.3m 以上、梁行が西側柱穴列約 1.4m である。方向は、西側柱穴列で N-2° -W である。柱穴は長軸 28 ～ 42cm の円形・楕円形、検出面からの深さ 26 ～ 47cm で、にぶい黄褐色シルト質粘土主体の土で埋め戻される。柱痕跡は直径 10 ～ 20cm 前後の円形である。遺物は出土していない。

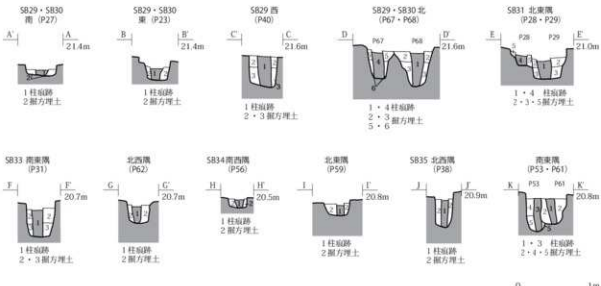
【SB34 掘立柱建物跡】（第 18・19 図　写真図版 12）

C 区南で検出した桁行 1 間以上、梁行 1 間の東西棟である。柱穴は 4 ヶ所で検出しており、うち 3 個で柱痕跡を確認した。規模は、桁行が北側柱穴列 2.1m 以上、梁行が東側柱穴列で約 2.0m である。方向は、東側柱穴列で N-1° -W である。柱穴は長軸 28 ～ 39cm の円形・楕円形、検出面からの深さ 14 ～ 38cm で、褐色粘土質シルト主体の土で埋め戻される。柱痕跡は直径 10cm 前後の円形である。遺物は出土していない。

【SB35 掘立柱建物跡】（第 18・19 図　写真図版 12）



第 18 図　平場 1 南遺構配置図

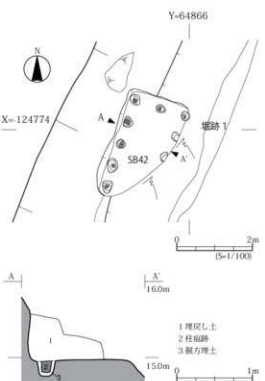


第 19 図　平場 1 南の柱穴断面図

C区南で検出した桁行 1 間以上、梁行 1 間の南北棟である。柱穴は 4 ヶ所で検出しており、うち 2 個で柱痕跡を確認した。規模は、桁行が西側柱穴列 2.4m 以上、梁行が南側柱穴列約 1.1m である。方向は、西側柱穴列で N-31° -W である。柱穴は 30cm 前後の円形、検出面からの深さ 12 ～ 47cm で、褐色粘土質シルト主体の土で埋め戻される。柱痕跡は直径 10cm 以下の円形である。遺物は出土していない。

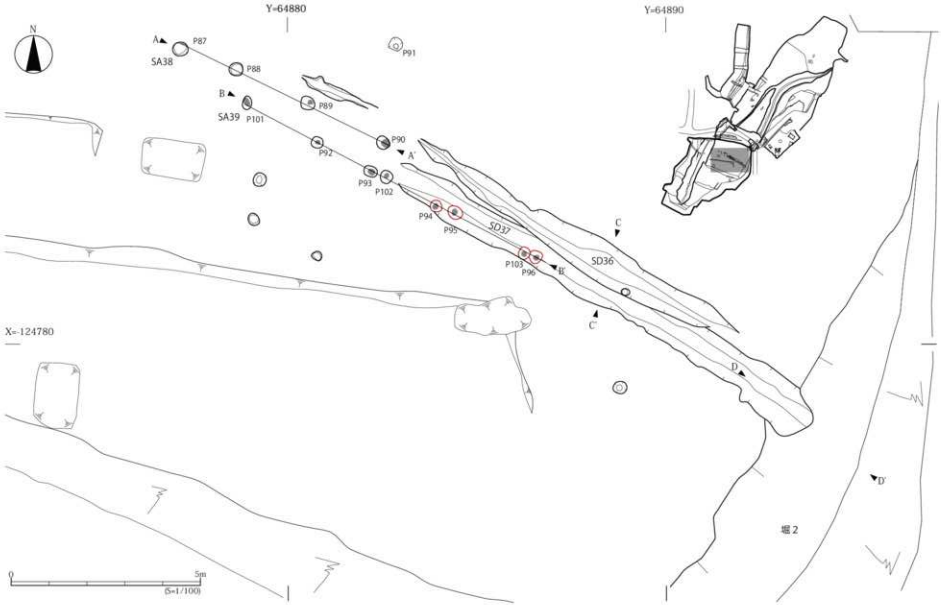
【SB42 掘立柱建物跡】（第 20 図　写真図版 13）

D区の西側中央で検出した小規模な桁行 4 間・梁行 2 間の建物である。中位まで埋没した堀跡 1 の西側斜面と基本層Ⅴ層を最大 0.6m 程、ほぼ垂直に掘り込んで削りだした平坦面に建てられている。平坦面は南東から東側が崩落しており、残存する広さは南北 2.9m、東西 1.6m ほどである。

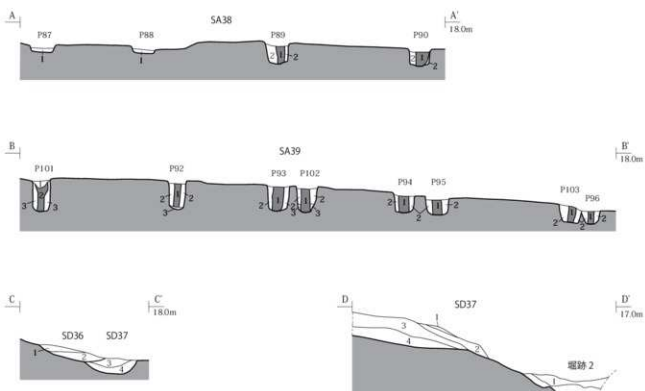


第 20 図　SB42 掘立柱建物跡平面図・断面図

柱穴は 9 個検出し、そのうち 6 箇所で柱痕跡を確認した。規模は、桁行が西側柱穴列 2.6m、柱間間隔はおおよそ 0.3m、梁行が北側柱穴列 1.6m、柱間間隔はおおよそ 0.3m である。方向は N-20° -E である。柱穴は 15cm 前後の円形、検出面からの深さは約 20cm で、にぶい黄褐色シルト主体の土で埋め戻される。柱痕跡は直径 10cm 以下の円形である。遺物は出土していない。



第 21 図　D区上段　遺構配置図



遺構名		層	土色	土性	特徴	性格
SA38	P87	1	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	地山ブロックを含む。粘性なくぼそぼそしている。柱痕確認できず。	
	P88	1	褐色 (10YR4/6)	粘質土	地山ブロックを多く含む。柱痕確認できず。	
	P89	1	褐色 (10YR4/4)	粘質土	地山ブロックをやし含む。	柱痕跡
		2	黄褐色 (10YR5/6)	粘質土	地山ブロックを多く含む。固くしまる。	掘方埋土
	P90	1	褐色 (10YR4/4)	粘質土	地山小ブロックを含む。	柱抜取
		2	黄褐色 (10YR5/6)	粘質土	地山ブロック主体。	掘方埋土
SA39	P92	1	褐色 (10YR4/4)	粘質土	地山ブロックを含む。	柱痕跡
		2	明黄褐色 (10YR6/6)	粘質土	地山ブロックを多く含む。	掘方埋土
		3	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	粘質土	地山ブロック主体。	掘方埋土
	P93	1	褐色 (10YR4/6)	粘質土	地山ブロックをやし含む。	柱痕跡
		2	明黄褐色 (10YR6/6)	粘質土	地山ブロックを多く含む。	掘方埋土
	P94	1	褐色 (10YR4/6)	粘土		柱痕跡
		2	黄褐色 (10YR5/6)	粘質土	地山ブロックを多く含む。	掘方埋土
	P95	1	褐色 (10YR4/6)	粘質土		柱痕跡
		2	明黄褐色 (10YR6/6)	粘質土	地山ブロックを多く含む。	掘方埋土
	P96	1	褐色 (10YR4/6)	粘質土		柱痕跡
		2	明黄褐色 (10YR6/6)	粘質土		掘方埋土
	P101	1	明褐色 (7.5YR5/6)	粘質土	赤色地山・地山ブロックを含む。	攪乱穴埋戻し
		2	褐色 (10YR4/6)	粘質土	地山ブロックを含む。	柱痕跡
		3	明黄褐色 (10YR6/6)	粘質土	地山ブロックを多く含む。	掘方埋土
	P102	1	褐色 (10YR4/6)	粘質土	地山ブロックをやし含む。	柱痕跡
		2	明黄褐色 (10YR6/6)	粘質土	地山ブロックを多く含む。	掘方埋土
		3	黄褐色 (10YR5/6)	粘質土	地山ブロックを含む。	掘方埋土
	P103	1	褐色 (10YR4/6)	粘土	地山ブロックをやし含む。	柱痕跡
		2	黄褐色 (10YR5/6)	粘質土	地山ブロックを多く含む。	掘方埋土

遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
SD36	1	褐色 (10YR4/4)	粘質土	地山ブロックをややく含む。しまり弱い。	自然堆積
	2	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘質土	地山ブロックをやし含む。しまり弱い。	自然堆積
SD37	1	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト	地山ブロック主体。	新しい盛土
	2	褐色 (10YR4/6)	粘質土	地山ブロックをやし含む。	自然堆積土
	3	黄褐色 (10YR5/6)	粘質土	灰白色の地山ブロックを多く含む。	埋戻し
	4	黄褐色 (10YR5/6)	粘質土	黄橙色の地山ブロックを多く、灰白色の地山ブロックを少し含む。	埋戻し
堀跡 2	1	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト	地山ブロック主体。	新しい盛土
	2	褐色 (10YR4/6)	粘質土	地山ブロックをやし含む。上部はやや明るく、下層ほど暗い。粘性あり。	自然堆積土
	3	褐色 (10YR4/4)	粘土	粗によるカクランの一部とみられる。	

第 22 図　D 区上段　SA38・39 柱列跡、SD36・37 溝跡、堀跡 2 断面図

〔柱列跡〕

D区上段の平坦面で2条検出した。ともに堀跡2とほぼ直交する方向で延びているが、直接的な関係は不詳である。

【SA38 柱列跡】（第21・22図　写真図版13）

東西3間以上の柱穴列である。柱穴を4個検出し、そのうちP89で柱痕跡、P90で柱抜取り穴を確認した。検出した長さは6.2m、柱間間隔は柱穴跡と柱穴、柱抜取り穴のほぼ中心で西から1.7m、2.2m、2.2mである。方向はN-62°-Wである。柱穴は、直径40cm前後の円形で、検出面からの深さ10～30cmである。掘方埋土は地山由来のにぶい黄褐色シルトを主体とする。P89・P90で確認した柱痕跡は、10～20cm前後の円形である。遺物は出土していない。

【SA39 柱列跡】（第21・22図　写真図版13）

東西4間以上の柱穴列である。柱穴を8個検出した。位置関係からみて東側の2間分の柱穴が一度造り替えられており、P103がP96より古いことから、A：P103・95・96→B：P93・94・103の変遷を考えた。柱痕跡は7個、柱抜取り穴は1個確認した。SD37溝跡と重複し、それよりも古い。

検出した長さはAが8.4m、柱間間隔が各穴のほぼ中心で西から2.1m、1.6m、2.0m、2.6m、Bが8.8mで、柱間間隔が同様に2.1m、2.1m、2.1m、2.4mである。方向は、A・Bともにおおむね N-62°-Wである。柱穴はA・Bとも直径30～35cmの円形で、深さは検出面から22～48cmである。掘方埋土は地山由来のにぶい黄褐色シルトを主体とする。柱痕跡は直径10～15cmの円形を呈する。遺物は出土していない。

〔近世墓〕

C区で10基調査した。いずれも削平されて残りが悪いが、平面形が円形、楕円形、隅丸方形とみられる墓で、比較的近接して分布し、形状や規模、堆積土が類似すること、人骨や近世の副葬品が出土したものがあることから、一括して近世墓とした。10基中9基をC区北で確認したが削平部分を挟むC区南でSK18墓を確認しており、墓域は少なくとも東西約10m、南北15mの範囲に広がる。なお、B区南東隅付近で江戸時代の墓碑を14基確認しており、検出した近世墓に伴う可能性が高い。宝永4年～天保7年（1708～1836）の年号がみられ、18世紀後半の墓碑が多い。

【SK11 墓】（第17・23図　写真図版11）

南側半分以上が削平されているが、平面形は円形と推定できる。規模は、東西54cm、南北25cm以上、検出面からの深さ58cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。堆積土は地山粒・地山ブロックからなる明黄褐色シルトの埋戻土である。遺物は出土していない。

【SK12 墓】（第17・23図　写真図版11・15）

南半分が削平されているが、平面形は隅丸方形と推測できる。規模は、東西85cm、南北40cm以上、検出面からの深さ108cmを測る。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がり、底面から約60cm上でやや外側に開く。堆積土は地山粒・地山ブロックからなる明黄褐色シルトの埋戻土である。遺物は煙管吸口、新寛永銭1枚のほか銅銭5枚、銅銭片が出土した。また、骨片のみで部位の分かるものはないが人骨が出土している。

【SK13 墓】（第 17・23 図　写真図版 11・15）

南側半分が削平されているが、平面形は隅丸方形と推測できる。規模は、東西 76cm、南北 30cm 以上、検出面からの深さ 70cm を測る。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。堆積土は地山粒・地山ブロックからなる明黄褐色シルトの埋戻土である。遺物は刀子、寛永通宝 2 枚、布に包れた銅銭 3 枚が出土した。

【SK14 墓】（第 17・23 図　写真図版 11）

南側半分以上が削平されているが、平面形は楕円形と推測できる。規模は、東西 54cm、南北 20cm 以上、検出面からの深さ 62cm を測る。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。堆積土は地山粒・地山ブロックからなる明黄褐色シルトの埋戻土である。遺物は出土していない。

【SK15 墓】（第 17・23 図　写真図版 11）

平面形は長楕円形で、規模は、長軸 128cm、短軸 67cm、検出面からの深さ 40cm を測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は地山粒・地山ブロックからなる明黄褐色シルトの埋戻土である。遺物は古寛永銭 1 枚、文銭 1 枚、新寛永銭 1 枚のほか銅銭 4 枚が出土した。

【SK16 墓】（第 17・23 図　写真図版 11・15）

上部がカクランに大きく壊されて残りが悪いが、平面形が楕円形とみられる墓である。規模は、南北 70cm、東西 62cm 以上、検出面からの深さ 10cm を測る。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は地山粒・地山ブロックからなる明黄褐色シルトの埋戻土である。遺物は煙管雁首・吸口、銅製金具が出土した。また、カクラン土中から煙管雁首、釘、寛永通宝 2 枚、鉄銭束、不明鉄製品が出土している。

【SK17 墓】（第 17・23 図　写真図版 11・15）

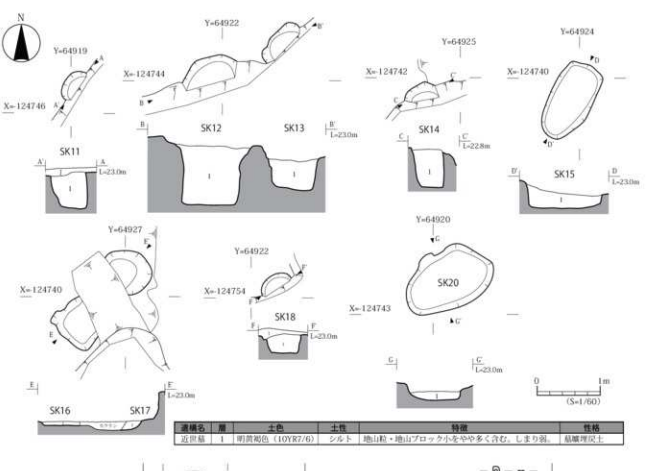
上部がカクランに大きく壊されて残りが悪いが、平面形が楕円形とみられる墓である。規模は、南北 75cm、東西 52cm 以上、検出面からの深さ 20cm を測る。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は地山粒・地山ブロックからなる明黄褐色シルトの埋戻土である。遺物は煙管雁首・吸口、銅製留め金具、鉄銭束、不明鉄製品が出土した。また、人骨が出土しており大腿骨がある。

【SK18 墓】（第 17・23 図　写真図版 11）

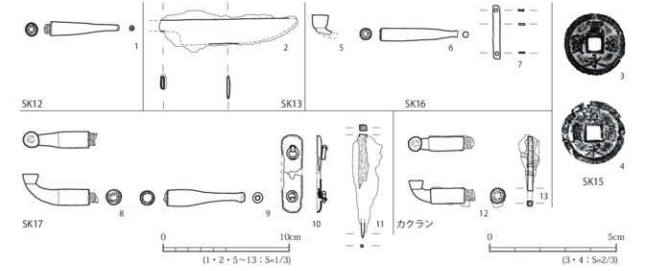
南側半分以上が削平されているが、平面形は楕円形と推測できる。規模は、南北 25cm 以上、東西 53cm、検出面からの深さ 25cm を測る。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は地山粒・地山ブロックからなる明黄褐色シルトの埋戻土である。遺物は出土していない。

【SK19 墓】（第 17・24 図　写真図版 11・15）

今回の調査で、最も良好な状態で検出した墓である。平面形は隅丸方形で、規模は長軸 97cm、短軸 95cm、検出面からの深さ 111cm を測る。底面は平坦で、壁はやや外に開いて立ち上がり、底面から 20 ～ 30cm 上で段を有し、そこから再び外に開いて立ち上がる。堆積土は地山粒・地山ブロックからなる明黄褐色シルトの埋戻土である。遺物は、手鏡、煙管雁首・吸口、刀子、鑷とみられる鉄製品、古寛永銭 4 枚、文銭 1 枚、寛永通宝 1 枚が出土した。また、人骨が出土しており、大腿骨、歯、骨片などがある。

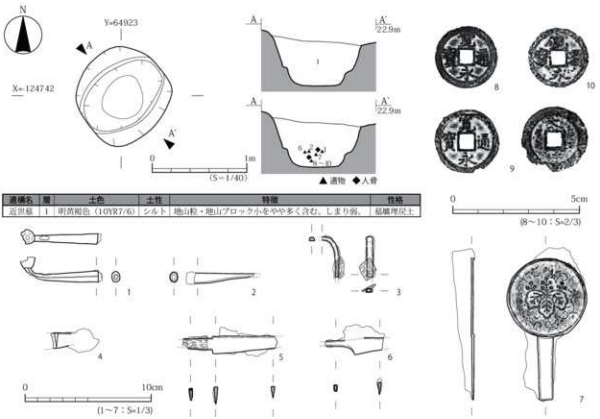


遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
近世墓	1	明黄褐色（10YR7/6）	シルト	地山粒・地山ブロック小をやや多く含む。しまり弱。	墓壙埋戻土



No.	種類	遺構名／層	材質	大きさ（mm）	特徴	図版	登録番号
1	煙管吸口	SK12	銅製品	長 55　径 4～10　重 6.2g	雁字残る。	15-11	SK12No.1
2	刀子	SK13	鉄製品	長 111　幅 10～18　重 27.8g	刃厚：3mm、茎厚：2mm	15-13	SK13No.3
3	寛永通宝	SK15	銅銭	—	古寛永。		SK15No.1
4	寛永通宝	SK15	銅銭	—	新寛永。		SK15No.2-1
5	煙管雁首	SK16	銅製品	長 17　火皿径 12　重 1.4 g		15-20	SK16No.2
6	煙管吸口	SK16	銅製品	長 63　径 10　重 7.5 g	雁字残る。	15-21	SK16No.3
7	銅製金具	SK16	銅製品	長 43　幅 6　厚 1　重 1 g		15-19	SK16No.5
8	煙管雁首	SK17	銅製品	長 53　径 12　重 12.4g	雁字残る。地金厚い。	15-14	SK17No.3
9	煙管吸口	SK17	銅製品	長 63　径 7～12　重 6.8g	雁字残る。地金厚い。	15-15	SK17No.4
10	煙草入留金具	SK17	銅製品	長 62　幅 16　厚 1　重 3.9g	爪金具で固定された銅環 2 個。銅環：外径 8mm、厚 1mm、繊維質付着。	15-17	SK17No.5
11	釘	SK17	鉄製品	長 84　厚 5　重 21.7 g	木質付着。	15-18	SK17No.9
12	煙管雁首	SK16	銅製品	長 48　火皿径 12　径 13　重 8 g	雁字残る。カクラン出土。	15-22	SK16No.1
13	釘	SK16	鉄製品	長 43　厚 4　重 5.7 g	木質付着。カクラン出土。	15-24	SK16No.4

第 23 図　SK11 ～ 18・20 近世墓平面図・断面図・出土遺物



遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
近世墓	1	明黄褐色（10YR7/6）	シルト	地山粒・地山ブロック小をやや多く含む。しまり弱。	墓壙埋戻土

No	種類	遺構名／層	材質	大きさ（mm）	特徴	図版	登録番号
1	煙管雁首	SK19	銅製品	長 64　火皿径 12　径 4～9　重 4.9 g	羅宇残る。胴部上面銀打痕。側面順付け痕。	15-1	SK19No.1
2	煙管吸口	SK19	銅製品	長 53　径 2～8　重 3.3 g	羅宇残る。胴部下面順付け痕。	15-2	SK19No.3
3	鋸？	SK19	鉄製品	長 32　厚 5　重 2.6 g	木質残る。	15-3	SK19No.2
4	刀子	SK19	鉄製品	長 36　幅 14　重 7.8 g	刃部のみ、厚 3mm。	15-6	SK19No.9
5	刀子	SK19	鉄製品	長 75　幅 9～13　重 8.3 g	刃長：52mm・厚 3mm、茎長：23mm・厚 2mm、柄木質。	15-4	SK19No.7
6	刀子	SK19	鉄製品	長 45　幅 4～14　重 7 g	刃長：23mm・厚 2mm、茎長：22mm・厚 3mm。	15-5	SK19No.4
7	柄鏡	SK19	銅製品	長 112　重 57.9 g	鏡部径：62～64mm・縁部厚 2mm・内区厚 1mm、柄長：50mm・幅 11～13mm・厚 2mm、鏡面木質付着、鏡裏紙付着、「藤原光孝作」の銘。	15-7	SK19No.6
8	寛永通宝	SK19	銅銭	—	古寛永。	15-8	SK19No.8-1
9	寛永通宝	SK19	銅銭	—	新寛永　文銭。	15-9	SK19No.8-2
10	寛永通宝	SK19	銅銭	—	古寛永？	15-10ab	SK19No.8-3

第 24 図　SK19 近世墓平面図・断面図・出土遺物

【SK20 墓】（第 17・23 図　写真図版 11）

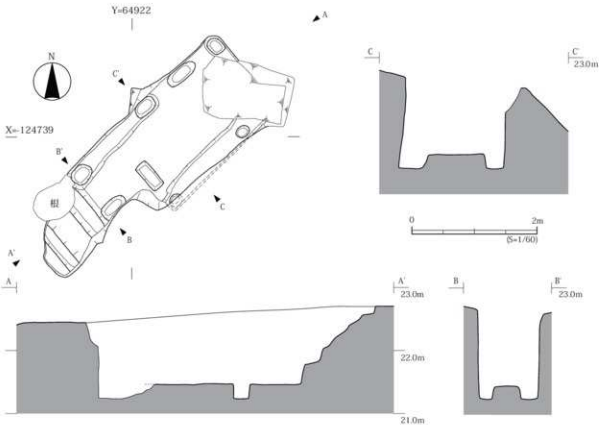
平面形は楕円形で、規模は、長軸 144cm、短軸 89cm、検出面からの深さ 26cm を測る。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は地山粒・地山ブロックからなる明黄褐色シルトの埋戻土である。遺物は出土していない。

〔地下室状遺構〕

C 区北で 1 基検出した。平場 1 の北辺に沿う位置にある。

【SX24 地下室状遺構】（第 25 図　写真図版 11）

全長 4.4m の地下室状の遺構である。平面形は長方形を呈し、室部分と階段部分に分かれる。室部分は全長 2.7m、幅 1.6m、高さ 1.2m である。床は平坦で、壁は垂直に立ち上がるが、南辺の上部では内湾する。壁沿いには、幅 0.3 ～ 0.4m、深さ 0.2m の溝が階段と接続する西辺と北辺の一部を除



第 25 図　SX24 地下室状遺構平面図・断面図

いて掘削されている。柱穴とみられる長軸 0.4 ～ 0.6m、短軸 0.2 ～ 0.3m のピットを 8 個確認した。階段部分は全長 1.7m、幅 0.5 ～ 1 m、1 段の段差 0.2 ～ 0.4m で下から 2 段目以降は、段と平坦面の境が不明瞭になる。堆積土は、しまりの弱い地山粒からなる明黄褐色シルトで埋め戻されている。遺物は出土していない。

〔溝〕

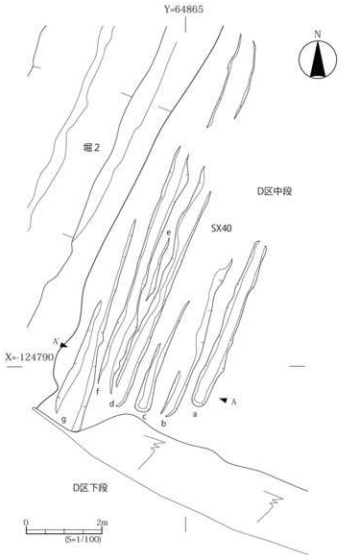
A区で 1 条、D区で 2 条検出した。後者は柱列とほぼ同位置にあり、柱列を切って掘削されている。

【SD9 溝跡】（第 8・10 図　写真図版 5）

A区で検出した南北方向の溝である。基本層Ⅲ層で埋め戻された堀跡 1 の東壁に沿って掘られており、逆「く」字に緩やかに屈曲して延びる。検出した長さは約 22m、幅 0.7 ～ 1.2m である。断面形は逆台形を呈し、深さは 0.5m である。方向は、堀跡 1 と同じである。堆積土は、粘性のある褐色シルトが自然堆積する。遺物は出土していない。

【SD36 溝跡】（第 21・22 図　写真図版 13）

D区上段の平坦面で検出した東西方向の溝である。SD37 溝跡と重複し、これより新しい。検出した長さは約 13.4m、幅は最大 1 .0m である。断面形は逆台形で、深さは 0.2m 前後である。方向は N-60° -W、堆積土は褐色粘質シルトが自然堆積する。遺物は出土していない。



遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
SX40	1	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山小ブロックを多く含む。炭化物を少し含む。	
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山大ブロックを少し含む。	自然堆積土

第 26 図　SX40 小溝状遺構群平面図・断面図

〔土坑〕

B区5基、C区2基、D区で1基検出した。

【SK4 土坑】（第 27 図　写真図版 9）

B区南側整地層と SD3 溝跡の間で検出した長楕円形の土坑である。SK6 土坑と重複し、これより

【SD37 溝跡】

（第 21・22 図　写真図版 13）

D区上段の平坦面で検出した東西方向の溝である。SA39 柱列跡と SD36 溝跡と重複し、SA39 柱列跡より新しく、SD36 溝跡より古い。また、堀跡2と接続しており、前後関係は不明だが、溝の埋戻し後に堀跡2上層の土が堆積しることから、堀跡2の埋没よりは古い。検出した長さは約 12.8m、幅は最大 1 .2m、である。断面形は逆台形で、深さは 0.2 ～ 0.4m である。方向は N-60° -W、黄褐色粘土質シルトで埋め戻されている。遺物は出土していない。

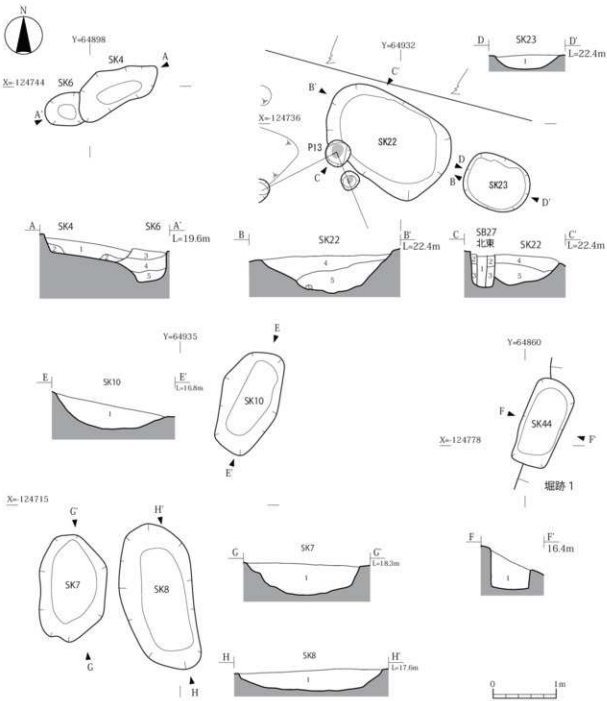
〔小溝状遺構群〕

D区中段の平坦面西側の1ヶ所で検出した。

【SX40 小溝状遺構群】

（第 26 図　写真図版 14）

南北方向に並行して延びる小溝群である。堀跡1に沿って位置し、東西 4 m、南北 8 m の範囲に広がる。小溝は長さが最大で 6.7m、幅が 0.3 ～ 0.5m、深さが 0.1 ～ 0.2m ほどで、断面形は皿状を呈し、0.1 ～ 0.5m の間隔で並ぶ。方向は堀跡 1 とほぼ一致する。堆積土は地山ブロックを含む褐色シルトの自然堆積である。遺物は出土していない。



遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
SK4	1	褐色（10YR4/1）	シルト	炭化物ブロック小、炭化物粒をやや多く含む。	自然堆積土
	2	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	地山粒をやや含む。	自然堆積土
SK 6	3	褐色（10YR4/1）	シルト	地山粒をやや含む。	自然堆積土
	4	灰黄褐色（10YR4/2）	粘土質シルト	地山ブロック小をやや含む。	自然堆積土
	5	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	地山ブロック小をやや多く含む。	自然堆積土
SK7	1	明黄褐色（7.5YR7/6）	シルト	地山ブロック小、地山粒からなる。しまりなし。	埋没土
SK8	1	明黄褐色（7.5YR7/6）	シルト	地山ブロック小、地山粒からなる。しまりなし。	埋没土
SK10	1	明黄褐色（7.5YR7/6）	シルト	地山ブロック小、地山粒からなる。しまりなし。	埋没土
P13	1	褐灰色（10YR4/1）	シルト	地山粒をやや含む。	柱痕跡
	2	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	地山ブロック小をやや多く含む。	掘方埋土
	3	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	掘方埋土。地山ブロック小をやや多く含む。	掘方埋土
SK22	4	明黄褐色（10YR7/6）	シルト	地山粒をやや含む。しまりやや強。	埋没土
	5	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	地山粒、黒褐色土粒をやや多く含む。	埋没土
SK23	1	にぶい黄褐色（10YR5/3）	シルト	明黄褐色ブロック大、炭化物粒を多く含む。	埋没土
SK44	1	明黄褐色（10YR6/6）シルト	シルト	地山ブロック小を大量に含む。	埋没土

第 27 図　SK4・6・7・8・10・22・23・44 土坑平面図・断面図

新しい。規模は、長軸 142cm、短軸 61cm、検出面からの深さ 28cm である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は炭化物を含む褐色シルトが自然堆積する。遺物は出土していない。

【SK6 土坑】（第 27 図　写真図版 9）

B 区整地層と SD3 溝跡の間で検出した楕円形の土坑である。SK4 土坑と重複し、これより古い。規模は、長軸 58cm、短軸 53cm、検出面からの深さ 48cm である。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。堆積土は地山ブロック・地山粒を含む黄褐色シルトが自然堆積する。遺物は出土していない。

【SK7 土坑】（第 27 図　写真図版 9）

B 区北側の沢 2 斜面で検出した楕円形の土坑である。規模は、長軸 171cm、短軸 100cm、検出面からの深さ 48cm である。底面は緩やかな弧状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、しまりの弱い地山粒・地山ブロックからなる明黄褐色シルトで埋め戻されている。一頭分とみられる馬骨が出土している。

【SK8 土坑】（第 27 図　写真図版 9）

B 区北側の沢 2 斜面で検出した長楕円形の土坑である。規模は、長軸 236cm、短軸 115cm、検出面からの深さ 33cm である。底面は緩やかな弧状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、しまりの弱い地山粒・地山ブロックからなる明黄褐色シルトで埋め戻されている。一頭分とみられる馬骨が出土している。

【SK10 土坑】（第 27 図　写真図版 9）

B 区北側の沢 2 斜面で検出した楕円形の土坑である。規模は、長軸 168cm、短軸 101cm、検出面からの深さ 40cm である。底面は緩やかな弧状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、しまりの弱い地山粒・地山ブロックからなる明黄褐色シルトで埋め戻されている。一頭分とみられる馬骨が出土している。

【SK22 土坑】（第 27 図）

C 区北で検出した長楕円形の土坑である。規模は、長軸 234cm、短軸 146cm、検出面からの深さ 48cm である。底面は緩やかな弧状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、下半が表土由来とみられる黒色土を主とする黒褐色シルト、上半が地山由来の黄褐色シルトで埋め戻されている。遺物は出土していない。

【SK23 土坑】（第 27 図）

C 区北で検出した隅丸方形の土坑である。規模は、長軸 105cm、短軸 84cm、検出面からの深さ 23cm である。底面は緩やかな弧状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、地山由来のにぶい黄褐色シルトで埋め戻されている。遺物は出土していない。

【SK44 土坑】（第 27 図）

D 区の西側中央で検出した隅丸長方形の土坑である。堀跡 1 と重複し、それより新しい。規模は、長軸 141cm、短軸 67cm、検出面からの深さ 60cm を測る。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。堆積土は、地山粒からなる明黄褐色シルトによって埋め戻されている。遺物は出土していない。

3）遺構外出土の遺物

前項までに述べたもの以外にも遺構外から遺物が出土しており、施釉陶器と柄鏡がある。施釉陶器にはB区整地層2の確認面で検出した頸部から胴上部の細片（写真図版15-25）と皿の底部破片（15-26）がある。15-25は外面に櫛描文、灰釉が施された古瀬戸瓶子とみられる。15-26は外面が無釉、内面が灰釉の皿で、特徴から16世紀末～17世紀の肥前陶器皿の可能性がある。

柄鏡（15-27）は、C区北側の表土上で採集した銅製の柄鏡である。全長19.3cm、鏡部径11.1cm、柄長8.2cm、柄下部に一部紐が残る。鏡部裏面に「藤原光攻」の銘がある。壊された近世墓の副葬品とみられる。

4．自然科学分析

（1）小屋館城跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

小屋館城跡は、宮城県気仙沼市松崎中瀬に所在し、気仙沼湾に面した小丘陵の突端部に位置する。測定対象試料は、SD3溝内で検出したSX25集石遺構出土の人骨2点である（表4）。人骨はSX25集石遺構の中層から出土し、1体の埋葬人骨として捉えられたうちの2点を試料とした。

本遺跡の存続期間は、文献史料から14～16世紀と推定されている。また、城館の廃絶後の18～19世紀にかけての近世墓群も検出されている。このことから、人骨の推定年代は14～19世紀である。

2　測定の意義

試料の年代を明らかにする。

3　化学処理工程

（1）骨試料はコラーゲン抽出（Collagen Extraction）を行う（表4に「CoEx」と記載する）。試料を超純水の入ったガラスシャーレに入れ、ブラシ等を使い、根・土等の付着物を取り除く。試料をビーカー内で超純水に浸し、超音波洗浄を行う。

（2）0.2Mの水酸化ナトリウム水溶液を試料の入ったビーカーに入れ、試料の着色がなくなるまで、1時間ごとに水酸化ナトリウム水溶液を交換する。その後、超純水で溶液を中性に戻す。試料を凍結乾燥させ、凍結粉砕用セルに入れ、粉砕する。リン酸塩除去のために試料を透析膜に入れて1Mの塩酸で酸処理を行い、超純水で中性にする。透析膜の内容物を遠心分離し、得られた沈殿物に超純水を加え、90℃に加熱した後、濾過する。濾液を凍結乾燥させ、コラーゲンを得る。

（3）抽出した試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO2）を発生させる。

（4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（5）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
（6）グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

（1）δ ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表4）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
（2）^{14}（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表4に、補正していない値を参考値として表5に示した。^{14}C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1 σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
（3）pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の14C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表4に、補正していない値を参考値として表5に示した。
（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1 σ = 68.2%）あるいは2標準偏差（2 σ = 95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ ^{13}C補正を行い、下1桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.3較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表5に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6　測定結果

測定結果を表４、５に示す。

試料の ^{14}C 年代は、SX25-No.1、SX25-No.2 のいずれも 350 ± 20yrBP である。暦年較正年代（1 σ）は、SX25-No.1 が 1477 ～ 1625cal AD、SX25-No.2 が 1489 ～ 1630cal AD の間にそれぞれ３つの範囲で示される。同一個体に属する２点の試料は、ほぼ同年代を示した。

これらの年代値は、近世墓群の年代よりも明らかに古く、城館の存続期間とされる 14 ～ 16 世紀を含む結果となった。なお、人骨が出土した遺跡の立地を考慮すると、生前の海産物の摂取による海洋リザーバー効果の影響で、実際の年代より古い年代値が示される可能性に注意を要するが、試料の $\delta^{13}C$ はそれを明確に示す値ではないことから、年代値への影響はあるとしても小さいと考えられる。試料の保存状態について検討すると、コラーゲン回収率（＝コラーゲン量／処理した試料量）は SX25-No.1 が 3.0%、SX25-No.2 が 3.9%の適正な値である。炭素含有率（酸化回収率＝回収された二酸化炭素中の炭素相当量／燃焼された試料量）はいずれも 45%で、骨コラーゲンとしておおむね適正か、若干高い値となっている(van Klinken 1999)。以上のことから、今回の測定結果は試料となった骨コラーゲンの本来の特徴をおおむね問題なく示していると判断される。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

van Klinken, G.J. 1999 Bone collagen quality indicators for palaeodietary and radiocarbon measurements, Journal of Archaeological Science, 26, 687-695

表４　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}C$ 補正値）

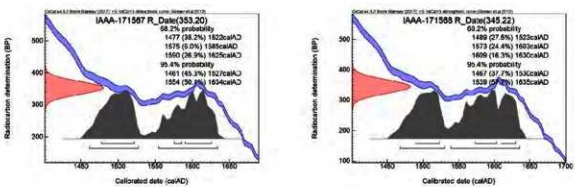
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}C$ (‰) (AMS)			$\delta^{13}C$ 補正あり					
								Libby Age (yrBP)			pMC (%)		
IAAA-171567	SX25-No.1	SD3 溝跡大別２層	人骨（右大腿骨）	CoEx	-20.93	±	0.28	350	±	20	95.70	±	0.25
IAAA-171568	SX25-No.2	SD3 溝跡大別２層	人骨（左大腿骨）	CoEx	-20.47	±	0.23	350	±	20	95.79	±	0.26

[IAA 登録番号：#8793]

表5　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}C$ 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	$\delta^{13}C$ 補正なし		暦年較正用	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC（%）	(yrBP)		
IAAA-171567	290 ± 20	96.50 ± 0.24	353 ± 20	1477calAD - 1522calAD (35.2%) 1575calAD - 1585calAD (6.0%) 1590calAD - 1625calAD (26.9%)	1461calAD - 1527calAD (45.3%) 1554calAD - 1634calAD (50.1%)
IAAA-171568	270 ± 20	96.68 ± 0.26	345 ± 22	1489calAD - 1523calAD (27.5%) 1573calAD - 1603calAD (24.4%) 1609calAD - 1630calAD (16.3%)	1467calAD - 1530calAD (37.7%) 1539calAD - 1635calAD (57.7%)

［参考値］



第 28 図　暦年較正年代グラフ（参考）

（2）2017 年気仙沼市小屋館城跡出土人骨について

東北大学大学院歯学研究科
鈴木敏彦・波田野悠夏

1．はじめに

宮城県気仙沼市小屋館城跡において、2017 年の発掘調査の際、中世に属すると思われる人骨１体が発見された。遺存状態は概して不良で、一部の骨と歯だけが確認できた。

以下に人骨の分析結果を記す。

2．人骨の遺存状態と形態学的特徴

SX25 人骨

(1) 頭蓋

歯のみが遺存する。全て遊離歯で、対応する歯槽を伴ったものはない。

残存歯は次の歯式で示す。水平線は上下顎の境界を、垂直線は正中線を表し、向かって左側が個体の右を意味する。歯の記号が記されている箇所は歯の存在が確認された部分で、Ｉは切歯、Ｃは犬歯、Ｐは小臼歯、Ｍは大臼歯をそれぞれ表し、また数字は同一歯種内での順位を表す。

2	2		5	4	6	6		6		6	4	4	5		2
◇	◇		◇	◇	◇	◇		◇		◇	◇	◇	◇		◇
M3	M2	×	P2	P1	C	I2	×	I1	×	C	P1	P2	M1	×	M3
×	M2	M1	P2	P1	C	I2	×	×	×	×	×	×	M1	M2	×
	◇	◇	◇	◇	◇	◇							◇	◇	
	3	5	3	3	4	3							5	3	

◇：歯槽の有無は確認できないが、歯冠・歯根共に残る遊離歯
×：歯槽、歯ともに確認できないもの
小さな数字は咬耗度（Molnar, 1971）を示す。

確認できた歯に部位の重複はなく、また各歯の咬耗状態も整合しており、全て同一個体のものと考えられる（写真１）。歯冠計測値は表６に示す。

上顎両側犬歯、上顎右側切歯および上顎左中切歯の舌側面には顕著な咬耗が認められる（写真２）。

齲蝕は認められない。

(2) 体幹骨

部位の同定ができたものはない。

(3) 上肢骨

太さから判断して上腕骨骨幹部と思われるものが遺存するが、破損部が多く、また骨質が粗造化しているために形態的特徴を欠き、左右の別は不明である。

さらに第二ないし第四中手骨の骨幹部と思われるものが1点遺存するが、左右の別や順位の別は不明である（写真3）。

(4) 下肢骨

両側大腿骨の骨体部が遺存する。右は近位1/3程度の一部分および骨体中央部から内側上顆上方の高さまでが残る。左は小転子の遠位から膝窩面上方までが残る（写真4）

3．その他

年齢に関しては、歯の咬耗状態から判断すると、壮年期と考えられる。また残存する犬歯のエックス線写真を撮影し、歯髄腔の加齢変化に基づくCameriere（2007）の年齢推定式を適用させたところ、30～45歳という値になった。

性別判定に必要な骨の部位を欠くため、男女は不明である。

表6 小屋館城跡出土 SX25 人骨永久歯の計測値（mm）

		SX25	
		右	左
歯冠幅（近遠心径）			
上顎	I1	−	×
	I2	×	−
	C	7.75	7.52
	P1	6.76	7.05
	P2	6.83	6.97
	M1	−	10.16
	M2	8.17	−
	M3	7.93	7.37
下顎	I1	−	−
	I2	5.94	−
	C	7.25	−
	P1	6.48	−
	P2	7.10	−
	M1	11.61	11.37
	M2	9.71	9.41
	M3	−	−
歯冠厚（頬・頬舌径）			
上顎	I1	−	×
	I2	6.38	−
	C	8.13	8.11
	P1	8.72	8.98
	P2	8.81	8.84
	M1	−	11.11
	M2	10.27	−
	M3	9.91	9.96
下顎	I1	−	−
	I2	6.12	−
	C	8.19	−
	P1	7.46	−
	P2	8.13	−
	M1	10.76	10.55
	M2	9.75	9.57
	M3	−	−

−は該当する歯がないこと
×は破損等のため計測値が得られないことを示す

文献

Molnar S (1971) Human tooth wear, tooth function and cultural variability. Am J Phys Anthropol 34:175-190.

Cameriere R, Ferrante L, Belcastro MG, Bonfiglioli B, Rastelli E, Cingolani M (2007) Age estimation by pulp/tooth ratio in canines by peri-apical X-rays. J Forensic Sci 52:166-170.

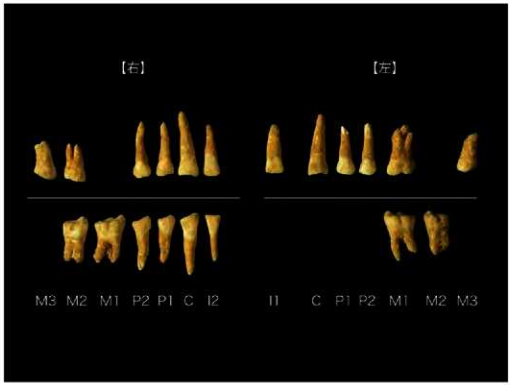


写真1　SX25 集石遺構出土人骨（歯）

写真2　SX25 集石遺構出土人骨の歯の舌側面にみられた強度の咬耗

写真 3　SX25 集石遺構出土人骨（上肢骨）

写真 4　SX25 集石遺構出土人骨（下肢骨）

5．まとめ

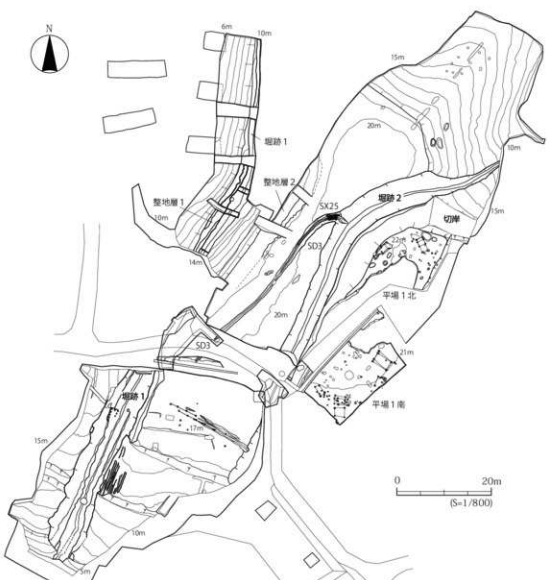
調査した遺構は、城跡に伴う遺構と、そのほかの遺構に分けられる。それぞれの遺構の特徴や性格を記載したうえで、小屋館城跡の全体像や年代を提示して調査成果のまとめとする。

（1）遺構の特徴と性格

1）城跡に伴う遺構（第 29 ～ 31 図）

平場 1 ヶ所、切岸 1 ヶ所、堀跡 2 条、整地層 2 ヶ所、溝跡 1 条、集石遺構 1 ヶ所を調査した。集石遺構を除いて、遺物は出土していないが、遺構の特徴から城跡に伴うと判断できる。

堀跡 1・2 と切岸　堀跡 1 は全長 120m 以上の長大な堀だが、丘陵尾根から南斜面の D 区と沢 1 の A 区部分では、幅と深さが大きく異なる。おおよそ D 区では幅 7.0 ～ 9.0m、深さ 2.0 ～ 4.0m、A 区



第 29 図　小屋館城跡城館期全体図

では2.0m、深さ1.2mで、後世の削平を考慮しても規模の差は明らかであり、当初から造り分けがなされたと考えられる。地形をみると、堀が大規模なD区は、丘陵尾根が連続する平坦面に位置する。対して、堀が小規模なA区は、幅約20～30m、比高10～15mほどの沢1に面している。堀跡1は通行の容易なD区では大規模な掘削をすることによって、沢1と合わせて丘陵を断ち切り、北縁部からの敵の侵入を防ぐ目的があったと推定できる（註1）。

堀跡2は堀跡1の東側に位置する大規模な堀で、北側の沢2と南側の沢4を結ぶように掘削されている。沢2にある北端部を除く丘陵尾根平坦面では、長74.4m、幅4.0～5.0m、深さ1.5～2.0mの規模をもつ。堀跡1との間には SD3 溝跡、SX25 集石遺構、整地層2があるが、ほかに城跡に伴う遺構はない。堀跡1は北端部では、規模が著しく縮小するが、その平場側には斜面を削り出して切岸を設けていることから、堀跡2は自然地形を利用し、堀跡1と合わせて尾根筋を断ち切る大規模な二重の堀切として造られている。なお、小規模な北端部は、防御というより排水の便を図った部分であり、切岸がこの部分の防御を担ったと考えられる（註2）。

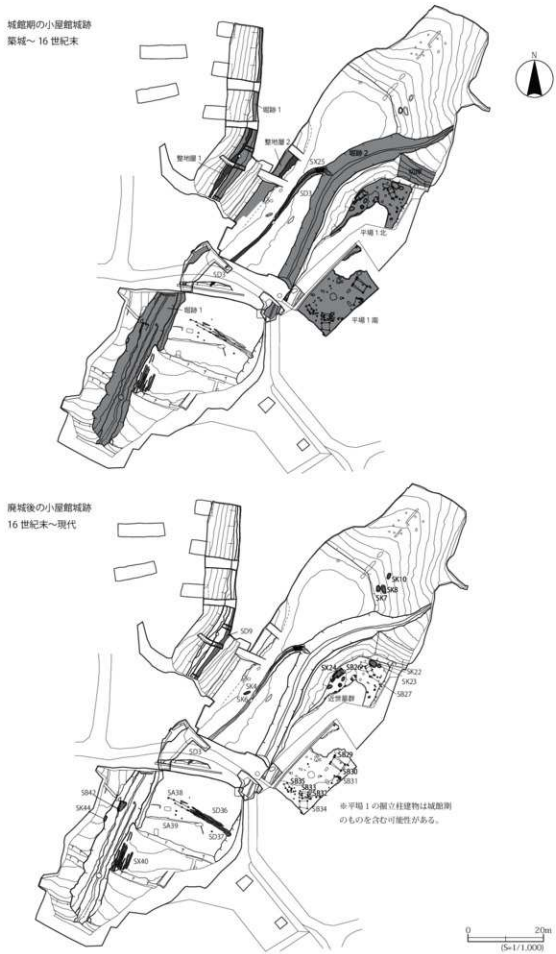
整地層　堀跡1からみて整地層1は標高の低い沢1側、整地層2は標高の高いB区に位置し、ともに堀跡1に沿っていることから城跡に伴う整地層とみられる。整地層1は、堀跡1が切る旧表土（基本層Ⅵ層）直上に地山由来の土で盛土されており、位置からみて土塁の痕跡と推定できる。整地層2は、堀上部の斜面を急にするための整地の可能性があるが、上部が大きく削平されているため詳細は分からない。

溝跡と集石遺構　SD3 溝跡は堀跡1と堀跡2の間を延びる南北溝である。南は削平されているが、北端では堀跡2に取付いており、接続部の形状や底面標高から堀跡2と同時期のものと思われるが、性格の特定は難しい。

SX25 集石遺構は、集石の下からほぼ一体分の人骨が出土し、墓の可能性が推定できる遺構である（註3）。ＡＭＳ測定の結果、人骨は15世紀後葉～17世紀前葉の年代が示されている。SD3 溝跡の範囲内にあることから、人の埋納と集石は、SD3 溝跡がある程度埋没した状況で行われている。また、堀跡2との接続部近くに単独であることから、それらの行為は場所を意図的に選択したとみられる。中世の土壙墓が一定の範囲内に複数基あるのを通例とすることを踏まえると特異であるといえる。

共伴した茶臼は、2/3が欠損した下臼である。周囲から接合する資料や上臼は確認していない。臼は人骨とほぼ同じレベルで、底面を上に向けた水平な状態で出土しており、意図的に壊れたものを埋置したとみてよい。年代は、茶臼が形態的な変化に乏しいうえに、部分的な本資料では限定が難しい。日本列島内の出土茶臼は最古例が13世紀中葉にあること、15世紀後半から17世紀前半では、城や館、集落での出土が多いことが示されており（桐山1996）、群馬県域などでも同様の状況が確認されている（谷藤・山下・水谷2003）。その年代は、人骨の15世紀後葉～17世紀前葉という年代とほぼ重なってくる。

東北の中世墓では、礫を多数用いる例や欠損した陶器・臼などを共伴する例が一定数認められる（中世墓資料集成研究会2004）。人骨の出土も踏まえれば SX25 が墓の蓋然性は高いが、その検出状況が特異であり、類例も確認できなかったことから、一般的な墓とは言い難い。検出した位置と関わる



第30図　小屋館城跡の変遷

特殊な意味が予想されるが、さらなる追求は本例のみでは難しい。類例の増加に期待したい。なお、SX25は、厳密にはSD3溝跡との重複関係から廃城後の遺構の可能性もあるが、場所の選択やSD3溝跡と堀跡2の規模に基づく埋没時間の差を踏まえると、城存続期の遺構とみるのが妥当である。

2）城跡に伴うまたは廃城後の遺構（第30図）

掘立柱建物跡9棟、柱列跡2条、近世墓10基、地下室状遺構1基、溝跡3条、小溝状遺構群1ヶ所、土坑8基を調査した。これらの詳細な年代は明らかでないが、城跡の遺構と重複する遺構は、全て城跡より新しく、古い遺構はない。よって、これらは城跡と同じか、廃城後の遺構とみられる。

掘立柱建物跡　8棟、D区で1棟調査した。平場1の建物はいずれも桁行・梁行ともに1間分の柱穴を検出したのみだが、調査区外に延びる建物もあるとみられる。全体的に標高20m前後の南側に多く分布し、同じく平場にある近世墓群とは建物以外の柱穴も含めて重複しない。このため、近世墓群と同時期と考えることもできるが、確証はない。堀跡2内側の平場にあることを踏まえると、城に伴う建物を含む可能性がある。D区のSB42は堀跡1より新しく、堀跡1が中位まで埋没した頃の小屋などと考えられる。

柱列跡　D区で2条調査した。SA38・39は、堀跡1・2の南端部分の間を堀と直交する方向で延び、平場などとして利用された痕跡は確認していない。また、これらは廃城後にD区で複数回行われた造成の段の方向ともほぼ平行しており、確認できる最後の造成よりは古い。不明な点は残るが、廃城後の遺構と考えておきたい。

近世墓　10基調査した。副葬品は手鏡、銭貨、煙管、刀子、銅製留金具などが出土した。人骨は遺存状態が悪く、桶など棺の痕跡は確認できなかった。検出状況が良好な墓が少ないため、銭貨や副葬品の組成は明らかでない。

時期を比較的限定できる煙管雁首をみると、火皿と首部の接合部に補強帯が認められず、首部の屈曲が弱い直線的な資料である。そのような特徴をもつ資料は、古泉編年（古泉1985）のⅣ～Ⅴ期に認められる。SK19はⅣ期、SK17はⅤ期、カクランはⅤ期以降に該当する資料とみることができる。また、SK12も含めて、これらの墓では吸口も出土しているが、先端から直線的に延びて緩やかに屈曲する資料で占められており、肩をもって段のつくものはなく、Ⅲ期以前に遡ることはない。Ⅳ・Ⅴ期は、それぞれ18世紀前半、18世紀後半の年代が示されているが、Ⅳ期の煙管が出土したSK19では出土銅銭の組み合わせが、古寛永銭4枚、文銭1枚、不明1枚で、煙管と同じく、やや古い傾向がうかがえる。調査した近世墓では、17世紀まで遡る遺物は認められない。C区の墓の年代は、18世紀以降とみられ、付近で確認した墓碑の年紀（宝永4～天保7：1708～1836）が18世紀後半を中心とすることと齟齬がない。

3）その他の遺構

A区のSD9溝跡は堀跡1が埋め戻されたのち、その東壁に沿って掘られた幅1.0m前後、深さ0.5m程の溝である。廃城後に埋め戻された堀部分が、通路などとして利用された際の排水や根切りを目的

第31図　小屋館城跡復元図

とした溝とみられる。D区のSD36・37溝跡は、SA38柱列跡と並行し、堀跡1・2と直交する方向で延びており、東側で堀跡2と接続するものの新旧関係は不明である一方、柱列跡より新しいことから廃城後の遺構とみておく。SX40小溝状遺構群は、廃城後に造成されたD区中段平場を掘り込んでおり、廃城後の土地利用にかかわる遺構である。

SK7・SK8・SK10土坑では、それぞれ1頭分の馬骨が出土している。周辺では飼育していた馬が死ぬと近所に埋葬したという話が伝わっており、埋土のしまりが弱かったことと合わせて、廃城後の遺構とみるのが妥当である。SK44土坑はD区造成後に掘り込まれており、廃城後の遺構である。なお、SX24地下室状遺構と上記以外の土坑の時期や性格は不明である。

4）城跡の遺構と廃城後の遺構

城跡の遺構には平場、切岸、堀跡、整地層、溝跡、集石遺構があり、平場の掘立柱建物跡には城の存続期に遡るものが含まれている可能性がある。このうち堀跡1・2は通行の容易な北西側の尾根筋を遮断し、南・北の沢という自然地形と合わせて外敵の侵入を防ぐ目的で掘削された大規模な二重の堀切とみられる。また、今回の調査によって、城北縁の範囲が明らかとなり、城の規模が判明した。調査以前は城跡南区のみを城跡とする見方もあったが（紫桃1978）、城跡北区を含めた東西約170m、南北約350mの城跡であることが分かった。

廃城後の遺構には掘立柱建物跡、柱列跡、近世墓、溝跡、小溝状遺構群、土坑がある。廃城後の堀跡1・2は、尾根筋の平坦面周辺では、通路などとして利用されながら埋め戻されている。SB42はこの段階の建物である。それ以外の場所では自然に埋没したようである。また、堀跡2の延長上には現在も使える井戸があり、掘削時には堀が埋まり切っておらず、水が溜まりやすい場所と認識できる状況であったとみられる。近隣には「後堀」の屋号があり、堀の痕跡が一定期間残っていたことを知ることができる。城跡南区には、古谷館八幡館神社が造られているが、上記の遺構の内容からすると、周囲は畑や墓地、宅地などが広がる景観に転化したとみられる。

（2）小屋館城跡の構造と年代

1）小屋館城跡の構造

城が立地する丘陵は、現在よりも海や南側を流れる面瀬川に近く、周囲には湿地が広がっていたと推定できる。城跡の東側は、2011年の東日本大震災による津波襲来前は町並みが形成されており、それ以前は水田であった（写真図版1）。水田は17世紀中葉～後葉に面瀬川河口付近の海を埋め立てて、造成された可能性が指摘されており、それ以前は湾であった可能性がある（気仙沼市史編さん委員会1990）。また、平成25年度の調査で沢2周辺では、湿地性のグライ粘土層を確認しており、その付近は周辺で最も標高が低く、大雨のたびに冠水する。

西側は、城のある丘陵から平野を挟んだ南西の丘陵裾を面瀬川に合流する河川が直線的に流れている。この河川は、1947年の米軍航空写真では、明確に平野中央付近に流路の痕跡が確認でき、1977年の航空写真でも部分的に残っている（写真図版1）。流路の付け替え以前は、現在より城に

近い平野の中央付近を通って、面瀬川の河口付近で合流するか、直接海に流れ込んでいたとみられる。

こうした低地に東・南・西を囲まれた標高 20m 前後の急峻な丘陵に小屋館城は立地する。城は東から入る沢３によって、北区と南区に大きく分けられ、平場、切岸、堀切などで構成されている。平場は、北区で平場１を確認したほか、宅地化により不明瞭だが標高差や地形からみて、複数の平場があったとみられる。城跡南区は、大きく２つの平場からなるが、さらに分かれていた可能性もある。切岸は、丘陵東・南・西斜面がいずれも急斜面で、一定の傾斜を呈す箇所があり、調査で切岸を確認したことから、それらの場所にも切岸が設けられている可能性が高い。

堀は、北側に堀跡１・２が二重の堀切として設けられている。小屋館城は東、南、西は、急峻な斜面で平野との比高が大きい。ところが、城跡北縁部は、城の内外に緩やかな丘陵尾根が続く侵入の容易な箇所であり、三方を平野に囲まれた城にとって防御上の弱点であったとみることができる。二重の堀切は、両側から尾根筋に入る沢など自然地形を巧みに利用しつつ、連続する丘陵尾根を断ち切り、地形的な弱点を克服する北縁部の防御の要であったと評価できる。

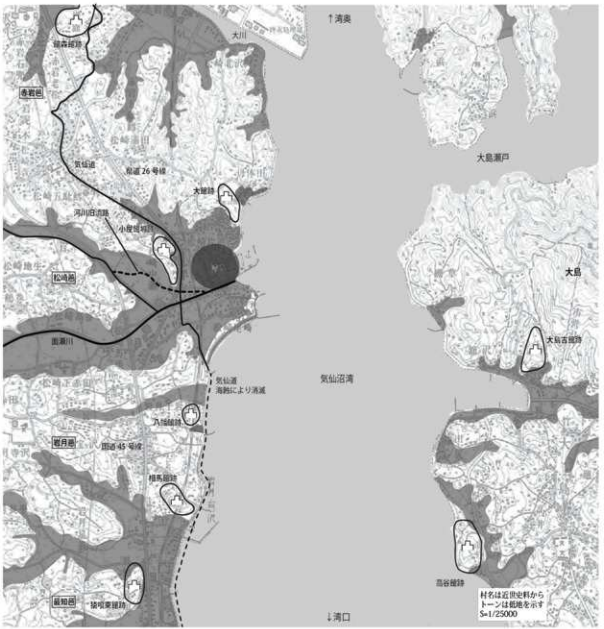
このほか、城跡北区・南区の間の市道部分に堀が想定できる。市道は元の地形を削平して造成されている北区南西端の宅地より一段低い。南区北端とは同じ高さにあるが、かつては一段高い畑だったといった近隣住民の話を複数得ている。地形的にも東から沢３、西から沢４が入り、尾根筋が狭く括れる場所であり、堀跡１・２同様に、沢を繋ぐ堀を設けていたと推定できる。さらに南区では２条の堀が過去の調査で確認されており（気仙沼市教育委員会 2018）、詳細は不明だが南側と北側の平場の高低差のある境目にあり、それぞれ防御的な意図による設定が考えられる。

以上のように、北半（城跡北区）と南半（同南区）に分かれる小屋館城を防御的な視点でみると、主な防御施設は、北から順に、沢１、沢２、沢４の間を連続する尾根筋を断ち切る二重の堀切（堀跡１・２）、両側から沢３・４が入る北半と南半の境に想定される堀、さらに南区の北側と南側の平場を分ける２条の堀がある。また、平場に接する斜面を急にした切岸を設けて防御を固めている。沢によって丘陵頂部の平坦面が狭くなる地点、高低差のある地点など、地形的変化の大きな位置に堀を設け、斜面をさらに急にするなど、地形を巧みに利用したプランと評価できる。城の周りも湿地や河川など水気の多い平野に面しており、急峻な丘陵斜面と合わせて、自然地形を活かした高い防御性が認められる。

２）年代と小屋館城の性格

城跡の年代を明示する遺物は出土していないが、SX25 集石遺構出土人骨が年代を考える参考になる。SX25 は堀跡２との接点に近い SD3 溝跡の範囲内にある墓の可能性が高い遺構で、上述したようにやや特異な面はあるものの、位置からみて城跡存続期とみるのが妥当である。人骨の年代は 15 世紀後葉～ 17 世紀前葉で、SX25 が SD3 がある程度埋没した段階での遺構であることを踏まえると、城跡の存続年代はやや遡り、おおむね 15 ～ 16 世紀前後と推定できる。これは、防御性の高い城館の多くが室町時代から安土桃山時代に築城されたという全国的な傾向とも符合する。

廃城は、近世墓の年代と墓碑の紀年からみると 18 世紀初頭以前となる。文献からみると、城主と推定される熊谷氏が、天正 18 年（1590）の奥州仕置の際に主家の葛西氏とともに没落したことを



第 32 図　小屋館城跡の周辺環境

踏まえて、16 世紀末とみておきたい（註 4）。

ところで、城跡東側の丘陵裾を通る県道 26 号線は、太平洋沿岸を仙台市から青森市を結ぶ国道 45 号線気仙沼バイパスの旧ルートで、気仙沼市域では近世の気仙道を踏襲、あるいは並走する。気仙道は、仙台から気仙沼に至る主要な街道で、17 世紀中頃にはその経路が確認できるという（宮城県教委 1980）。小屋館城跡周辺では、海岸線沿いの平地と西の山地から東に延びる丘陵の海岸に近い場所を南北に縦断する経路である。現在確認できる街道部分の地形や南側の気仙道に面した丘陵上に中世の城館跡が多く立地することから、小屋館城跡の存続期にもおおむね遡ると推定できる。

次に海に注目すると、小屋館城跡からは気仙沼湾を一望できる。その範囲は、大島南端と本土に挟まれた気仙沼湾南端から、大島架橋のかかる大島北部と本土の間の大島瀬戸までで、外海から湾内に入る二つの海路を見通すことができる。小屋館城跡は、湾内の海上交通を掌握可能な位置にある（第

32 図)。

気仙沼湾と気仙道を踏襲する旧国道 45 号線（県道 26 号線）は、現在でも主要な交通路であり、その重要性は近世以前にも遡ると思われる。城跡南の平場からは、これら全てを見通すことができる。これは単に見えるだけでなく、小屋館城に交通を押さえる意味もあったと考えるのが妥当であろう。小屋館城跡は、この地域における交通や物流を押さえる重要な城であり、地形を巧みに利用しつつ堀をはじめとした高い防御性を持つ施設で固められていたと考えられる。

註 1　堀跡 1 が沢 1 部分にも延びているのは、城の北縁部にあたり、南側に平場を控えるため防御性をより高めるためとみられる。

註 2　沢 4 と接続する堀跡 2 南端の東側では、水道止水工事に伴う市道部分の立会い調査で地山を標高 16.5m 前後、その 5 m 南側の D 区トレンチでは現代の造成による厚い盛土下標高 13.2m 程の高さで地山を検出しており、両地点を結ぶ地形として 37°～ 45°程の急斜面が推定できる。その角度は切岸 1 と近く、堀跡 2 南端脇の平場南側にも切岸が想定できる。

註 3　集石下の人骨出土から、飛礫を集めた集石土坑などの可能性は低い。

註 4　なお、「松岩古谷舘八幡系図」では、天文十（1541）年に落城したことが記されている。

【参考文献】

一関市博物館 2015『葛西氏の興亡』

河北地区教育委員会 1986『小泊遺跡』

桐山秀穂　1996「日本における茶臼の研究」『古代學研究所研究紀要』6　pp.43-99

気仙沼市教育委員会

2014「猿喰東館跡」『宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』pp.99-102

2017『気仙沼市内発掘調査報告書』1 気仙沼市文化財調査報告書第 9 集

2018『台の下遺跡』気仙沼市文化財調査報告書第 11 集

2018『台の下遺跡』気仙沼市文化財調査報告書第 12 集

2018『気仙沼市内発掘調査報告書』2 気仙沼市文化財調査報告書第 13 集

気仙沼市史編さん委員会

1988『気仙沼市史』Ⅱ先史・古代・中世編

1990『気仙沼市史』Ⅲ近世編

1995『気仙沼市史』Ⅷ資料編

1998『気仙沼市史』補遺編　考古・古文書等資料

気仙沼市総務部市史編さん室　1986『気仙沼市史』Ⅰ自然編

気仙沼史談会　1978『気仙沼地方熊谷家譜集成』NSK 地方出版

児玉幸多　坪井清足　監修　1981『日本城郭体系』第 3 巻山形・宮城・福島　新人物往来社

千田嘉博　1991「戦国期城郭・城下町の構造と地域性」『ヒストリア』129　pp.100-130

多賀城市教育委員会　1998『大日北遺跡』多賀城市文化財調査報告書第 49 集　多賀城市文化財センター

谷藤保彦　山下歳信　水谷貴之　2003「群馬県内出土の茶臼について」『研究紀要』21

群馬県埋蔵文化財調査事業団　pp.61-86

中世墓資料集成研究会　2004『中世墓資料集成―東北編―』

西本和哉　2015「近世墓から窺える東北産大飢饉」『宮城考古学』17　宮城県考古学会 pp.169-180

藤澤典彦　1994「六道銭の成立」『出土銭貨』2 出土銭貨研究会 pp.15-19

宮城県教育委員会　1979「(8) 南最知遺跡」『宮城県文化財調査略報』pp.132-135

宮城県教育委員会　2018『石川原遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 247 集

1　1947.11.11 の小屋館城跡（米軍撮影 USA-M638-48）

2　1977.10.18 の小屋館城跡（国土地理院撮影 CTO779-C9-32）

写真図版 1　小屋館城跡周辺の状況

1　小屋館城跡と調査区の全景（南東から　2017 年撮影）

2　小屋館城跡と調査区の全景（北から　2017 年撮影）

写真図版 2　小屋館城跡と調査区の全景

1　小屋館城跡と三陸沿岸道路（南西から　2018 年撮影）

2　城跡を横断する三陸沿岸道路（北東から 2018 年撮影）

3　小屋館城跡遠景（東から）

4　調査区と北西から延びる丘陵（南東から）

5　小屋館城跡と気仙沼湾・大島（西から）

写真図版 3　小屋館城跡の周辺と三陸沿岸道路

1　A区・B区全景（北西から）

2　A区調査前（南から）

3　B区調査前（南から）

4　A区トレンチ調査（南東から）

5　B区北東側の斜面と沢2（南西から）

写真図版4　A区・B区全景と調査前の状況

1　堀跡1 C-C' 断面（北から）

2　堀跡1 D-D'（北東から）

3　堀跡1全景（南から）

4　堀跡1全景（北から）

写真図版5　A区　堀跡1

1　堀跡１全景（北から）

2　堀跡１E-E' 断面
（南から）

3　堀跡１G-G' 断面
（南から）

写真図版６　D区　堀跡１（１）

1　堀跡１全景（南から）

2　堀跡１全景（南東から）

3　堀跡１全景（南西から）

写真図版７　D区　堀跡１（２）

1　切岸と堀跡２の北端（北から）

2　堀跡２と平場１（南西から）

3　堀跡２と平場１（北から）

4　堀跡２と SD ３溝跡（北から）

写真図版８　Ｂ・Ｃ区　堀跡２（１）

1　堀跡２C-C′ 斜面断面（北から）

2　堀跡２C-C′ 断面（北から）

3　堀跡２D-D′ 断面（北から）

4　堀跡２E-E′ 断面（北から）

5　D 区堀跡２（南から）

6　整地層２断面（北西から）

7　SK4・6 土坑断面（東から）

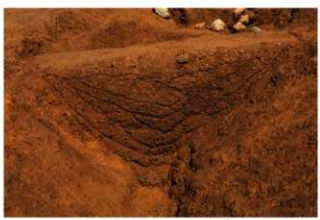
8　SK7・8・10 土坑完掘（東から）

9　堀跡２と現代の井戸（東から）

写真図版９　B・C・D区　堀跡２（２）・整地層・B区の土坑

1　SD3 溝跡と堀跡 2（南から）

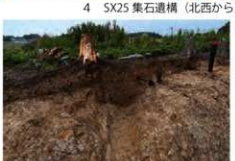
2　SD3 溝跡南側（北から）



3　SD3 溝跡断面 a-a'（南から）

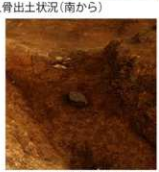
4　SX25 集石遺構（北西から）

5　SX25 集石遺構人骨出土状況（南から）



6　SD3 溝跡断面 c-c'（南から）

7　SD3 溝跡断面 b-b'（東から）



8　SX25 集石遺構茶臼出土状況（西から）

写真図版 10　B区　SD3 溝跡、SX25 集石遺構

1　平場 1 北側（西から）

2　削平された平場と近世墓群の断面（東から）

3　近世の墓碑（東から）

4　SK19 墓遺物出土状況（南西から）

5　SX24 地下室状遺構（北東から）

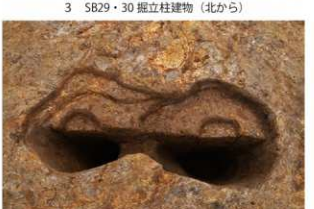
写真図版 11　C 区　平場 1 北と近世墓群

1　平場 1 南全景（真上から：上が南東）

2　平場の柱穴群（南東から）

3　SB29・30 掘立柱建物（北から）

4　P53・P61 断面（南西から）



5　P67・P68 断面 (南西から)

写真図版 12　C 区　平場 1 南と掘立柱建物跡

1　D区全景（南東から）

2　SA38・39柱列跡、SD36・37溝跡検出状況（西から）

3　SD37、堀跡2F-F'断面（南から）

4　調査開始時のD区（西から）

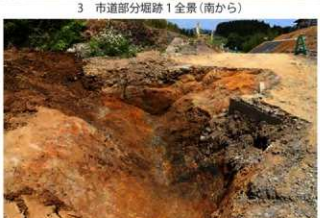
写真図版13　D区　堀跡2、柱列跡、溝跡

1　SX40 小溝状遺構群（東から）

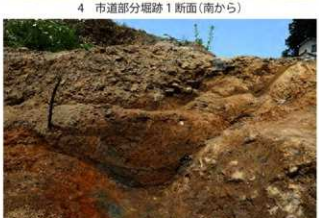
2　D 区基本土層（西から）

3　市道部分堀跡 1 全景（南から）

4　市道部分堀跡 1 断面（南から）



5　市道部分堀跡 2 全景（南西から）



6　市道部分堀跡 2 断面（南西から）

7　SX25 集石遺構出土遺物

写真図版 14　D区、市道部分、SX25 集石遺構出土遺物

(1・24・27：S=1/2、25・26：S=1/4)

写真図版 15　近世墓、その他出土遺物

Ⅳ 忍 館 城 跡

調査要項

遺 跡 名：忍館城跡（宮城県遺跡地名表記載番号：５９０８２　遺跡略号：YU）
所 在 地：宮城県気仙沼市浪板・大峠山
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課（現宮城県教育庁文化財課）
調査協力：国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所、NEXCO 東日本、気仙沼市教育委員会、
　　宮城県立気仙沼高等技術専門校
調査期間：分布調査　平成 29 年３月２日～３月３日
　　本発掘調査　平成 29 年８月 28 日～ 12 月 21 日、令和元年８月６日～８月７日
調査面積：2,728㎡（調査対象面積：6,600㎡）
調査員　：平成 28 年度　分布調査　生田 和宏、鈴木 啓司、永惠 裕和
　　平成 29 年度　本発掘調査　鈴木 啓司、猪股 清和、佐藤 渉
　　令和元年度　鈴木 啓司、黒田 智章

１．忍館城跡の歴史と現況

（１）忍館城跡の歴史

中世の文書に忍館城跡の記録は認められない。江戸時代の記録では、延宝年間（1673～ 1681）の『仙台領古城書上』（鈴木 1971）に「熊谷伯耆」が城主であったとの記述がある。また、明和九年（安永元年、1772）に完成した『封内風土記』（鈴木 1975）には「葛西家臣千葉信濃」の居城であった後に、「鹿折信濃」や「熊谷信濃」の城となった旨が記されている。安永九（1780）年の『風土記御用書出』（宮城県史編纂委 1958）の本吉郡北方鹿折村の条には、「御館主ハ千葉信濃」との記述がみられる。なお、1588（天正十六）年に起こった気仙郡の浜田氏と葛西氏の争いである「浜田氏の乱」においては、浜田氏側の前線基地とされた可能性が指摘されている（気仙沼市史編纂委 1988）。

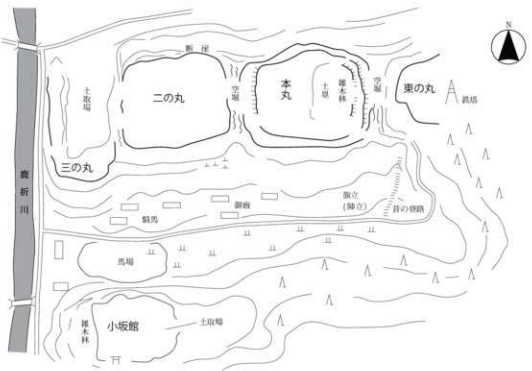
（２）忍館城跡の現況

紫桃正隆により「東西三五〇米、南北一〇〇米に及ぶ巨大な山城」と報告されている（紫桃 1973）。これによると館跡は、西から「三の丸」、「二の丸」、「本丸」、「東の丸」と平場が東西に並ぶ連郭式の構造であり、本丸が丘陵最頂部に位置し、東端には土塁が配置されていた。また、本丸の西側（二の丸との間）と東側（東の丸との間）に広大な堀跡が南北に走る様子が確認されている（第１図）。米軍による空撮写真等でも平場が並ぶ様子と本丸と二の丸の間にある堀跡を見ることができる

（写真図版１）。ただし、紫桃氏が現地を踏査した段階で西側（三の丸）は土取場と化しており、現在では遺跡の大部分が削平され、わずかに東端が残存しているのみである。

過去の記録によると、館跡は山林や耕作地となっていたが、現況は山林・荒蕪地となっている。分布調査を実施したところ、段状に広がる平場や土塁状の高まり、竪堀らしき斜面を縦走する細長い窪みを確認した。ただし、遺跡範囲の南側斜面と東の丸に相当する場所については、低木や竹の繁茂が著しかったことから、地表観察は限定的なものとなった。第２図の縄張図は、分布調査の成果と1940 年代の米軍による空撮写真、桃紫氏の論考から推定を含めて作成したものである。

なお、今回の発掘調査範囲は、紫桃氏の論考でいう本丸の東端と東の丸に位置する。



第１図　忍館城跡略図（柴桃 1973 をトレースの上一部改変）

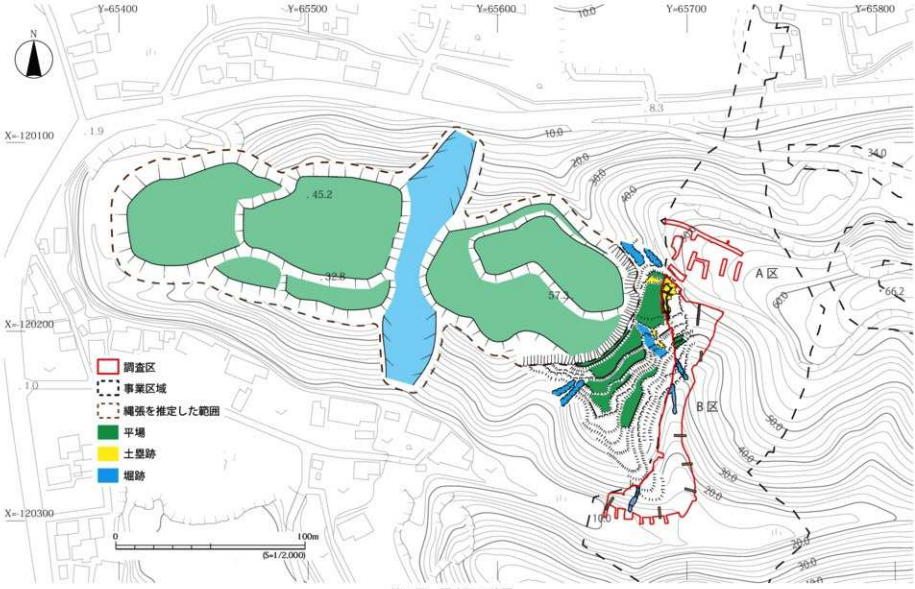
２．調査の経過

発掘調査に先立って、平成 29 年３月２日から３月３日に分布調査を実施し、館跡の縄張図を作成した（第２図）。その後、伐採等の条件整備が済んだ平成 29 年８月 28 日より発掘調査を開始し、12 月 21 日に終了した。発掘調査にあたっては調査区を南北に分け、現道を挟んだ北側をＡ区、南側をＢ区とした（第３図）。Ａ区が紫桃氏の論考でいう東の丸、Ｂ区が本丸東端に相当する。発掘調査は、工事のスケジュール等の都合によりＡ区を先行して行った。

なお、Ａ区とＢ区の間にある現道部分については、生活道路として使用中であることから、付替え工事後に調査を行うこととし、条件が整った令和元年８月６日から８月７日に調査を実施した。

Y=65400
Y=65500
Y=65600
Y=65700
X=-120100
X=-120200
X=-120300
N
45.2
37.8
37.3
遺跡範囲
縄張を推定した範囲
平場
土塁跡
堀跡
0
100m
(S=1/2,000)

第２図　忍館城跡縄張図


Y=65400
Y=65500
Y=65600
Y=65700
Y=65800
N
X=-120100
X=-120200
X=-120300
A区
B区
45.2
32.8
37.7
66.2
調査区
事業区域
縄張を推定した範囲
平場
土塁跡
堀跡
0
100m
(S=1/2,000)

第３図　調査区の位置

（1）A区

平成29年8月28日に調査を開始した。周辺の地形観察から、館跡の本体部分とみられるB区とは沢を挟んだ別地形であり、過去に実施した遺跡隣接地での鉄塔建設に係る確認調査でも遺構・遺物ともに確認されていない。6本のトレンチ（1T～6T）を設定したが、時期不明の土坑2基とカクラン層より縄文土器小片3点を確認したのみで、9月14日に調査を終了した。

（2）B区

平成29年9月19日に調査を開始した。B区は南北に入る沢地形であり、これを境にして西側の斜面に平場や堀、土塁が分布調査にて確認されている。B区は排土量が膨大になることが予想されたが、搬出は困難であり、地形的な制約から丘陵下部にストックせざるを得ないことから、まず丘陵下部の調査を実施することとし、7本のトレンチ（7T～13T）を設定した。北東隅では、現況で平坦面が段状に確認できたが、後世の耕作や植林等による造成であることが判明した。そのほかは自然地形のみであり、遺構・遺物ともに認められなかったことから、9月21日に調査を終了した。翌22日から丘陵上より表土除去を開始した。なお、堀跡3が所在する南側斜面については、盛土工事箇所であることから、遺構確認と部分的な丘陵裾部の検出にとどめた。11月9日に表土除去が終了し、11月22日に空撮を実施した。北西隅で検出した土塁跡1については、精査後に積土を除去し、下層の遺構検出を行った。12月19日に遺構精査が終了し、12月21日に機材等の撤収を行って調査を終了した。

（3）現道部分

B区北端で検出した土塁跡1が現道まで延びることが分かったことから、令和元年8月6日に調査を開始した。道路舗装を除去し、土塁跡1を検出した。遺構精査後に積土・整地層を除去し、下層の遺構検出を行った。8月7日に調査を終了した。

3．基本層序

調査区は遺跡範囲の東端に位置する。標高は北から南へ向かって低くなり、最も低いB区南側で約12m、最も高いA区で約55mである。A・B区ともに斜面が段状となっており、その大部分が後世の耕作や植林による造成であることから、A区からB区北側の一帯は自然地形や遺構が大きく改変されていると考えられる。調査区内で確認した基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層：表土。Ⅲ層由来であり、造成による崩落土等が土壌化したものである。

Ⅱ層：旧表土。黒褐色シルト。B区北端部に所在する土塁跡1の下部でのみ確認された。

Ⅲ層：地山。A区からB区北端部にかけてみられる粘土層で、SK1～3土坑の掘込み面である。地点により橙色～明黄褐色を呈する。

Ⅳ層：岩盤層。B区平場1から堀跡1周辺にみられる。黄橙色を基本とするが、標高が下がるにつれて黄褐色を呈する。

V層：岩盤層。B区中央から丘陵下部に広くみられる。岩盤に砂やシルトが混じる。

Ⅵ層：岩盤層。B区丘陵下部から南斜面にかけて広くみられる。硬質であるが、多くの節理が認められ、地表に露出している部分は割れやすい。

4．発見された遺構と遺物

館跡にともなう遺構としてB区より土塁跡1条、堀跡3条、平場1ヶ所、その他として土坑3基が発見された（第4図）。また、砥石、縄文土器、炭化米が出土した。

（1）平場

平場1（第5図、写真図版10）

〔位置・標高〕館跡の東端、土塁跡1の南、堀跡1の北に位置する。標高は40.0m ～ 40.5mである。

〔規模〕検出長は南北6.7m、東西7.8mで西に延びる。東端がカクランにより破壊されている。

〔傾斜〕平坦面は南へ緩く傾斜しているが、平坦面を挟んで北側と南側は急斜面であり、北側斜面で50°、南側斜面で35z°である。

〔造成方法〕地山を削り出した後、南端を盛土整地して平坦面を造成している。平場の北側と南側は急斜面であり、旧表土も残存していないことから、地山を削り出して切岸としているとみられる。

〔遺構〕平場上に遺構は認められなかった。

〔遺物〕遺物は出土しなかった。

（2）土塁跡

土塁跡1（第6・7図、写真図版6・7）

〔位置〕館跡の北東端、平場1の北に位置する。

〔調査前の状況〕高まりが認められた。

〔検出長・幅〕南北方向に25.3m検出した。基底幅は北端で4.5m、中央で最大8.5m、南側で最大4.2mである。

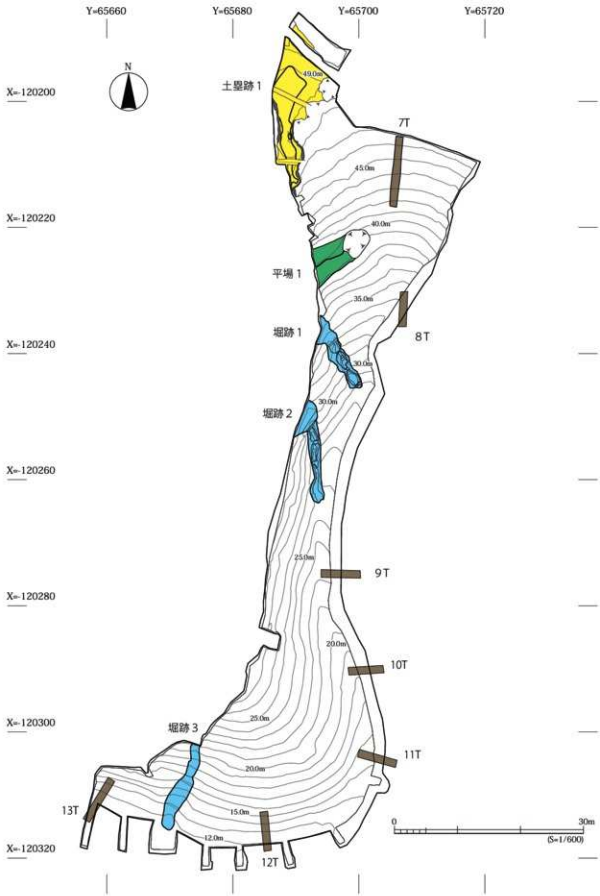
〔高さ〕西辺で0.6m ～ 0.8m、斜面に面した東辺で0.9m ～ 1.4mである。

〔積土の傾斜角度〕東辺で基底部より20°～ 50°の角度で立ち上がる。

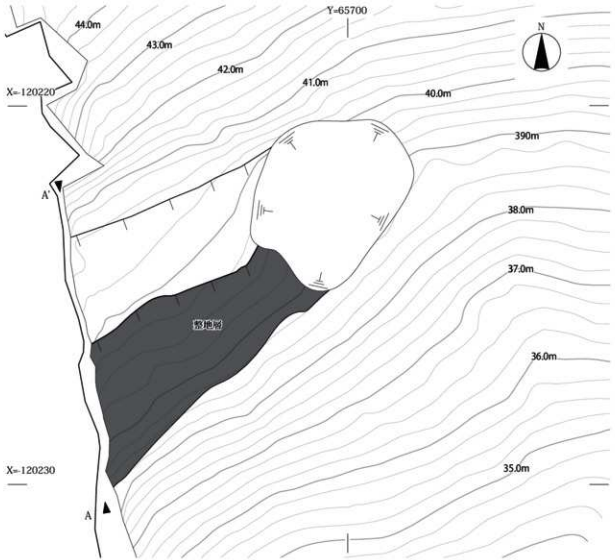
〔造成方法〕旧表土上に盛土を行っている。ただし、中央に比べ斜面に勾配がある南側では、旧表土を平坦にするように整地を行っている（9 ～ 13層）。中央では、平坦な旧表土上に西から東へ向かって盛土を行っている。なお、中央断面については、9層を境に2 ～ 8層と10 ～ 18層の土性が異なることから、2時期あるいは積土の構築課程の違いの可能性がある。また、北端では地山及び旧表土を整地した上に東西方向で平坦に土を積んでおり、北端・中央・南側で構築方法がやや異なる。

〔積土〕岩盤由来の礫・小礫・粒を含むシルト層が主体である。基底部が礫層であり、上層に向かって小礫や粒へと変化し、シルトの割合が高くなる傾向にある。

〔出土遺物〕崩落土、積土、旧表土中から遺物は出土しなかった。

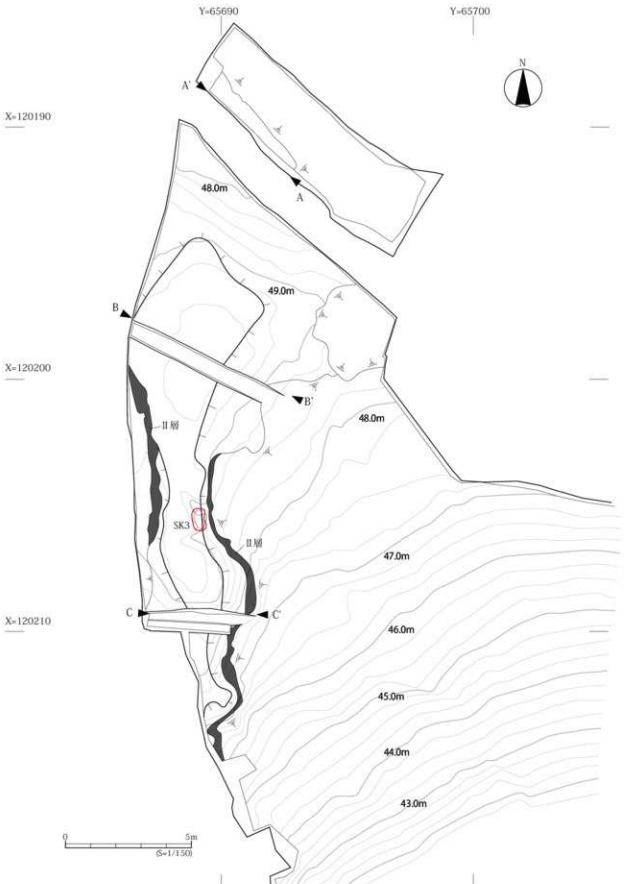


第４図　B区の遺構配置図



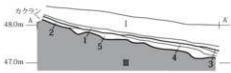
遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
平場1 A－A'	1	褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト	地山ブロック・岩盤小ブロックを含む	崩落土
	2	黄褐色 (10YR5/6)	シルト質粘土	地山ブロック・岩盤ブロックを多く含む	整地層
	3	褐色 (10YR4/6)	シルト質粘土	岩盤小ブロックを含む	整地層
	4	褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト	岩盤ブロックを多く含む	整地層

第5図　平場1平面図・断面図


Y=65690
Y=65700
N
X=120190
X=120200
X=120210
A
A'
B
B'
C
C'
48.0m
49.0m
48.0m
47.0m
46.0m
45.0m
44.0m
43.0m
Ⅱ層
Ⅱ層
SK3
0
5m
(S=1/150)

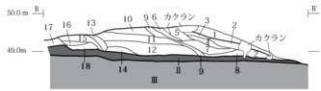
第６図　土塁跡１平面図

土壙跡 1　北端



遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
土壙跡 1 北端 A-A'	1	にぶい黄褐色 (5YR4/4)	粘土質シルト	岩盤・地山ブロックを含む	土壙埋土
	2	褐色 (7.5YR4/3)	シルト	炭化物・地山粒を含む	整地層
	3	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	炭化物・地山粒を含む	整地層
	4	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	炭化物・地山粒を含む	整地層
	5	褐色 (7.5YR4/4)	粘土質シルト	小礫を含む	整地層

土壙跡 1　中央



遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
土壙跡 1 中央 B-B'	1	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	シルト	岩盤粒を多く含み、岩盤小ブロックを少量含む	崩落土
	2	橙色 (10YR6/6)	シルト	岩盤粒を多く含む	土壙埋土
	3	黄橙色 (7.5YR7/8)	粘土質シルト	岩盤粒を少量含む	土壙埋土
	4	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	岩盤粒を多く含む	土壙埋土
	5	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	シルト	岩盤粒を少量含む	土壙埋土
	6	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	シルト	岩盤粒を少量含む	土壙埋土
	7	にぶい黄褐 (7.5YR6/4)	シルト	岩盤粒・地山小ブロックを少量含む	土壙埋土
	8	明黄褐色 (10YR7/6)	粘土質シルト	地山小ブロックを非常に多く含む	土壙埋土
	9	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	岩盤粒・ブロックを少量含む	土壙埋土
	10	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	シルト	岩盤粒を多く含む	土壙埋土
	11	橙色 (7.5YR7/6)	シルト	岩盤粒・小ブロックを非常に多く含む	土壙埋土
	12	赤褐色 (5YR4/8)	シルト	岩盤粒を多く含み、岩盤小ブロック・ブロックを非常に多く含む	土壙埋土
	13	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	岩盤粒を多く含む	土壙埋土
	14	褐色 (7.5YR4/3)	シルト	岩盤粒・小ブロックを多く含む	土壙埋土
	15	褐色 (7.5YR4/3)	シルト	岩盤粒を多く含み、岩盤小ブロックを少量含む	土壙埋土
	16	橙色 (7.5YR7/6)	シルト	岩盤粒を少量含む	土壙埋土
	17	赤褐色 (5YR4/8)	シルト	岩盤粒・地山小ブロックを少量含む	土壙埋土
	18	赤褐色 (5YR4/8)	シルト	岩盤粒を多く含み、岩盤小ブロック・ブロックを非常に多く含む	土壙埋土

土壙跡　1　南側

遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
土壙跡 1 南側 C-C'	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	岩盤粒・小ブロックを多く含む	土壙埋土
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	岩盤粒を含む	土壙埋土
	3	にぶい赤褐色 (5YR4/3)	シルト	岩盤粒を含み、岩盤ブロックを多く含む	土壙埋土
	4	暗赤褐色 (5YR3/6)	シルト	岩盤粒・小ブロックを含む	土壙埋土
	5	暗赤褐色 (5YR3/6)	シルト	岩盤粒を含む	土壙埋土
	6	赤褐色 (5YR4/8)	シルト	岩盤ブロックを非常に多く含む	土壙埋土
	7	明褐色 (7.5YR5/6)	シルト	岩盤粒・ブロックを含む	土壙埋土
	8	明褐色 (7.5YR5/6)	シルト	岩盤粒を含む	土壙埋土
	9	黒褐色 (7.5YR3/1)	シルト	岩盤粒を少量含む	整地層
	10	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	岩盤粒を少量含む	整地層
	11	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	地山粒を少量含む	整地層
	12	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山小ブロックを多く含む	整地層
	13	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山粒を少量含む	整地層

第 7 図　土壙跡 1 断面図

（3）堀跡

①堀跡１（第８・９図、写真図版８）

〔位置〕館跡の東隅、土塁跡１の南に位置する。館跡東辺を区切る沢に面しており、東端で沢筋と接続する。

〔調査前の状況〕埋まりきっており、斜面となっていた。

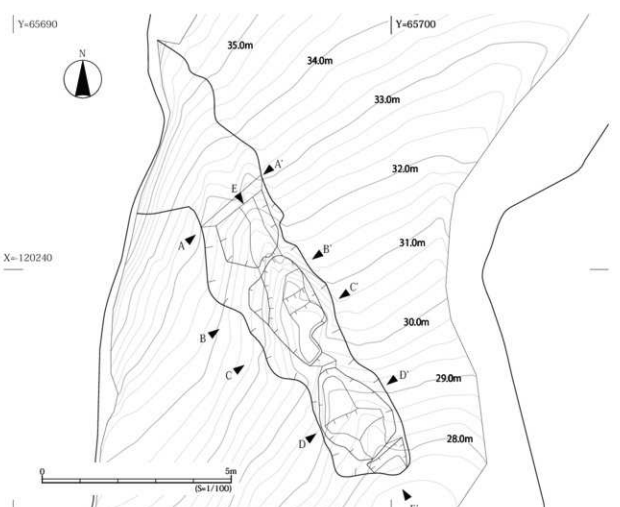
〔平面形〕ややいびつな直線状を呈している。

〔規模〕検出長は 13.0m、上幅は 2.2m、下幅は 2.0m である。深さは 0.7 ～ 1.1m である。今回　検出した西端と谷に接続する東端の高低差は、4.8m である。

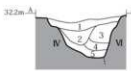
〔断面形〕逆台形を基本とするが、下部では傾斜が緩くなり、皿状となる。

〔底面の傾斜〕北西から南東へ向かって標高を下げながら傾斜する。角度は一定ではなく、長さ 0.4 m ～ 1.5m 程の段をつけながら傾斜する。

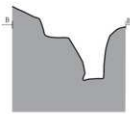
〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

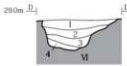


第８図　堀跡１平面図

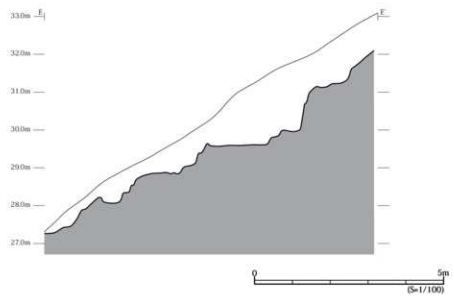


遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
堀跡1 A-A'	1	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	岩盤粒を多く含む	自然堆積
	2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	岩盤粒を多く含む	自然堆積
	3	黒褐色 (10YR3/3)	シルト	岩盤粒を多く含む	自然堆積
	4	黒褐色 (10YR2/4)	シルト	岩盤粒・小ブロックを多く含み、岩盤ブロックを少量含む	自然堆積
	5	黒褐色 (10YR3/5)	シルト	岩盤粒を多く含み、岩盤小ブロックを少量含む	自然堆積





遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
堀跡1 D-D'	1	褐色 (7.5YR4/4)	粘土質シルト	岩盤粒を少量含む	自然堆積
	2	褐色 (7.5YR4/3)	シルト質粘土	岩盤粒を含む	自然堆積
	3	褐色 (10YR4/4)	シルト質粘土	岩盤小ブロックを含む	自然堆積
	4	褐色 (10YR4/4)	シルト質粘土	岩盤ブロックを多く含む	自然堆積



第９図　堀跡１断面図

②堀跡２（第 10 ～ 12 図、写真図版９）

〔位置〕館跡の東隅、堀跡１の南に並行して隣接する。館跡東辺を区切る沢に面しており、東端で沢筋と接続する。

〔調査前の状況〕埋まりきっており、斜面となっていた。

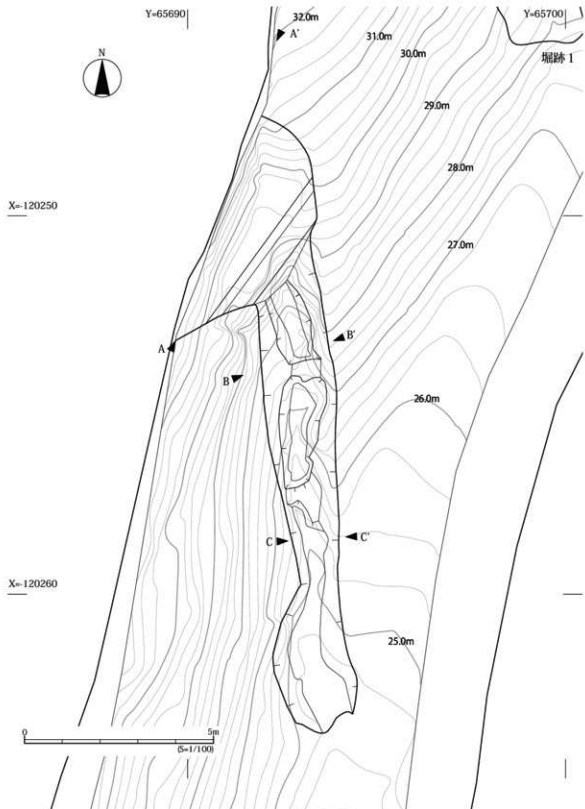
〔平面形〕直線形を呈するが、上部で大きく膨らむ。

〔規模〕検出長は 14.4m、上幅は 6.3m、下幅は 1.3m である。深さは 0.6 ～ 3.2m である。今回検出した西端と谷に接続する東端の高低差は 6.8m である。

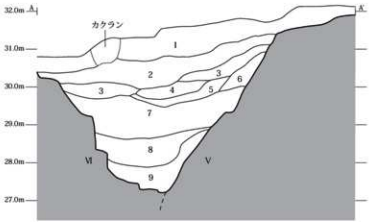
〔断面形〕逆台形である。

〔底面の傾斜〕北西から南東へ向かって標高を下げながら傾斜する。最大傾斜は 30°である。

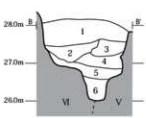
〔出土遺物〕沢筋と接続する下端部の床面直上で砥石１点と炭化米が出土した。


Y=65690
Y=65700
32.0m
31.0m
30.0m
29.0m
28.0m
27.0m
26.0m
25.0m
A'
B'
C'
A
B
C
N
X=-120250
X=-120260
堀跡 1
0
5m
(S=1/100)

第 10 図　堀跡 2 平面図



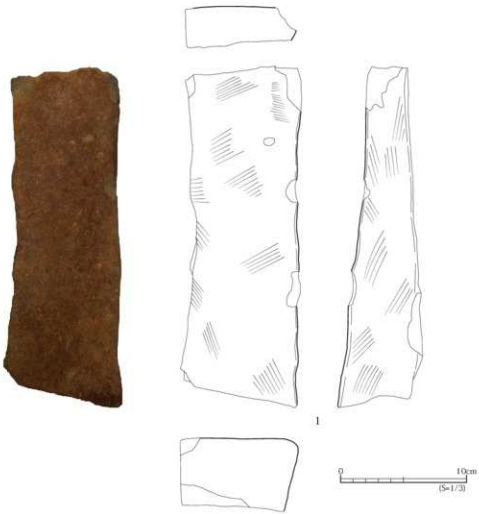
遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
堀跡 2 A-A'	1	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	岩盤粒を多く含む	自然堆積
	2	灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト	岩盤粒・岩盤小ブロックを少量含む	自然堆積
	3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	岩盤粒・岩盤小ブロックを少量含む	自然堆積
	4	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	岩盤粒を多く含み、岩盤小ブロックを少量含む	自然堆積
	5	灰白色 (10YR7/1)	砂	岩盤小ブロック・粒を非常に多く含む	自然堆積
	6	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	岩盤小ブロックを非常に多く含む	自然堆積
	7	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	岩盤粒を多く含む	自然堆積
	8	灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト	岩盤粒・岩盤小ブロックを少量含む	自然堆積
	9	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	岩盤粒・岩盤小ブロックを多く含む	自然堆積



遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
堀跡 2 B-B'	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	岩盤粒・小ブロックを多く含む	自然堆積
	2	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	岩盤粒・小ブロック・ブロックを多く含む	自然堆積
	3	灰黄褐色 (10YR6/2)	岩盤ブロック	岩盤粒・小ブロック・ブロックを多く含む	自然堆積
	4	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	岩盤粒を多く含む	自然堆積
	5	暗褐色 (10YR3/4)	シルト質砂	岩盤粒を多く含み、岩盤小ブロックを少量含む	自然堆積
	6	褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト	岩盤粒を多く含み、岩盤小ブロックを少量含む	自然堆積

遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
堀跡 2 C-C'	1	褐色 (7.5YR4/4)	粘土質シルト	岩盤小ブロックを含む	自然堆積
	2	褐色 (10YR4/6)	シルト	岩盤ブロックを多く含む	自然堆積

第 11 図　堀跡 2 断面図



No.	種類	遺構名 / 層	材質	大きさ (mm)	特徴	図版	登録番号
1	砥石	堀跡 2 / 堆	砂岩製	長さ 27cm × 幅 9.3cm × 厚さ 5.7cm	破損、磨面 2 面	—	B-1

第 12 図　堀跡 2 出土遺物

③堀跡 3（第 13 図、写真図版 10）

〔位置〕館跡の南東隅に位置する。館跡南側の沢に面しており、南端で沢筋と接続する。

〔調査前の状況〕埋まりきっており、斜面となっていた。

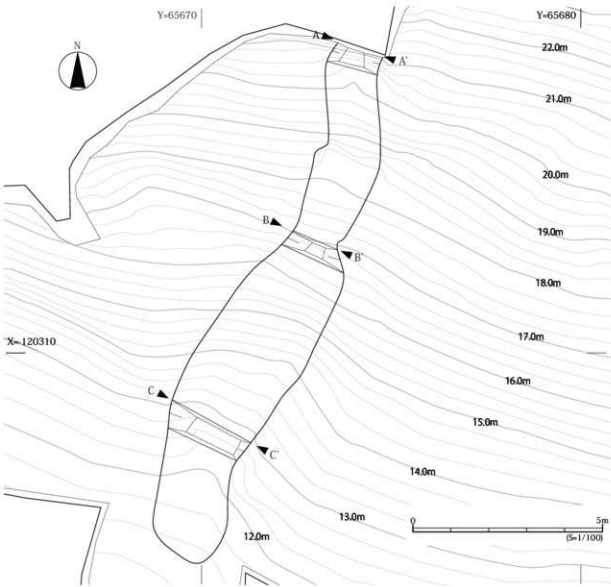
〔平面形〕やや不整ながら直線状を呈する。上部が東側へ緩く屈曲する。

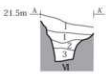
〔規模〕検出長は 14.0m、上幅は 1.4m、下幅は 1.9m である。今回検出した北端と沢に接続する南端の高低差は、10.0m である。

〔断面形〕逆台形である。

〔底面の傾斜〕北東から南西へ向かって標高を下げながら傾斜する。

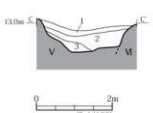
〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。





遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
堀跡 3 A-A'	1	にぶい褐色 (7.5YR3/3)	シルト	岩盤粒を含む	自然堆積
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	岩盤小ブロックを含む	自然堆積
	3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	岩盤小ブロックを含む	自然堆積
	4	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	岩盤ブロックを含む	自然堆積

遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
堀跡 3 B-B'	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	岩盤ブロックを多く含む	自然堆積
	2	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	岩盤ブロックを含む	自然堆積



遺構名	層	土色	土性	特徴	性格
堀跡 3 C-C'	1	黄褐色 (10YR4/3)	シルト	岩盤小ブロックを非常に多く含む	自然堆積
	2	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂質シルト	岩盤ブロックを非常に多く含む	自然堆積
	3	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	岩盤ブロックを非常に多く含む	自然堆積

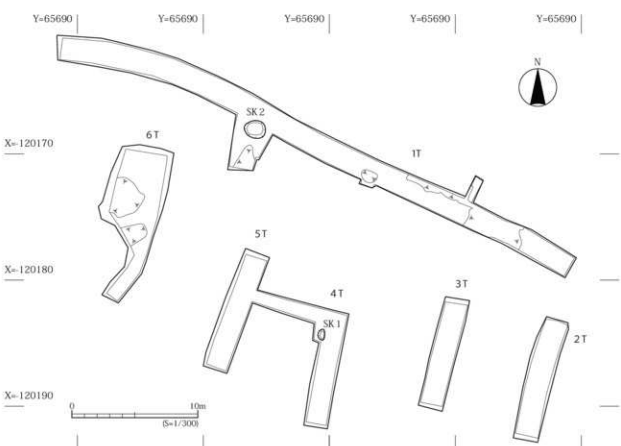
第 13 図　堀跡 3 平面図・断面図

（4）その他の遺構（第6・14図、表1）

A区にて土坑2基（SK1・2）、B区にて土塁跡1の下層より土坑1基（SK3）が発見された。いずれも出土遺物はなく、SK3が土塁跡1より古いことが分かるのみで、詳しい時期は不明である。ただしSK1・SK2については、堆積土の様子から新しい時期のものであるとみられる。なお、A区1トレンチSK2付近のカクラン層より縄文土器小片が出土した。

表1　その他の遺構一覧

位置	遺構	平面形	断面形	規模（m）	堆積土	出土遺物	備考
A区	SK1	楕円形	皿状	0.9 × 0.6 × 0.2	にぶい黄褐色	なし	
A区	SK2	楕円形	皿状	1.7 × 1.4 × 0.5	にぶい黄褐色	なし	
B区	SK3	長楕円形	皿状	0.9 × 0.6 × 0.2	褐色	なし	土塁跡1より古い



第14図　A区平面図

5．自然科学分析

（1）はじめに

今回の調査では土器・陶磁器等の出土がなく、館跡の機能した年代を特定することができなかった。しかし、堀跡２の床面直上より炭化米が出土したことから、館跡の機能した時期を推定することを目的として、この炭化米を対象に放射性炭素年代測定（AMS 測定）を実施した。分析は、株式会社加速器分析研究所に委託して行った。

（2）忍館城跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

宮城県気仙沼市に所在する忍館城跡で出土した炭化米１点を測定対象試料とする（表２）。忍館城跡は15世紀から16世紀代の城館跡と推定される。炭化米は堀跡２の床面直上からまとまって出土し、化学処理を十分に行うために４個を１試料として使用した。

2　測定の意義

館跡の機能していた年代を推定するため。

3　化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

（2）酸 - アルカリ - 酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表２に記載する。

（3）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（5）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（6）グラファイトを内径１mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4　測定方法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

（1）$\delta^{13}C$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表2）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（2）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は $\delta^{13}C$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表2に、補正していない値を参考値として表3に示した。^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±1 σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

（3）pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}C$ によって補正する必要があるため、補正した値を表2に、補正していない値を参考値として表3に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1 σ = 68.2％）あるいは2標準偏差（2 σ = 95.4％）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、$\delta^{13}C$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.3 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表3に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6　測定結果

測定結果を表2、3に示す。

試料の ^{14}C 年代は 320 ± 20yrBP、暦年較正年代（1 σ）は 1522 ～ 1640cal AD の間に3つの範囲で示される。16 世紀から 17 世紀頃の年代値を示し、城館として機能していたと推定される時期を含むか、やや新しい結果となった。

試料の炭素含有率は 65％の適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表2　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}C$ 補正値）

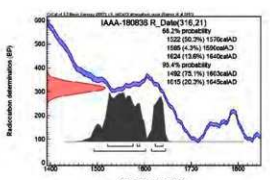
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}C$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}C$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA－180836	堀跡　2-No.1	遺構：溝跡２　床面直上	炭化米	AAA	-25.72 ± 0.38	320 ± 20	96.14 ± 0.26

［IAA 登録番号：＃ 9197］

表3　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}C$ 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	$\delta^{13}C$ 補正あり		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA－180836	330 ± 20	96.00 ± 0.25	316 ± 21	1522calAD - 1576calAD (50.3%) 1585calAD - 1590calAD (4.3%) 1624calAD - 1640calAD (13.6%)	1492calAD - 1603calAD (75.1%) 1615calAD - 1645calAD (20.3%)

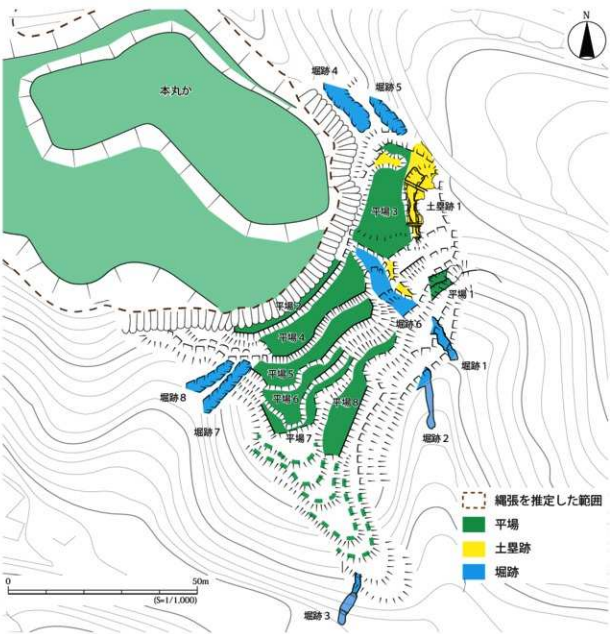
［参考値］



第 15 図　暦年較正年代グラフ（参考）

6．総括

今回の調査によって確認された遺構は、土塁跡１条、堀跡３条、平場１ヶ所、土坑３基である。出土遺物は乏しく、中世から近世の土器・陶磁器は全く出土していないことから、詳細な年代に関する検討は出来ない。ここでは、館跡にともなう遺構の特徴を中心にまとめ、館跡について若干検討する。なお、ここでは分布調査にて確認された地上顕在遺構についても言及することから、便宜的に遺構ごとに番号をつけて呼称する（第 16 図）。



第 16 図　忍館城跡東端部の構造

（1）館跡にともなう遺構の特徴

①平場

平場1は、館跡東端の斜面に沿うようにつくられた小曲輪状の施設である。堀跡1との位置関係と調査区外の地表観察から、斜面南西側にて平場は収束するものとみられる。平場1の南半に広がる整地層は南へ傾斜しており、後世の植林等によって改変を受けていると思われるが、規模が狭いことから、建物はなかったものとみられる。

②土塁跡

土塁跡1は、今回の調査にて最も高所にて確認された館跡にともなう遺構である。館跡北東端に位置し、植林や現道の開削等により大きく改変を受けているが、平面形は南北方向に延びる直線状であると考えられる。構築方法は北端・中央・南で異なり、北端部では地山及び旧表土を整地して土を積んでいる。積土は残存状況が悪いため詳細は不明であるが、東西方向に平坦に積んでいるものと推定される。中央では平坦な旧表土上に約2.5mごとに土を西から東へ積んでいったのに対し、南ではまず旧表土を整地しており、その後に中央部へ土を積み、次に左右に土を積んでいる。これは、地山が北端では標高が低く中央が高いこと、北端から中央では東西方向で平坦なのに対し、南側では西から東へ傾斜していることによると考えられる。

なお、中央では土塁東端の土性が南側と異なるため、改修された可能性があるが、旧表土を改変した痕跡がないことから、構築過程の違いと捉えたい。

③堀跡

堀跡1・2・3いずれも斜面に対し垂直に延びる「竪堀」であり、検出長は約13～14mである。館跡の東端及び南東隅に位置し、堀跡3の最下部から堀跡1の最下部までの比高差は16mである。堀跡1・2については、底面が段状となっており、通路として利用された可能性がある。

堀跡2の床面直上から出土した炭化米が、放射性炭素年代測定で1522年～1640年とする結果がでたことから、これが館跡の機能した年代の目安になる。

（2）忍館城跡の構造について

①館跡の範囲

A区では館跡にともなう遺構は発見されなかった。また、B区でも土塁跡1、平場1、堀跡1・2より東の沢筋では遺構は認められなかった。館跡東側の地形を観察すると、B区では南北に大きな沢が入り、A区にて尾根が北西方向へ傾斜することが分かる。さらに、分布調査にて土塁跡1の北西側に堀跡4・5が存在するとみられることから、館跡の範囲はB区の沢筋を東端とし、土塁跡1を北東隅とし、尾根筋に沿って北西側へ収束すると考えられる。

②発見された遺構の位置づけ

今回の調査で確認された土塁跡・堀跡・平場は、館跡の東端に配置された防御施設であり、分布調査にて確認された地上顕在遺構と合わせて城域の後方に位置すると考えられる。ここでは分布調査の

成果と合わせて、過去の記録から推定される館跡の全体構造の中に各遺構を位置づける。

平場　平場1のほか、分布調査にて顕在する平場が見られ（平場2～8）、堀跡1・6によって大きく南北に分かれている。この内、平場2・3は削平された「本丸」の腰曲輪状の平場の残欠である可能性がある。後述するように堀跡1・6が館跡東側の通路とする場合、これらの平場群は、通路を北東側と南西側から挟むように位置しており、両側から通路の監視や防御の役割を担ったとみられる。

土塁跡　土塁跡1は植林や道路の開削等により改変を受けているが、館跡の北東隅で直線状に展開すると考えられる。なお、土塁跡1の西側に高まりが見られることから、土塁跡1が北西へ鉤状に曲がる可能性もある。

堀跡　館跡の中央には、「本丸」と「二の丸」の間に巨大な堀切が存在したものと考えられるが、東側では竪堀が多く設けられている（堀跡1～8）。沢の自然地形を活かして設けられたものとみられ、南斜面・北東斜面からの進入を遮断する目的と考えられる。また、堀跡6は位置関係から、堀跡1と同一の堀跡とみられ、堀の全長は約40.0mとなる。堀跡1は、底面を明確に段状に掘込んでいることから、通行を強く意識しているとみられ、これが館跡後方（搦手）の通路と推定される。

（3）館跡の年代について

今回の調査と過去の記録により、忍館城跡は連郭式の縄張りであり、東端部は小規模な平場群と竪堀、土塁を配置していたことが分かったことから、その構造についてはおおむね把握することができた。しかし、出土遺物が乏しいことから、築城年代と廃絶年代を明らかにすることはできなかった。ただし、文献では「源姓及川氏略譜」によると、及川重時が永正十一（1514）年に下鹿折邑を葛西氏より賜り、忍館にいるとの記述がある（米川村村誌編纂委1955）。また、堀跡2より出土した炭化米の年代が1522年～1640年に収まることから、これが館跡の機能した年代の目安となる。よって館跡は、おおむね16世紀代には機能していたと推定される。なお、『風土記御用書出』によると、館跡廃絶後は安永年間には畑となっていたとみられる。

7．まとめ

1　忍館城跡は気仙沼市浪板・大峠山に所在する城館跡であり、気仙沼湾最奥の鹿折川河口の左岸にある東西に延びる丘陵の西端に立地する。発掘調査の結果、館跡にともなう土塁跡１条、堀跡３条、平場１ヶ所を検出した。また、その他の遺構として土坑３基を検出した。

2　堀跡から砥石と炭化米が出土した。その他、縄文土器小片が出土した。

3　館跡の大部分は既に削平されているが、発掘調査及び分布調査、過去の記録から連郭式の構造であることが推定され、今回調査したのは館跡の東端部にあたる。

4　館跡の東端部は小規模な平場群と土塁、多くの竪堀が配置されており、推定される「本丸」の後方（搦手）にあたる。

5　これらの施設は、丘陵北東斜面や南斜面からの進入を防ぐねらいがあると考えられるが、堀跡１については、構築方法や分布調査にて確認した地上顕在遺構との位置関係から、「本丸」後方から城域へ入るための通路であったとみられる。

6　築城年代と廃絶年代については明らかではないが、文献や堀跡２より出土した炭化米の分析結果から、館跡は 16 世紀代には機能したと推定される。

【引用・参考文献】

気仙沼市教育委員会　1995『気仙沼市洞窟地域調査報告書』気仙沼市文化財調査報告書第７号

気仙沼市史編纂委員会　1988『気仙沼市史Ⅱ　先史・古代・中世編』

1998『気仙沼市史　補遺編　考古・古文書等資料』

紫桃　正隆　1973『史料　仙台領内古城・館』第２巻

鈴木　武夫　1971『仙台叢書　復刻版』第四巻

1975『復刻版　仙台叢書　封内風土記』第二巻

登米郡米川村誌編纂委員会　1955『登米郡米川村誌』

宮城県教育委員会

1981「５．赤岩館経塚」『東北地建バイパス関係遺跡調査報告書』宮城県文化財調査報告 76 集

1983「八谷館跡・御所館跡・駒場館跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅷ　宮城県文化財調査報告書第 93 集

2006『上楯城跡』宮城県文化財調査報告書第 207 集

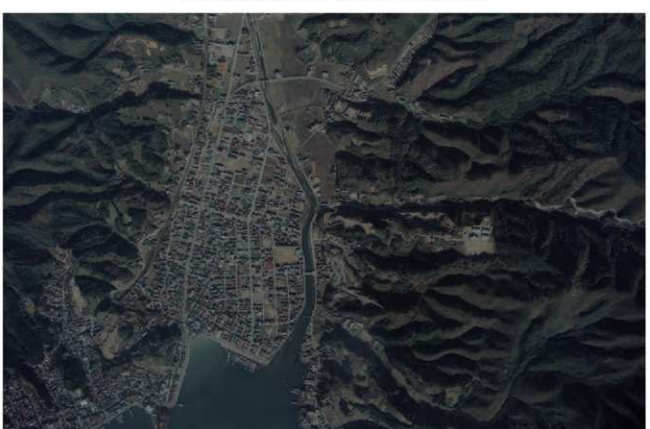
2009『石森館跡』宮城県文化財調査報告書第 220 集

宮城県史編纂委員会　1958『宮城県史』26（資料編４）

1970『宮城県史』32（資料編９）

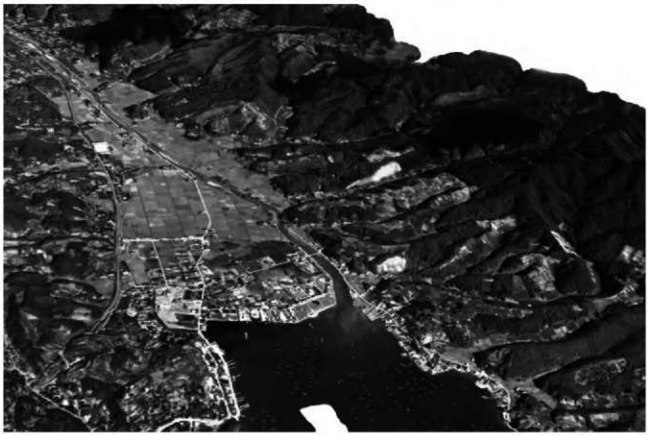
宮城県南三陸町教育委員会　2016『新井田館跡 - 津波復興拠点整備事業（志津川中央地区）に係る発掘調査報告書』南三陸町文化財調査報告書第１集

1　忍館城跡周辺の状況（1948年　米軍空撮：整理番号 USA-R1782-33）

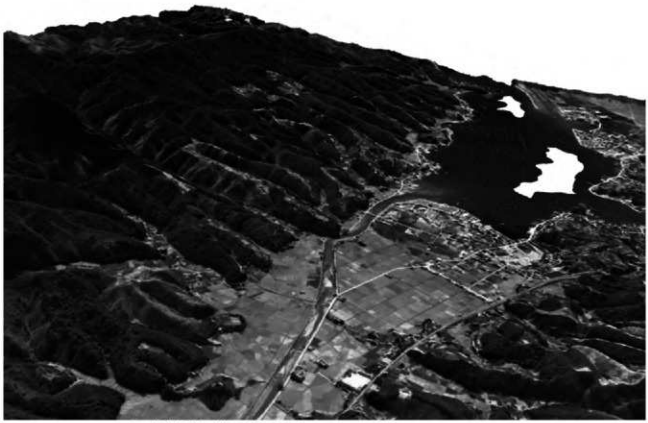


2　忍館城跡周辺の状況（1977年　国土地理院空撮：整理番号 CTO779-C6-30）

写真図版1　忍館城跡周辺の状況



1　館跡と周辺の様子（南西から）※米軍空撮：整理番号 USA-R1782-33 を基に作成



2　館跡と周辺の様子（北西から）※米軍空撮：整理番号 USA-R1782-33 を基に作成

写真図版２　遺跡と周辺の様子（3D 復元）

1　遺跡と調査区の全景（南から）

2　遺跡と調査区の全景（西から）

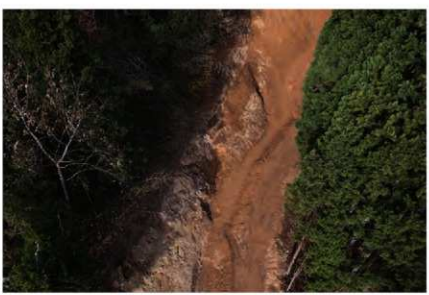
写真図版３　遺跡・調査区の全景（１）

1　遺跡と調査区の全景（真上から：下が南）

2　調査区の全景（東南から）

写真図版４　遺跡・調査区の全景（２）

1　土塁跡１全景（真上から：上が北）



2　堀跡１・２全景（真上から:上が北）

3　堀跡３全景（真上から：上が北）

写真図版５　Ｂ区遺構の全景

1　土塁跡１全景（東から）

2　土塁跡１全景（北から）

写真図版６　Ｂ区土塁跡１（１）

1　土塁跡１検出状況（北東から）

2　土塁跡１の規模（北東から）

3　土塁跡１南側断面（南から）

4　土塁跡１南側断面（南から）

5　土塁跡１中央断面（南西から）

6　土塁跡１中央断面（南西から）

7　土塁跡１北端部検出状況（東から）

8　土塁跡１北端部断面（北東から）

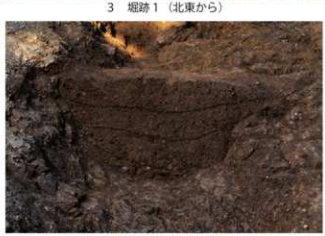
写真図版７　Ｂ区土塁跡１（２）

1　堀跡１全景（南東から）

2　堀跡１（東から）

3　堀跡１（北東から）

4　堀跡１上部断面（南東から）



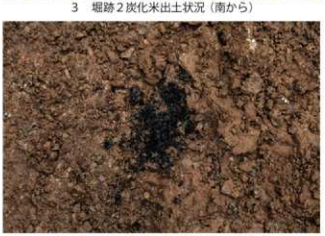
5　堀跡１下部断面（南東から）

写真図版８　Ｂ区堀跡１

1　堀跡２全景（南から）

2　堀跡２断面（南から）

3　堀跡２炭化米出土状況（南から）



4　堀跡２炭化米出土状況・拡大（南から）

写真図版９　Ｂ区堀跡２

1　堀跡1・2全景（南から）

2　堀跡1・2の規模（南から）

3　堀跡3全景（南から）

4　堀跡3上部断面（南西から）

5　堀跡3中央部断面（南西から）

6　堀跡3下部断面（南西から）

7　平場1断面（東から）

8　B区北側の遺構配置図（東から）

写真図版10　B区堀跡1・2・3、平場1

報 告 書 抄 録

ふ り が な	こやだてじょうあと・しのぶだてじょうあと
書　　名	小屋館城跡・忍館城跡
副 書 名	三陸沿岸道路 気仙沼道路建設関連遺跡調査報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第 253 集
編 著 者 名	鈴木啓司（編）・佐藤渉・猪股清和
編 集 機 関	宮城県教育委員会
所　在　地	〒 980-8423　宮城県仙台市青葉区本町三丁目 8 番 1 号　電話 022-211-3684
発 行 年 月 日	西暦 2020 年　3 月 16 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	世界測地系 北緯	世界測地系 東経	調査期間	調査面積	調査原因
こやだてじょうあと 小屋館城跡	みやぎけんけせんぬまし 宮城県気仙沼市 まつざきなかまき 松崎中瀬	04205	59049	38 度 52 分 26 秒	141 度 34 分 53 秒	2014.11.17 ～ 11.19 2015.06.23 2016.07.04 ～ 12.02 2017.06.05 ～ 08.31 2018.04.23 ～ 07.31 2019.06.03 ～ 06.05	5,216㎡	三陸沿岸道路建設事業
しのぶだてじょうあと 忍館城跡	みやぎけんけせんぬまし 宮城県仙台沼市 ちかいた　おおとうげやま 浪板・大峠山	04205	59082	38 度 54 分 53 秒	141 度 35 分 27 秒	2017.03.02 ～ 03.03 2017.08.28 ～ 12.21 2019.08.06 ～ 08.07	2,728㎡	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小屋館城跡	城館	中世	平場、堀跡、溝跡、集石遺構、整地層	陶器、石臼、人骨	館跡北縁で二重の長大な堀跡を検出。集石遺構より人骨が出土。
	集落	近世	掘立柱建物跡、近世墓	柄鏡、銭貨、煙管、刀子	
忍館城跡	城館	中世	平場、土塁跡、堀跡	砥石、炭化米	館跡北東隅で平場、土塁跡、堀跡を検出。

要　約

小屋館城跡は、気仙沼湾と大島を東に望む丘陵の先端に立地する。館跡に伴う遺構として、平場 1 ヶ所、切岸 1 ヶ所、堀跡 2 条、整地層 2 ヶ所、溝跡 1 条、集石遺構 1 ヶ所を検出した。また、その他の遺構として掘立柱建物跡 9 棟、柱列跡 2 条、地下室状遺構 1 基、近世墓 10 基などを検出した。堀跡は、自然地形を活かしてつくられた館跡北縁の丘陵を断ち切る長大なものである。また、集石遺構から人骨が出土しており、15 世紀後葉から 17 世紀前葉の年代が AMS 分析によって示されている。集石遺構が堀跡の埋没過程で構築されていることから、館跡の機能した年代は、おおよそ 15 世紀～ 16 世紀前後と推定される。

忍館城跡は、気仙沼湾の最奥、鹿折川河口左岸の丘陵上に立地する。館跡に伴う遺構として、平場 1 ヶ所、土塁跡 1 条、堀跡 3 条を検出した。これらの遺構は、館跡東端部に位置し、過去の分布調査等の成果から、搦手の防御施設であり、堀跡が通路であったと推定される。堀跡の底面付近から炭化米が出土しており、AMS 分析の結果、16 世紀前葉から 17 世紀前半の年代が示されたことから、館跡はおおむね 16 世紀代には機能していたものと推定される。

宮城県文化財調査報告書第253集

小屋館城跡・忍館城跡

―三陸沿岸道路 気仙沼道路建設関連遺跡調査報告書―

令和2年3月9日　印刷
令和2年3月16日　発行

発行　宮城県教育委員会
〒980-8423　仙台市青葉区本町三丁目8番1号

印刷　株式会社　東北プリント
〒980-0822　仙台市青葉区立町24－24